THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿一年　第六号

寶丹容器秤量改正及び包装一定に改良の禀告

●大方の諸君益々御清榮恭賀奉り候隨つて家製寶丹の義御愛顧を以て日に增隆盛加ふるに海外の諸邦へ輸出頻運に至り特に清韓兩國の如きは近時著しく增進致し拙家の幸慶は申す迄も之れなく聊か御國恩の萬分の一に酬ひ奉り候義と深く感銘罷在候然る處寶丹の原料に使用致し候『雲南麝香』『龍腦』の如きは內地に產出致さず年々騰貴の一方に傾き居り候折柄本年『改正關稅定率法』御發布の決果前記原料に過重の增稅相成原價非常の昂騰を來たし從來の定價金拾錢器を始め總て定價を引上る歟或は容器を小形として從前の定價を存續する歟此二途の外これなく今や戰後の經營として一大發展を期すべきの時に當り此困難に遭遇し熟々考慮仕候處清韓兩國の如き未だ購買力の低き邦土へ輸出すべき品價としては是非共定價拾錢の器を存續し置べき必要これあり止を得ず來る十月十一日より拾錢器を始め總て順次容器を改正いたし候これによりて拾錢器は最も輕量と相成候をもつて當座御便用には相適し候得ども若し救急の御備用に遊ばされ候には多量を要し候に依り貳拾錢器以上の品御用命仰付られ度願上奉り候勿論藥劑の義は從前の通り極めて精撰益々其効驗の顯著ならんことを希圖致候あひだ何卒前條御汲量成下され倍舊の御愛顧を賜はらんことを偏に祈上奉り候也

寶丹本舖　東京市下谷區池之端仲町貳拾七號所有地

十世　守田治兵衛　謹白



●追伸拾錢器包裝の儀御携帶及び運輸其の他の便益を主とし來る六月十一日より貳拾錢器以上と同樣の包裝に體裁改良かつ歐文効能書」へ別に登錄商標を赤色に印行　猶主治服方記の裏面をこれ又赤色に印刷いたし候間前條篤と御諒承置願上奉り候再拜

中央公論

秋期大附錄號

豫告

我「中央公論」は清秋九月を以て秋期大附錄號を發行せんとし、左の諸大家より寄稿の快諾を得たり

小說　夏目漱石氏

小說　島崎藤村氏

小說　國木田獨步氏

論文　金子筑水氏

論文　綱島梁川氏

新思潮、新趣味の代表者たる五大家によつて成る本號の價値を呶々するは却て愚なるべきを信ず。故に吾人はいはず。偏へに江湖の判斷に一任す。

中央公論第二十一年第六號目次



第二十一年
第六號
(二百七號)

戰後の對露滿韓方針

首相西園寺侯密かに滿韓の各地を巡視して歸るや、其の經營の事また世論に上り、而して我が公使本野氏露都に至り、彼の公使バクメチエフ氏東京に來りて、彼我の國交略々復舊するに及び、ポーツマス條約に由て更に締結すべき諸種の條約また問題となり、對露方針に關する議論一二に非ず、此の時に方つて吾人聊か卑見の一端を陳ずる、また操觚者の責務なるを信ず

上（一）

韓國に於ける我が外交權は略々確立せられたり、世或は露國に異議あり、其の總領事プランソン氏赴任の途次東京に來れる、また茲に爲すあらんが爲めなりといふ、然れども露國政府が列國に倣ふて再び公使を置かず、總領事をして韓國に於ける自國民の利權保護に任ぜしめんとするを觀れば、少くも今日格別の異議なきや察知すべし

但し露國の官僚は最も陰謀を好むものなり、而して韓國上流社會の人また大抵面從背非、朝暮に依る所を變じて其の間に詭計を弄し、以て少しにても自から利せんとする習癖あり、隨つて彼此相通じて何か企畫を試むることあるや論なけん、然れども其の陰謀詭計なるもの素より確立たる目的あるに非ず、畢竟火事場泥棒と擇ぶ無ければ、寧ろ輕く之を觀るに如かず、若し之を危惧して施設百端すれば、猶ほ拙劣なる碁客が敵手に眩せらるゝが如く、自から惶惑して自から敗跌するに過ぎざれば也

且つ韓人が無用なる詭計を弄するは、却つて韓王の累を爲すに過ぎずして、其の結果の益々我が權勢を張るの便に供するに過ぎざるや言を俟たず、露國の如きは常に教唆煽動によりて此の種の詭計を弄せしめ、其の機會を利用して而して自から勢力を擴張するを例とす、我れ自から露國に傚はざる、韓人強ひて事端を滋くせば、我れは求めずして韓國の權勢を縮少し得べし、露人の陰謀、韓人の詭計如何ぞ危惧するの要あらんや

露國が極力浦鹽斯德の經營を大にするは、韓人の事大心を刺衝するヿ素より少からざるべし、然れども思へ、露國軍隊を以て豆滿江を渡るも、大兵を南下せしむるヿ至難なり、其の海軍を日本に滅亡せしめられて、唯だ陸路南下の外一策なき間、露軍の勢力は到底鏡城城津以南に及ぶヿ能はず、韓人愚なりと雖も竟に之を知るべく、知りて、而して露國の多く恃むに足らざるを悟るや必せり、故に露國は到底韓國に於て大なる憂患たらず

（二）

韓國に於ける列國人既得の權利は素より之を尊重せざる可らず、將た條約に由て得べき權利利益も亦之を防害し阻止せざるヿ勿論なり、然れども之と衝突せざる範圍に於て、我れは十二分に其の利源の開發に努めざる可らず、而して牧畜耕耘を盛んにするが如き、利源開發の第一着手たるべきもの也

韓國の利源を開發するは、單に我が國人のために非ず、又實に韓人のため也、韓國のためなり、否一般人類のためなり、國に利源あるも之を開かず、人民をして常に貧弱に窮困せしむるが如きは、殆んど天物を暴殄するに齊しければなり

（三）

韓國に於て、我が宗主權を十分に確立し、外國をして一指だも染めしめざるヿは、我が對韓の大方針たらざる可らず、我が清國と戰ひ、露國と戰ひ、前後百餘萬の大兵を動かし、十餘萬の生靈を殞し、幾萬億の巨費を糜したる、皆此がためなれば也

然れども我れは徒らに韓國を併呑する者に非ず、韓民のために天に代つて道を行ふのみ、我が眞目的は我が利權を擴張すると共に亦多數韓人の爲にするにあり

此の主趣に由りて、我れは先づ韓人の生命財産の安全を保障すべき法律を定むるを要す、韓王及び韓官の暴横なる。民を虐するを到らざるなく、恣に人民を捕縛し拷問し殺傷し、恣に課税し誅求して甚だしきは乃ち人民の一家を夷し全財産を沒收するに至ればなり、

韓人が懶惰性を成し、從つて貧窮愚昧なる實に此がためなれば也、曾て隋唐の文物を傳來して彬々光輝を放てる其の工藝が今や一空して殆んど痕迹だも留めざる、亦また之がためなればなり

中（一）

滿洲を開放し、機會均等主義を執るとは、啻だに日露戰役以前に於て我が聲言したる所なるのみに非ず、ポーツマス條約に於て之を確定し、爾來屢々列國に之を聲明したる所なり

此の主義は我が國家の信用上、必らず之を實行せざる可らず、而して我が利益も亦其の中に在り

韓國に於ては我れ斷じて他をして一指だも染めしむ可らず、而して露國の如き未だ眞に韓國の憂たるに足らずと雖も、滿洲に在ては乃ち然ると能はず、奉天戰役後露國は實に百萬に達したりき、將來少くも五十萬の露軍は滿洲に入るを得べく、現に哈爾賓が其の勢力範圍たるに於て、此の掛念最も切ならざるを得ず、

乃ち滿洲の深患は依然として露國なり、我が之に對する到底韓國と同じきを得ざるのみ

露國の勢力が哈爾賓以北に於て優等なるが如く、我が勢力は長春以南に於て殊に優越なるべし、隨つて我が利害の關係最も深きがため、我が經營を要するや列國の上に位すべきは勿論、或は之を侵略より援ふがため武力を用ひざる可らざるも亦必無ならず、然れども求めて我が獨力を以て露國と拮抗するは明智に非ず、寧ろ之を列國に開放し、列國の利害關係を親密ならしむるに如かず、然るときは露國若し南下して滿洲を侵略せんとせば、啻だに日本のみならず、列國とも抗爭

せざるを得ざるに至れば也、斯の如きは露國の寧ろ避くべき所なれば也

且つ列國の智識と資本とを注入せば、滿洲の開發極めて便宜を得て、我が日本及び列國の利益たるに止まらず、又實に滿洲土人の幸ひにして淸國の福也、否世界人類の利益なるべし

此の主義によりて滿洲を開放し、而して諸種の經營を爲さば、事百端と雖も總て條理貫通し、また多く惑ふ所なきを得ん

（二）

滿洲開放と同時に必要なるは大連を自由港と爲すに在り

露國が旅順口大連に據り、哈爾賓を連ねて滿洲を奄有するや、其大發達を期して大連を自由港とし、其港の灣を開修し棧橋を築造したり、茲に於て滿洲及び西伯利亞を出入する貨物翕然として茲に集まり、彼の浦鹽斯德の如き擧て其繁榮を奪はるゝ姿なりき、蓋し浦鹽斯德に於て苛酷なる關稅を課するに反して、大連は全然無稅なるが故に、貨物は勢ひ之に出るに至れるのみ

此の事實は大連を自由港とする利益の明證なり、多く列國の智識と資本とを吸集し、速かに滿洲の利源を開發して、列國の利害關係を密邇せしめんとせば、大連を自由港として滿洲繁榮の途を開くに如かず、之に由て英米其の他の貨物廉價にして滿洲に入り、滿洲を透して淸國及び西伯利亞に入り、同時に蒙古及び滿洲の原料品多く國外に輸出さるべければ也

且つ東淸鐵道を有利の事業たらしめ、浦鹽斯德と繁榮々競爭せしめんとせば、また大連を自由港と爲すを以て第一義とす、想ふに露國は浦鹽斯德を東亞唯一の商港とし、之を第二の大連たらしむるの目的を以て、開戰以來實際自由港の有樣にあるを幸ひ、永く自由港として列國の貨物を吸集せんとすべく、且つ西伯利亞鐵道を歐亞聯絡の大交通線と爲し、更に浦鹽斯德より東洋の各港に航路を聯絡せしめ、歐亞の旅客貨物をして悉く浦鹽斯德より出入せしむる手段を執るべし、我が大連は乃ち之と競爭せざる可らざる地位にあり、即

ち哈爾賓より東北を迂回して、浦鹽斯徳に至るべき旅客貨物をして、哈爾賓より直ちに南下して大連に至らしめざる可らず、之がため大連を自由港とし、併せて東清鐵道を巧みに經營するの必要あり

(三)

長春以南の東清鐵道は我が戰利品中最も價値あるもの丶一なり、之を利用すると否とは殊に滿洲經營の成否に關係あり

此の鐵道は、第一に歐亞の旅客貨物を吸集するがため、其の車室を美麗快適ならしめ、其の速力及び搭載力を大ならしむるを要す、第二に遼河の水運と競爭するため、大豆、豆粕、棉布、羊毛、木材等の運賃を低廉ならしめ、貨物の輸送分配を敏捷便利ならしむるを要す、第三に撫順の石炭を輸送し、且つ一旦緩急あるに方つては、軍隊を急速に輸送するため、殊に其の搭載力を大ならしむるを要す

此がため其の鐵軌は之を四呎八吋半の廣軌に改造し、其の機關車を米國式の最も牽引力の大なるものとし、貨車列車も亦之に倣はしめざる可らず、現在の如く狭軌式とせば其の速力及び輸送力大なること能はず、假令内地より機關車車輛を轉用し得るの便利あるも、而かも韓國鐵道と聯絡する能はず、又清國鐵道とも聯絡するを得ず、又露國式に復舊せば長春に於て西伯利亞線に聯絡するに於て極めて便なるも、清韓の鐵道と聯絡し得ざるは勿論、内地の機關車車輛を轉用する便宜もあらず、之を廣軌式とせば其の速力搭載力共に大にして第一清韓鐵道と聯絡し、且つ需要あれば急速に其の機關車車輛を英米より購入して、毫も不便を感ぜざるの利益あり、改造の費用假令少からずとも斷じて之を實行するを要す

或は此の鐵道を株式組織とし、一半を我が政府の有とし、一半を列國人に所有せしむべしといふものあり、また一説なり、吾人の見に據れば、其の總株の六分を我が政府の有とし、他の四分を日清英米獨佛人の所有とし、而して其の運轉は之を内地の鐵道と同じく政府の手に於てするを最も妙とす、列國人の所有すべ

き株金を以て、鐵道改造の費用に供すると最も妙なり

（四）

撫順炭坑は世界有數の大炭坑にして、恐らくば滿洲に於ける最大富源の随一なるべし、之を拂下げて民營とするの説あるも吾人は與みせず、寧ろ政府の手にて採掘し、主として之を露國の西伯利亞鐵道燃料に供給し、兼て北部滿洲及び西伯利亞に在る露人の燃料として之を賣るべし、更に我が九州炭の販路を妨害せざる範圍に於て、南北清及びマニラ、新嘉坡等に販賣すべし

鴨綠江伐木の利も亦重要なるものなり、我が官民共に其の利源を開拓するに鋭意して、共に壟斷すべからず

滿洲に於ける電信、郵便及び電話は努めて我が政府之を經營すべし、奉天、遼陽等に於ける電信電話は政府現に之を經營し、其の利德清人に及びて彼等の悦喜せるは、吾人も亦之を祝す

（五）

旅順口は暫らく現狀を維持するに止め、巨資を投じて其の武裝を嚴修するの必要は當分之を認むる能はず

旅順口はいふまでも軍港なり、之を武裝するは主として露國海軍に備ふるため也、然るも看よ、露國海軍は我が勇敢なる海軍に撃滅せられて僅かに黒海に殘喘を保つのみ、假令鋭意再建するも到底十年十五年の間に成るべからず、露國假令報復せんとするも、海軍を以てしては到底不可能なり、況んや其の本國に於て官僚漸く勢ひを失はんとし、國會既に開けて民主自由の勢力大に伸び、侵略主義より逐次平和主義に傾向せんとする兆候の認むべきあるをや

下

（一）

對露の態度は一變せざる可らず、戰役既に終りし以上、彼我また善鄰國に外ならざればなり

世論動もすれば我が外交の無能無爲なるを罵りて、露國外交の巧妙敏活なるを嘖々す、然れども思へ、露人が露國外交の無能を憤慨して日本外交の機智にして

且つ一貫せる主義方針あるを嘆賞するは何ぞ、ウキッテ氏がポーツマスに於ける勝利者たるは列國の等しく認むる所なるも、其のラムスドルフ氏、アレキシエーフ氏、ローゼン氏は却つて我が小村氏、栗野氏に對して失敗者たらずや、露國の外交を以て常に巧妙敏活なりと做すが如きは猶ほ暗中白衣を睹て妖恠と爲すに同じ、一種の恐露病の致す所のみ

　露國が敗戰者たるの故を以て、今殊に之を侮蔑する素より不可なり、而して之を强大且つ敏活なるものとして每事畏憚し恐怖するに至つては最も非也

　露國は善鄰國なり、侮らず恐れず、善意を以て之に親むべし、ポーツマス條約の結果たる諸種の交涉を開く、また此の意趣を以てすべし、故らに之を威壓せんと欲し、若くは恐怖の餘り强硬の言を弄し、若くは之に屈伏せんとするが如き、共に吾人の執らざる所なり

（二）

　沿海州漁業權は、ポーツマス條約によりて當然我が領有すべきものたり

黑龍州大守が或は黑龍江下流の漁區を定めて外國人の混入を禁止したるといひ、若くば沿海の漁業を自國人に長期貸下を爲したりといふが如き、共に驚ろくには足らず

　若し前者ならば一異言なし、其の下流といふも、苟くも沿海ならざる限りは我れ別に容喙すべき要あらず、後者に至ては、明かにポーツマス條約に違叛するが故に、全然無効のものなり、勿論條約以前に於て露人の所有たる漁區の除外さるゝとは、條約明文の定むる所なるも、條約締結以後に係る規定は一切効力あらず、國際條約に反する內地の行政處分及び法律すらも、全然無効なるべきものなれば也

　世の未だ其の前者若くば後者たるをも究めずして、早く已に喧囂するは輕卒のみ

　樺太に於ける外人の漁業追認願の如き、法律の外、國交上の得失も亦考慮せざる可らず、我れ玆に一歩を讓る代償として、沿海州漁業權に於てまた露國に數歩を讓らしむるの利益全く之なきや否や、我れ善意を以

て坦懐彼れに接せば、彼れまた誠意を以て之に應酬することなかるべきや否や、露國を以て唯だ他を譲らしめて己れ寸毫も讓歩することなき横着者なりと做し、始めより喧嘩腰を以て之に望むこと果して智者といふべきや否や

此等のことを測らずして、唯だ強硬一編に我意を押通さんと欲し、毫も善意誠意を以て善鄰國に對するの態度なきは、寧ろ餘りに外交上の分別なきものならずや

吾人は我が官民の深く茲に反省せんことを望まざる能はず

（三）

吾人は漁業權の外、また西伯利亞に於ける通商上の利益を忘るべからず

我が進取の氣象に富める小商人、職工等の赤手空拳を以て富を作らんとするものは、露領を以て最も働き易く儲け易き所と信ぜり、我が製茶は露國人の深く嗜む所にして、雑貨はまた日本人の供給するを最も便利とす、浦鹽斯徳が我が菓實、野菜類の好華客地たること亦世の知る所なるべし

今日以後露國は鋭意西伯利亞の開發を期圖すべし、此の時に方つて、我れ有利なる新通商條約を結び、邦人の西伯利亞に移住するを自由ならしめ、我が製茶、雑貨、菓實、蔬菜の輸入を便宜ならしむるは、當局の最も意を致すべき所にして、此の一事また露國の利益を尊重し、善意を以て彼の當局と交渉して彼我共に益することを計らざる可らず

吾人は再言す、露國は我が善鄰國なり、我れは滿洲を開放して抗爭の端を除き、また露國と親みて以て東洋の平和を確保するの極めて利益なることを、是れ抑も又世界人類の利益ならずや

經綸の大主眼

日本國は將さに何事を成すべきか、日本國民は將さに何を爲すべきか、國民を指導して國運を左右すべき政事家は、之より割出して政治を行はざる可らず、國

民を教育し作興し感孚して以て經綸の大業を助くる教育家、宗教家、文學者等も亦國民一般の思潮を此の方向に傾注せしめざる可らず

最近の過ぐる十ヶ年間の經綸は、文武を振興して實力を蓄へ、之を以て我を損辱したる露國を打擊して大に宿昔の志を酬ひ我が對韓の志業を成就するものありき、而して事幸ひに成りて東亞に於ける露國南下の暴勢を抑止し韓國に於ける我が宗主權を樹立するを得たり、而かも此の成功に由て大に我が地位を進めたると同時に、我が責任も亦甚だ重きを加へたり、新たなる二十億の國債は總ての國民の双肩に落ち、更に巨資を投じ經營すべき文武の事業甚だ多くして、外は列國と追隨して益々我が地位信用を高め、內は產業を發達せしめて國力を充實するが如き、其の事啻に百千のみならざればなり

約して之をいへば、我が日本國は、今や世界の檜舞臺に上りて列國競爭の範圍に加はれるなり、唯だ進むべくして斷じて退くべからず、英佛獨米と倶に文明の進步を圖りて天地の化育を贊襄し、學術の進步を競ひ、文物の開發を競ひ、武備の完整を競ひ、國權の擴張を競ひ、產業の發達を競ひ、生活の向上を競はざる可らず

更に具體的に之をいはゞ、政治の方面に在ては、政府の組織を大成して完全に其の器能を發揮せしめざる可らず、情實、愚昧、不合理の結果なる冗職冗官は斷じて之を排除し陶汰せざる可らずと雖も、而かも政府の器能を完全に發揮せしめんには、其の組織の擴張と費用の增加とは洵に已む可らず、我が四面の海洋に主として自守自衞すべき海軍力と、大陸に於て敵國(假定)の叛謀に備へて以て我が利權を主持するに足るべき陸軍力とは必らず之を有せざる可らず、乃ち一切の事積極的にして決して消極的なる可らず。

經濟上に於ては、大に國富を增加し、貿易を擴張するがため、歐米の智識と資本とを輸入し、海陸の交通機關を便にし、且つ滿韓の利源を開發するに努め、同時に資本の分配聚散を良くするがため、驕奢を戒め勤

儉を勸め、零細なる小資本を蓄積して以て有要なる事業を興すとを許らざる可らず、努めて產業の規模を宏大ならしめて內に無用の競爭を絕ち、外に向て勁敵と拮抗するの基礎を立てざる可らず。

此がため國民をして常識に富ましめ、君國に忠に、職務に誠實に、紀律を嚴奉し、秩序を恪守する良風を養成せしめざる可らず、天を仰び義に勇み、多數者のために犧牲となりて、身を殺して以て仁を成すの美德を成就せしめざる可らず、神佛を信じ天を樂しみ分に安んずる健全なる身心を供へて、倦まず絕えず實着に進取し勤勉する志氣を作興せしめざる可らず、是れ宗敎、敎育、文學の方面に於ける方針なり

斯の如くにして我が五千萬の國民其の農たり工たり商たるを問はず、君民一致して以て國運の進張を圖らば、二十億の國債の如き立ろに辨償せんのみ、英佛米獨に比して國富假令十分一に及はざるも、之に追及すると難からざるべし、況んや海陸軍の雄强を維持するをや、列國競爭の範圍に加はりて寸毫も遜色あるの理なき也、而して我が文武の鴻圖成りて化育贊襄の天職また全かるべし、國民の志氣生々たる間、一二の弊風汚俗あるも、到底國民を腐敗せしむるには至らず。

普佛戰爭後に於ける獨逸官民の一致奮勵して世界一等國の實を擧げて雄を宇內に稱せんとしたる、佛國々民の銳意勤勉して實力を蓄積し、以て舊時の盛運を恢復せんとしたる、兩つながら今日我が國民の模範とすべき所ならずや、今に方つて區々の悲觀を爲し、互ひに短を訐き瑕疵を抉摘して毒言相酬ひ、排擠是れ事として徒らに蝸牛角上の爭ひを演ずるが如きは、國を思ふものゝ斷じて爲さゞる所也、否、多數國民の與せざる所也、蓋し國家及び社會も亦一個の有生物にして、國民と個人とは其の組織の一分子たり、分子相排し相叛かば、其の生物の活動豈旺盛なるを得んや、

有史以來未曾有の時に方つて、我が國民は實に千古の陋習を打破して新たなる志望を懷きて新たなる生活に入らんとす、深く心せざる可らざる也

男女學生交際論

中島半次郎

理論より言へば、男女學生交際の可否は問題とならず、之を社會的に言へば、男女兩性相待ちて働くにより、家庭も國家も健全に發達し、之を倫理的に言へば、又男女兩人格相助け合ひて、人格圓滿となり、之を心理的に言へば、男女相愛する傾向あるを以て、男女に於て其學生時代より交際の道を開きて、相互の理解を十分にし、其間に同情を成立せしめ置くは、社會を爲し、人格を圓滿にする上より必要なることにして、其交際を奬勵せずといふが如きは理に合はず。

然れども、之を實際に就きていへば、國情、國俗の違ふによりて、如何に其交際の道を開くべきかは輕々に決すべからず、歐米諸國といへど其國情、國俗によりて趣を異にするところありて、一概に男女學生の交際は自由なりといふべからず、或る點に於ては我國より嚴重なる取締を爲すところありとも聞く、今我國に就きて言へば、我國從來の歴史は、男女學生の交際を餘り望ましきことにあらずとせるに、此歴史を破りて男女學生の交際を開くとせば、先づ第一、社會が男女學生交際の道を開くべしとする理由、及び目的は何れの點にありや、第二、男女學生自身が相互に交際を希望する理由、及び目的は何れの點にあるか、第三、我國情、國俗は男女學生交際して、其間に過の生ずるを防ぐだけに社會的秩序、社會的制裁立ち居るか、第四、現今の父母は衷心より其子女の學生時代に於ける交際を希へるか、希ふとしても其間に過を生ずるを防ぐ樣監督し得る力ありや、第五、男女自由の交際は對等にして、且つ其相方に自治心あるを必要なる條件とするに、我現今の男女學生は此條件を備へ居るか、の五つの問題を解釋し見ざるべからず。

第一、世間一般に男女學生交際の道を開くべしとするは、前に擧げたる理論上より見て其交際を必要なりとするか、斯ゝる理論に就きては十分に考へず、唯歐米に於ける男女交際の開け居るを耳にして、我從來の

歴史を改むべしとするにはあらざるか、若し然りとせば、之れ國情國俗の違へる歴史的關係を顧みずして、一躍他を模倣せんとするものと言はざるべからず、歐米に於ける男女交際の道の開かるゝまでには、それ〴〵の歴史的關係を經て今日に至れるものにして、我國が一躍して此に至らんとせば、其間に多大の弊害を生ずべし、而して其歐米に於ける男女交際は、其眞相に立ち入れば、吾國人が考へ居る如く自由なるものにあらずして、其間には相當の禮義制裁成立し、一見自由なるが如くに見えて、其中に嚴重なる秩序存せりと聞く、而かも尙ほ其間には不倫の行はるゝこと少からず、故に之を我國に持ち來りて交際の道を開くとせんか、其制裁秩序は十分に立ち居らざるを以て、而して又歴史的關係より言へば、男女の交際に慣れざるところあるを以て、弊害の出づべきは覺悟せざるべからず。

第二、男女學生それ自身は如何なる理由により、如何なる目的を以て、其交際の道を開くべしと主張するか、異性相愛する自然の情に驅られ、相互に其性質を理解し、以て後日の家族的生活、社會的生活の基礎を作らんとするにあるべきも、それ以外に於て卑しき動機の其根底に潜在することなきか、若し男女交際の美名の下に卑しき動機の實現を求めんとする如きことあらば、之れ自ら墮落の淵に陷り、二たびと生れぬ己が生涯の前途を破壞するものと言はざるべからず。

第三、轉じて男女學生交際の道を開くとして、我國情國俗を見れば、表面には男女の交際を嚴格にするが如き形ありて、而かも實際には其間の關係疎漫に流れ十分其間に生ずる過を防ぐだけの制裁は立ち居らず、之れ一は我從來の歴史に於て、女子が男子と對等の位置を有し、女子の人格が尙ほ十分認められざりしによる、此秩序、制裁の十分に立ち居らざる、社會に男女學生交際の道を開くは、之を驅りて無分別なる過に陷らしむる恐なしといふべからず。

第四、現今の父母は、其子女の交際に就きては皆不安の念を感じつゝあるが、其不安の念を感じ居るところ、即ち十分に其監督力なきことを表白するものなり

社會に於て其交際より生ずる過を防ぐ制裁なく、而して家庭に於て又之を監督する力を缺くとせば、斯ゝる外國の事情によりて其交際を奬勵するは、之れ又心元なきことゝ言はざるべからず。

第五、外國の事情は別として、其交際する男女學生相互の間に對等の交際行はるべきか、言ひ換ふれば交際の眞の目的に從ひて相互に其人格を敬重し、淸らかなる交際を結ぶに適するか、尙ほ言を換へて言へば、互に獨立自尊の自治心ありて、一時の激情に驅らるゝを制し得る素養あるか、學生時代は其人格を成し、其自治心を發達せしめんとする中途にして、自らは自治心ありと感ずるも、之を他より見れば思慮猶ほ固まらず、經驗猶ほ淺くして、動もすれば一時の激情に驅られ易き時代なり、殊に女子より言へば其社交に馴れず、意力に强からざる結果、誘惑に抵抗し得ざる事實は往々見聞するところにして、彼の英國の婦女が、自尊を以て女子の主要の資格とするが如き覺悟を有せず。

斯く考へ來れば、理論上よりは飽くまでも其交際を希望する所なるも實際上よりは、其交際の道を開くには躊躇せざるべからざる事情ありて、少くも今二三十年間は其交際の危險なきを保證し得る範圍に於て、徐ろに交際の道を開くことを圖らざるべからず、壯快の議論を爲せば、以上の心配は杞憂にして、社會の進步は意外に健全に渡り行くべく、假令一時は幾干かの犧牲を出すも、斯かることは何事にも伴ふところにして思ひ切りて自由に之を交際せしむべし、此英國の女子が自重心ありて、社會上殆んど男子と同等の位置を有し、學術上の競爭に於ても、左程男子に劣らざるに至れる歷史を調ぶれば、英國の女學史に於て、一時は女子が非常なる墮落に陷り、其反動として女子の自尊心を喚起し、以て今日の位置を得るに至りたる實例もありと唱へ得ざるにはあらざるも、斯かる實際上のことは其弊害の及ぶところ豫め計るべからざるを以て、愼重なるが上にも愼重に計るを要す、從ひて中學校、高等女學校程度の男女學生の交際は、團體的の交際の道を開くことゝし、又個人間にすれば、互の家庭に於て其

交際を爲し、相伴ひて外出するが如き場合には、父母其他の同伴者あるを要する如くすべく、それ以上の程度の學生に及びては、先づ自ら深く考へ、父母も十分に同意せる人につきて交際を爲し、其交際の間に、互に其人格を敬重し、我身に就きては親切に我心を顧みて純潔なる交際を傷けざる注意を爲し、單に娯樂遊戯の友としてよりは、寧ろ學術研究、思想交換の友として、殆んど同性の友に對するが如き心得を以て交際すべし。

教育の力に依り幼少の頃より男女の共學を奬勵するも亦此道を開く一大有力の準備なるも、從來の經驗に照せば、尋常小學校までは左程の差異を見ざるも、高等小學校に及びては少くも當分の間は知力開發の上より見て之を分たざるべからざる必要あるを以て、之も一時に此制を取ること能はざるべく、女兒の進歩が略ぼ男兒と均しくなる頃を見計らひて此制を實行することゝせざるべからず。

男女交際論

野口米次郎

男女交際の最も完全に發達して其害あるを見ざるの國は則ち米國である、歐洲殊に佛國の如きに於ては或る意味無くしては青年の男女交際は無いと云つても宜い、米國では男女が同等で、其エクヲリチーが一から十まで精神上に於ても又近來に至つては其體格の上に於ても男女の優劣を知らぬ程まで變轉し來つて居る、男の活動は女も成す、男の自由は女も得てる、女の活動は其勢力と智腦の發達を意味し女の自由は男子の尊敬を側面から説明して居る、上流社會の處女でも一人て外出して一人で晝食をして居ても人は何とも思はず、米國の女は男と等しくて異なつて居無いと信じせしめたいといふ傾向が過去二十五年間の出來事てある、小學校へ行くと男と女の小供が同室で授業せられて居て、先生も男女雜多である、大學へ行くと男女の學生が共々にマイクロスコープを見て居る、新聞の

通信者が訪問して來たのに面會して見ると其通信者なる人は女である、醫師の中にも女の醫師あり、代言人の女あり、裁判所で拘引狀を發する女の書記あり、寺院に女の牧師あり、女は仕事す可からずといふ說は昔日貴族制度の弊なり――勞働を尊敬するのは眞實なるデモクラシーの根底なり」と米國婦人の字彙に書いたはジユリア、ワード、ホラといふ詩人である、米國の女は活動的であるを知る以前に活動に堪へられ得る實力あるのを思はざる可からず、東洋的の思想では驚くの外無い職業を米國の女は成しつゝある、其は國家の組立が異つて、女も男と同じ敎育を受けて居る、敎育を云々する前に同性質を受けたと云はねばなるまい、自然同じ決心の力と同じ現實的の活氣と同じ獨立的の人格を受け且つ作るのである、何故に米國の男は女をして女らしからしめずして其成行の儘に放捨し且つ之を增長せしめつゝあるのであるか、之を說明するものゝ言に曰く、平等主義平民主義は過去百幾十年の間米國のパションてプライドてあり、其主義が女をして男と同權たらしめたるなりと、男と女とエクヲリチーといふならば何故に米國の男は特種に眼立つて女を尊敬するのであるかといふ疑問が起る、心理的研究から此疑問を解釋するものがある、曰く、其は米國植民時代の遺風といふよりは寧ろ女を尊敬する風俗を完成したのは東部から西部へ移住した者共であゝ、植民時代には女は少い、而して男は家を作り山を掘り田を耕作し且つインデアンの土民共と戰爭せねばならぬ、男なればこそ粗食を甘しとし寒暑に堪へ、更に成立して居らない生活に堪へられるけれども女と成つてはさうは行かぬので病氣をする、其處で女――弱い女を取扱ふに親切と同情を以てし其風習が今日に至るまで傳へられて天下の見る如く尊敬するとと成つて來たのであらう、殊に西部の男が女を尊敬する點に於て非常であるのも同理である、數千百哩の遠路を荷車に小供共を入れて移住して來るのであるから女も一通りの女ては不可能の業である、又西部へ移住するものは多くは獨身共であつて女の移住者は至つて少ない、少ないか

らして金剛石の如く高價を發した、一度發した高價を女の多くなつた今日でも繼續して居るのであると、此説たる眞實たるに近して、女の多くなつたといふ今日でも西部は男に比較して女の人口は少い、之を五六十年前で見ると太平洋岸に於ける女の數は曉天の星といふ位で、詩人ミラーは女が東部からパナマを通つて舟で桑港へ着するといふ報知が五十年に有ると人は山を築いて其來た女を見に行つたものだと話された、余紐育でイン、ミヅウラ(In Mizzouri)といふメロドラマを見た、其劇は西部のランチ生活の狀態を示したもので、如何に暴野で粗雜なる生活をして居る西部の男が女を助け親切にし同情を傾けるかの活劇であつた、余は自ら加利保爾仁亞等に於て之を實地に見たのである、詩人ミラーの如きは女を尊敬するのは人間の第一義務だと云つて居る、且つ此處に又斯ういふ一大理由がある、東洋人――支那人や波斯人は勿論日本人も女を奴隸視し來つたのである、其は事實であると思ふ、其理由の大なるものは則ち女に對する愛は唯情慾といふと語弊があるか知らぬが情一點張から起つたものであるからである、其情といふもの丶中には嫉妬といふ大分子がある、故に東洋人は其女を自分の附屬物にしたい他人に見せたくないといふ所から女の獨立を許さず女の智能の發達を欲し無つたのである、又自然に東洋の女は自家の智能を發達せしめやうとも思は無かつたので男の附屬物として滿足し來つたのである、歐洲に於ても佛國人は東洋人に近い、然るに英人は如何、英國人は女に對するに一點張りの理論を以て見無いのである、女によく多くの自由を與へる、自由を與へるのは女に尊敬を與へるのである、其は宗敎の爲めに、氣候のために、先天的の性質上、人として情の動物たるに走らしめ無かつたからであらう、而して之を米國に見ると、尙ほ英國人より女に對して冷然たるもので、情を以て女を解釋せんよりは智能を以てせんとするのである、米國人は新開地の事故、男は種々雜多の仕事がある、實際上の勞働を用ゐねばならぬ事が山の如く積んで居る、議論もせねばならず金も儲けねばならず、

其だしきに至つては家へ歸へると牛の乳を絞らねばならず皿も洗らねばならぬといふ譯故、自然女に對する情の發達を止められざるを得無かつたのである、多忙のために情の方は發達し無かつた、米國も近年に至つては歐洲の風に吹かれて彼の地の文學美術が入り込んで自然イマジネーションを增進せしめ來つて、情的發達が明かに成つて來た、而して其は米國の米國たる所を失ふ一大墮落であるとまで極論する者がある、大平洋岸に幾千百といふ日本人が蝟集して勞働して居る、勞働に疲れ果て時間が無い、則ち生活と金を儲けるに多忙なるが爲め女などに關係して情を弄するものなどは少い、其日本人が一度日本へ歸へると、直に一度は放蕩を初めるのが十中の八九である、之を俗に云ふと日本といふ國では女は安い、女の安いより時間の價が安い、安い價の時間のある日本で價の安い女に接するのであるから情的の動物たるのであらう、日本は二十世紀の日本でも依然として情の日本で智の日本で無く、日本の女は情の結晶體で智能は發達して居らず、男の附屬物で少しも獨立的態度を持つて居無いのである、米國に永く居て米國では米國人の如く女を尊敬した日本人でも一度日本へ歸つて來る其當座は米國式に女に對して居るけれども其れが一年と成り二年と成ると米國式を止めて日本式に變じて來る、則ち女は尊敬す可き者で無くて女は愛す可愛がるものであると思つて來る、レスペクトするの價なきかわりにペットす可きものであると成つて來る、佛蘭西は國が古いから美術と女郎が發達して居ると或學者が云つたが、日本も佛國に劣らず國は古い、日本の女は骨董品とまで發達して居る、日本の女に女といふ一種の香氣とチャームを認め無いと日本の女は價値無しといふ事に成る、其れ然り日本の女の成立は斯くの如きものので、則ち情の動物で智の活動が無く、二千年間も斯る境遇に居て滿足して居て來た、然るに明治の今日に至つて男女交際論が起つて來た、其論や甚だよしてであるが、青年の男女を交際し初めさするよりか先づ小供の男女を交際せしめるより初めねばならぬ、五ッ六ッの小供共から

男女共に遊ばして、男は女、女は男が左程珍敷く無い習慣を付けさせねばならぬ、小供の時から交際せずに男女交際は二十世紀式であると云つて十八九に成つて初めると、直に大害毒のあるのは明白である、日本の女は情の活動物で智識の程度低く、未だ自分といふものを發見せずして獨立の人間として立つ丈の決心が無く、自分といふ品位を有ち得無いのに日本の男子の方は是迄女を奴隷視し來た家庭の必用品――鍋や釜の如くに必用品と思つて來た祖先傳來の遺風が傳へられて居るから如何に尊敬しやうと思つても尊敬したく無く成るのである、而して女をペットして自分の附屬品としたいと思ふ野心が出來て來るのは日本の男が惡いのて無くて日本在來の習慣が致した所で其罪は祖先に歸せねばならぬ、故に余は日本ては兎ても青年の男女交際を害無くして米國式に實行するとが出來ぬものと確信して居る、日本の女に人生の何物たるを了解し、智能の發達を來たして、女の體面と品位とを持ち且つ之を保護し得る丈けの決心と力が出來た上に、日本の男の方に女を尊敬する、單に愛するばかりで無くて尊敬するといふ念慮の發達して來る迄は日本に於ける青年男女交際論は不結果に終るのであらうと思ふのである、又不結果に終らねばならぬ譯である、試み玉へ、第一、日本に何處に先づ夫婦交際を完全にして居るものがあるか疑問ては有るまいか、夫婦交際とは奇問であると思はれんが、日本の夫婦の多くは交際して居無いと余は斷言したい、斯かる夫婦が小供を持つ、其小供の男女をして同じ部屋で同じ學校で遊ばし敎へ且つ交際せしめずに、青年時代に成つて直に交際論を與へる何等の突飛、害あるは勿論である、日本の女が情的動物である如く男も情的動物である、日本男女の性質上左うてある、之を文學に見玉へ、歐米の文學は情と智との發展である、然るに日本の文學は如何、日本文學の王とも云ふ可き近松の劇曲でも情――情慾一點張の波瀾に過ぎないのではないか、或る外國人が日本の猥褻なるは非常である之を日本の神代記て、見ても二尊が天の浮橋に立ち玉ひて以來某島の云々て云々した

といふ如きを無邪氣にも平氣で書いて居るのであるから其子孫は推して知る可きであると云つたが實に痛快なる說であると思ふ、國が古いだけに其猥褻な點でも少からず美化して詩趣を入れて居るのが長所であるのであらう、西洋美術の極所は裸體にあるといふと同理由て日本人の性質の趣味あるのは美化し詩趣なる情の發展にあるかも知れぬ、知れぬのみてあるばかりて無く確に然うてあると余は思ふ、今情の日本を全然止めて智の日本とするの最大至難てある如く、情的活動の日本の男女を間違無く交際せしむるの至難なるは天空の星を捕へんとする如きものてあらう、此迄の習慣を變じ、又教育を變じた上に五十年か百年、或は五十年や百年ても成功すまい、實際に於ては日本國ては青年の男女交際は永遠に不成功かも知れぬけれど兎に角少からぬ年月を與へねばならぬ、男女交際を發達せしめやうとするには今日日本の男女を犧牲として絕對的に開放すると共に女の教育をドシ〳〵進めるよりは外の遣方は無いのてある、女に智能を與へて自分を保護するの路を講ぜしめねばならぬ、男女交際は双方の尊敬と品位との問題であるのを忘れてはならぬのである、又前に云つた如く夫婦交際が第一て、小供の男女交際が第二て夫れから所謂青年の男女交際と順序を追はねばならぬ、女が男に物云はれて直に面を赤くするやうてあつて男女交際も絲瓜も有つたもので無いと云はねばならぬ、余は男女交際不可能論を持つて居る者てある、男女の關係を全然一變するのは文字改良論より遙に至難なる問題であると思ふ、其邊非常なる手心が必用てある、兎ても日本ては米國式には行かぬのは余の話した所て明かてあらう、故に佛國式にせねばならぬ、日本と佛蘭西とは性質の上に於て少からず同じき所があるのてあるから、殊更に男女交際なるものが有るので無くして男女をしてよく近く接近せしむる方法を講ぜねばなるまいと思ふ、此交際論に關しては男の方より女の活動と決心を要するので、女に腹帶を緊めさして掛れば間違が無いのてあるから、ドシ〳〵女子教育を盛んにして自然の儘に放捨して置いた方が最上策

であるかも知れぬと思ふ、其他には方法が無いのである、交際は交換問題であつて、今日の女の如き智識も高からず世間を知らぬものと男が交際して何等の利益がある、情といふ到着點より外に今日では到着點が無いのである、情の外に利益する所あつて、否情を外にして交際して利益ある樣に成つて初めて間違無き男女交際が完全に出來上るのである。

此處に又疑問といふものは日本の女をして情の結晶體たるを止めしめて智の化身と變ぜしめやうとすると女の女たるチャームは無くなるであらうといふのである、米國の女を見て女のチャームが無い如く男子と區別無きものと化すであらう、米國でも有識者は米國の女を見て嘆息の聲を發して止まぬのである、米國では男が女を見ても女の方が男を見ても特殊の威を動かさぬ樣に思はれるのである、そう成つては男女も仕舞である、何んとかして女は女らしく男は男らしく其所を保て初めて天下太平であると云はねばならぬ、米國の女は體育の發達から體格が男らしく成り精神上の敎育男と同じき敎育を受けさすから男らしく成つて來て、結婚問題も商賣の取引と同樣に考へて居る連中も少く無い、日本では女は女らしく、又女の中でも娘時代と人の妻となつたものと區別のある髮の結方や衣服等を着して居て呉れる中が花ではあるまいか、米國の如く女でも無差別に成つては女の美といふ者は無いでは無いか、又女であり乍ら政事界を横行したり相場などされるのも如何であるのである、神は女を作り又男を作つた、詩人ウヰトマンでは無いが兩者共に其長所を發達する方針を取らぬのは智なりて無い、然らば女は家庭を作り母たるの責任を完全にする方が男の社界へ米國の女の如く走り出して男の贋物として顯はれんより家に居てもらいたい、然し今日の日本の女の樣でも閉口するのであるから出來るだけ敎育を與へる――高等女學校程度で――而して自由にして、男女の交際は自然の大道であるから勝手の儘に放任して置くといふとにしたならば良いではあるまいか、情一點張りでは時代が許さぬ、智一點張りては女のチャームが無い、

其邊の手加減は教育家の任たるよりは其父母たる人の注意す可き點である、開放的にする——絶對的開放するのを危險なりと思ふ人は其手心專一なりと云ふ可してある、男女交際の盛んなる米國の狀態と此迄の成行とを考へて其短所を習ふは愚なりと思ふ可し、其取る可きは取る可し、余一個人の意見としては今日の男女を犧牲として其成績如何を見たいと思ふ、日本の事々物々は試驗次第で何一つ完全なるは無し、豈に男女交際論のみ問題ならんやである。

男女學生交際論

文學博士　建部遯吾

男女學生の交際といふことは雜誌の種としては大分面白い題目でありませう、か若しこゝに男女學生たる人があつて吾輩に男女學生の交際をして善いか惡いか、其利害得失如何と問ふならば、吾輩は一言の下に之に答へてそんな問を發する程多少の疑點がある位ならば斷然交際をせぬ方がよいと刎ね附けやうと思ふ。といふのは世の中には必然してもよいことが澤山ある、して善いか惡いか分らぬやうなことは後廻しにするが宜しい。先づ絶對的によいことをなすべしと思ふ。學問を勉め、德育に志し、運動を勵むが如きは皆必然してもよいことである。

然しながら一歩を進めて利害得失の箇條について見れば、全體男女學生の交際問題は幾何の意味と價値とを有するかを究めなければならぬと思ふ。一體人は社交的動物であるから、學生と雖も亦此社交といふことを要求するのは當然である。而して社交には同性間の交際があると同時に異性間の交際もあるから、此社交慾のために男女學生が相互に交際せんと欲することのあるは事實として認めなければならぬ、然しながら事實なるの故を以て必ず之を奬勵すべしといふ論結が出る譯ではない。先づ其道德的價値如何と考へなければならぬ。今男學生の方を主として論じて見るならば、女學生に交際することは左程に價値のあのことかどう

か。世間には女學生よりも勝れたる女性が澤山ある、女學生にも勝れたるものもあらうが、其れは×である、第一流のものもあり第百流のものもある。世間に其價値の確定された女性が澤山ある、博愛慈悲に富んだナイチンゲール、自由平等に熱誠なるローラン、文才を以ては紫式部、清少納言、其他尙友するに足るべき巾幗者流は古今東西其人に乏しくない、何を苦んで女學生を求めんとするか。女學生の方からいうても亦然りである。若し之を聖人學者に求むれば基督、孔子、プラトーン、カント、ヘーゲル、スピノザ、若し之を政治家に求むれば、フォックス、ピット、李鴻章、若し之を軍人に求むれば、ウェリントン、那翁、等殆ど擧げて數ふべからざる程多い。此等の人々と交際せんと欲したならば、事や極めて易々たりてある、田夫野人眼に一丁字なく、胸に一見識なきものならば格別、苟も男女學生たるものは古今東西の偉人傑物の尙友すべきもの極めて多く、又之に交際するの道極めて易々たるのである。

所が吾輩のいふた所に向てこういふ問が一つ出つ來るに違ひない。尙友すると交際するとは別である。古今東西現存せざる男性若くは女性の傑物を尙友するといふのは交際ではない。之れは全く異つて居るといふものがあつたならば、吾輩も亦其相違を認むる。かくの如く古今東西の人に私淑し、尙友し、憧憬して我身を高くしようといふのは明かに道德上の價値のあることであるが、然しながら此外に生きて居る同時代の人と交際し、就中同時代の異性との交際を希望するのも、是れ亦事實として認めなければならぬ所である、而して此同時代の異性と交際せんと欲するは決して私淑、尙友、敬慕の意味に於てするにあらず、時としては全く這般の要素性質を缺く一種の希望を以てすることがある。若し之を單刀直入、露骨にいへば肉に對する社交慾、即ち必ず肉あり血ある溫かなる交際の對象を求むるの慾てある。而して此慾の最も純粹なるものは藝者買、傾城買の慾てある。

かく分析し來れば吾人が今論ぜんとする所の男女學

生交際の慾望なるものは此兩極端、此兩要素の性質を幾分の割合にて調合する所の不純なる慾望である。吾人が若しプラトーンの說ける理想憧憬に滿足し得るならば、先きに述べたる古今東西の異性の傑物を對象として私淑尙友すれば足り、又純然たる肉なり血あり呼吸ある對手を求むるならば藝者買ひ傾城買、女ならば役者買にて事足るのである。今日の男女學生の交際は恰かも其中間にあり、或者は比較的其一方に近く、或者は他方に近い。換言すれば或男の女學生交際希求心は甲の要素九分に乙の要素一分。或女の男學生交際希求心は甲の要素二分に乙の要素八分といふ差がある。

斯く述べ來れば男女學生交際は如何にも道德家の汚れとなすものに類するなきかの疑がある。成程一種の汚れてあるかも知れぬ。然しながら一體人間として此甲乙二つの慾を備ふることが根本的に批難すべきものてあらうか、吾輩の考ふる所によれば男女學生の交際といふものは一個人情の弱點の表白てあつて、動もすれば敗架を包むに錦繡を以てするの譏を來すの恐あり、動もすれば內荏にして外厲、所謂之を盜賊に譬ふれば夫れ猶穿窬の盜の如きかといはるゝ恐がある。男女學生の交際は眞に其性質を認むればいふまでもなく、よい顏をしてすべきものではない。然しながら其よい顏の出來ぬのは人性の事實なりといふ點よりして强ちさまで忌避すべきことにもあらじと思ふ。然しながら男女學生交際をするからには一方には藝者買、傾城買を擯斥嘲笑することは出來ぬ。若し藝者買、傾城買を以て甚しく批難すべきものとして論ずる學者、矯風會員があつたならば矢張り男女學生も之を批難せずに置くことは出來まい。男にはカント、ヘーゲルを尙友し、女にはナイチンゲール、ローランを私淑すべし、若し其れが出來ずして藝者買傾城買を擯斥するならば實に笑ふべきの至りてある。

吾輩は强ち此等の社交慾の種々の發現に向て絕對的の道德上の價値不價値を附せんとはせぬ。換言すれば藝者買傾城買は道德上の絕對的不價値て、プラトーンの理想憧憬は絕對的價値なりとはいはぬ。然しながら

男女學生交際といふことゝて、其美名を盜んで其劣情を滿足せんとするものならば、寧ろ藝者買傾城買をした方がよいと思ふ。然しながら其美名を盜まぬならば人々の趣味に從て、攀花折柳の行樂を好むにしても又其れに幾分か敬慕、憧憬、私淑、尙友の意味を加味する女學生交際を好むにしても強て其優劣を論ずるの必要はなからう。

今日我日本にては中等社會が成立し來りたるを以て、社會的分化が益々此方面にもあらはれ、中等社會の淑女は益々淑女らしくなり、藝者や傾城は益々藝者傾城らしくなつて居る。斯くの如くなる以前には藝者や傾城にも隨分當時一般水平線に比すれば今日の女學生位の意氣學識あるものがありし樣に物の本にも見えて居る。今日の彼等の社會にも多少そんなものがあるかも知れぬが、要するに社會的分化の結果として下落したること、又しつゝあることは疑ふべからざることゝ思ふ。然らば今日の女學生交際は古の或種の藝者買傾城買に餘程近いものとなる譯て、今日の男女學生交際は、之を矯風とか進歩とかいふ間違つた考の上より見るにあらざれば左程尤むべき所以を見ないのである。

社會的分化といふことより思ひ出せるは世には兵士といふものがある、此兵士なるものは今日此世に於て公然と殺人をなす商買である、所が殺人が或特殊の一ベルーフ(職業)のものに限られたといふのは世の大いなる進歩にして、我日本などは遂ひ四十年前まで人々は皆多少殺人の權を有して居たのである。然るに人々自ら殺人する爲めに今日の人がステッキを持つが如く刀を持て歩くことを止め、之を兵士と警察官とに委ねたのである。此點より見れば藝者傾城などの世にあるのは或は社會の進歩したる證據なるかも知れぬ。何となれば人間が下等なる慾望?、(但し道德家よりいふ)を持つて居る限り、愛嬌若くは當世の流行語とを以ていへば握手、接吻等を供給するものゝ社會に起るは必然の理てある。然して之を供給する特殊の階級即ち藝者傾城なるものがある方がよいか、又は天下の女性皆

その供給者となる方がよいか。恰かも殺人權が廣く世人に分賦されたのを兵士と警察に專屬せしめたが如く、藝者及び傾城にのみ委ねるのが社會の進歩であるかも知れぬ。それとも又世に所謂社交的婦人などいふものは幾分か藝者傾城となりつゝあるものであるが、これが或は社會の進歩といふべきものかも知れぬ。

然し以上は極めて抽象的にいうたことで、人間は神にあらず、動物にあらず、實に神の子孫にして亦同時動物の子孫である。宗敎家のいふことは眞にして吾人は神の靈性を有すると同時に實理的研究の結果進化論が其眞理を闡明したるが如く亦動物の子孫なることを疑ふことが出來ぬ。所謂人間は純粹のプラトーン理想のみを尙友憧憬することが出來ぬが、けれども又其れが出來ぬというて俄かに他の極端に驅けつけて純然たる遊冶郎的行樂に耽ることが出來ぬのである。其點よりいへば男女學生交際の如きは或はよく今日の人情に適當したる慾望滿足の方策なるやも知れずと思ふ。

尙終りに今一つ考へて見ざるべからざるはツマ定めの手段としての男女學生交際は幾何の價値あるやといふことである。吾輩思ふに之れは隨分都合のよいことと思ふが但し一つの條件がある。即ちツマ定めは青年男女學生が自らするの能力ありや否や、殊に社會が男女學生に此等の能力あることを認むるや否やといふことである。此點が不完全であつたならばかくしてツマ定めをするのは寧ろ男女學生の煩悶の種を蒔くものである。恐らくは今の社會では未だ青年男女學生に自らツマ定めをするの能力ありと認めて居らぬとすればかゝるツマ定めの結果は七分通りは先づ煩悶に了はるべきを思ふのである。この觀察にして誤らずんばツマ定めとしての男女學生交際は幾何の價値もないとことになつて了ふ。

之を要するに男女學生交際をするに理屈が入用てあり、言譯けが必要であるならば交際をせぬが宜しい。若し交際はしたいが道德家に尤めらるゝのが恐いならば、藝者買傾城買をしたいが錢がいるといふ人を擯斥せぬが宜しい。男女學生交際をして窈窕たる淑女は君

子の好逑を夢るならば多くの場合に於ては失望に終るのであらうと思ふ。此問題は雜誌の種としては隨分面白いものであつて長く人氣あるものであるが、實際問題としては其價値の少きものたることを思ふのである。

文武優劣の内面的觀察

志賀重昂

大觀兵式、大勅祭と共に、連戰連勝せし我軍人は益々社會に歡迎せらる、軍帽、軍刀、勳章などいふ外形のもののみかは、佩劍の音すら社會の尊敬を博するに至れり。試に新聞、雜誌を見よ、論ずる所は武士道、雜報に記する所は軍人家庭の美譚、軍人の父は必ず賢父なり、母は必ず賢母なり、妻君は必ず賢夫人なりと、父、　、賢夫人の揃ひにするに至つては、社會の軍人を歡迎する極度に達したるものなり。予は常に思ふ、文武何れか歴史上に長き生命を有するかと、文人の作品の武人の功勳よりも長へに後昆に傳はるを見れば、文の武より生命長きは明に知らる。日露戰爭中、日本人は字典に有りとあらゆる惡辭惡言を以て露西亞人を罵詈したるに拘らず、其文人トルストイ、ゴルキー、ツルゲネーフの筆に對しては滿腔の尊敬を表し、有らゆる譏謗罵詈の上に彼等の超絶し居りたるを見るも、筆の劍より大なるは知らるべきにあらずや、故に予は滿腔の同情を軍人の言動に表し、滿腔の尊敬を彼等に捧げ、軍人を拜崇すると同時に、文の武より生命長きことと、筆の劍より大なることを確信して疑はざるものなり。然るに今の新聞、雜誌の記する所は、目前に軍國の全盛を見ては戰前までは軍備縮小を主張せし者も軍備擴張を唱へ、藩閥を攻撃せし者も薩摩は三元帥、十大將を出し、長州は一元帥七大將を出したりと欽慕し、又時流に倣ひて武士道々々々と呼號し、戰前までには軍人の家庭の醜事を摘發せし者も俄に其の家

庭を賢父、賢母、賢夫人の揃ひにまでせしには予をして隔世の感を懷かしむるもの故なきに非ず。

世は軍國の全盛に連れて武士道々々々と呼號す、然れども江戸の草分け者、武士道の模範者たる大田道灌の墓は見る影も無く零落し、委しく其地方の人に尋ぬるも容易に知るべからず、而かも其傍に軍人歡迎の大綠門の屹立するを見、又尙ほ武士道の模範者たる直江山城守兼續の墓を訪へば見る影も無く破壞せられ居るに、其傍なるステーションには軍人歡迎の大綠門の雲突く如きを見る、予は世の武士道々々々と言へるものが眞情よりして斯くまで主張するか否かを疑ふものなり、此の如くなれば今日の凱旋軍人をして、大田道灌の墓、直江兼續の墓すらも此の如きの有樣なり、今日こそ國民は囂々と競つて吾人を歡迎すれど、五十年、百年の後は果して如何の狀にあるかは知るべからずと想はしめんのみ、されば予は今日武士道とか、或は軍人歡迎とか囂々たる聲よりは少しく異なる見を有するものなり。

世人の軍人を尊敬し、歡迎するとは少しく見を異にすとはいへ、予も亦軍人には實に嘆服し居るものなり眞情より尊敬し居るものなり、彼等の赫々たる功名を見て斯く言ふにはあらず、彼等の勇敢善戰のみを見て斯く稱するものにはあらず、實に彼等の內面の言動が如何にも他の社會に超絕し居る所あるに由ればなり。

軍人の超絕し居るは、各種の點に於て發見したりと雖も、表面に現れたる極めて瑣細なる點より言ふも、下は一兵卒より上は將軍に至るまで、偶とせしことすら軍人以外の社會とは全く異なれり。例へば樺太內地旅行中、一行の食物缺乏するや、同行者中軍人以外の者は(予は特更に其名を言はざるべし)困苦缺乏に堪え得ずして孰れも中途より去り盡したり、最も奮發したる者すら最奥の日本守備隊所在地より去りたるなり、然るに護衛の二人の二等卒と二人の一等卒とは、辛苦缺乏の樣を色にだも示さず、先づ午前四時頃より起き上り、木を伐り薪を拾ひ、河水を汲み、水筒にて湯を沸かす、馴鹿の肉を炙る、湯の沸き肉の熟する間に外套

を卷く、毛布を疊む、劍を磨く、銃を掃除す、朝餐終れる後食器を洗ひ直に出發す、日暮には天幕無ければ木の葉を綴りて屋根を葺く、其間愉快に謠を歌ひ、戲談を言ひなどす、斯くて十數日後、予は軍曹に對し、更に前進せんと欲するが如何にと問へば、言下に、海より外、歩兵の行けぬところは無し、何處までも御供申上んと答へぬ。扨て又先日旅順港及び樺太從軍中、昵懇となりし人々を櫻狩の小宴に招き、五日前に案內したるに、翌々日までには盡く出席有無の返事到着したり、然るに其中唯一人の文人を交へたりしが、宴會の前日午後までにも何等の返事だになし、故に予は準備の都合もあれば、其人の留守宅と記して端書を發し、御主人は御不在中と存じ候故、其事に見做し居る云々と書き送りたるに、豈圖らんや翌日に至り、其人は定刻に先だつこと一時間に來れり、凡そ來客を受くる主人方に在つては、來客前の一時間の如きは頗る各種の準備に忙殺せらるゝものにて、實に平生の三時間にも値するに、一たび不在なるべしと信じ居たる文人のみは定刻に先だつ一時間にして來れるなり、已むなく予は其人だけの準備を新にしたり。さて此時には二十四名の來客ありたるが、予は其翌朝栃木縣芳賀郡教育會に出席の筈なりし故、午前七時自宅を出發せんとするや、騎兵聯隊長名和男爵の書面に接したり、書中に、昨夜營所の厩舍の隣屋より失火したる爲、今朝は其跡始末にて、昨夜の厚待の答禮に參上するを得ず云々と認めあり、軈て門を出てんとする時、武田樺太兵站司令官には、羽織袴の嚴然たる打扮にて、昨夜の招待の答禮に來られたり、既にして栃木縣より歸宅すれば、彼の一文人を除き、軍人は盡く答禮に來りぬとて其の名刺予が卓上に排列しありたり、予は軍人の斯くまで律義にして禮式を重んずるかに驚嘆したり、特に予の如き無責任にして何事もダラ〱とし、放埒無秩序なるものには、卓上に排列せる名刺を見て頂門の一針どころか、十針百針をも感じたり。是は少將將た上長官位の位置の人々の內面なるが、更に師團長位の位置の人々は如何といふに、是亦兩三日前、從軍中昵懇とな

りし此等の人々を躑躅狩の小宴に案内し、御服裝着流しと附記し置きたるに、軍人は大島將軍初め皆日本服を着け、土屋中將は師團長會議の歸途和服を携へて予が家に入りて着換へられ、且曰く原口中將は少しく遲刻するならん只今師團長會議にて面會の節、志賀君の案内に服裝着流しとありたれば一度牛込の自宅に歸り日本服に改めて往くべければ此旨了承ありたしと言はれたり、凡そ客は主人の案內の通りにすべきは禮なるが故に此くまでに案内狀を確守するとは感嘆すべきものに非ずや。かくて十人の日本服裝なる軍人とフロックコートの二文官（是にも着流しと附記して案内し置きたれども）は盡く當日出席せられたり。斯くも軍人社會は時間を確守し、約束を確守し、禮義を重んずるなり。然るに吾人は如何、一時の開會といへば三時頃より出席し、五時の集會といへば七時頃よりノソノソ出席する有樣にして、萬事に不秩序、無責任なるにあらずや、僅に此一事すら既に文武兩者の優劣を證明して餘りあり。然れば予は今の社會の人々が徒に軍人を歡迎し、尊敬し、其家庭を稱贊するを止め、己れも亦軍人に優る規律、約束、禮義を守り、終始一貫、以て其職に盡し、社會に盡し、國家に盡さんことを望む、修養之に至らば何ぞ獨り軍人のみを俟たんや、世を擧げて文人を尊敬し、文人を歡迎せんのみ。想へ今の兵士が生れながらにして今日世の言ふ如き規律の正しきものなりしか、二三年前村落に在りたる頃は、同じく時間を格守せず、約束に從はず、禮義を重んぜざりし田舍の若い衆なりしにあらずや、又雨の夜に町より村に歸る畑道を通過し、狐に誑（ばか）されるが恐しと、葉唄（はうた）など歌ひ自ら恐怖心を慰め、僅に歸宅し得たる者なりしにあらずや。然るに僅に二三年の後には、上官より敵狀視察に派遣せらるゝや、彼の森の中には約一中隊の敵兵あり、彼の塹壕の深さは十メートル以上あり、彼胸牆の北側には鐵條網を張れりなど丶、精確なる狀況を言葉確かに上官に報告するにあらずや。されば誰人と雖も自ら戒め自ら勵みて訓練すれば、如何樣にも改善し得らるゝなり、何ぞ獨り軍人のみが正しき規律、

大なる勇氣の占有者ならんや、歸する所は勉むると勉めざるとの境にあり、吾人文弱を以て目せられ居る者豈に勉めて勉めざるべけんや。（談話筆記）

本邦に於ける貴重書の登錄方に就いて

上田萬年

茲に私の貴重書と云ふのは、寫本であると刊本であるとを問はず、古きものと新しきものとを問はず、又我國のものであると外國轉來のものであるとを問はず、現在我帝國内にある書籍の中で、特に著しい價値を有して居るものを云ふのである。さて或る本が、特に著しい價値を有して居ると云ふには、種々の評價の方法があるべきで、假令ば其本が先哲の自筆にかゝるとか、又は其本の種類が天下何處にも絶え果てゝ、所謂天下一品のものであるとか、又は一種特別の歷史的由緒が、其上に存するとか、兎に角種々の評價の方法があるべきであるが、之を適當な方法できめるには、特に斯道の大家を以て組織された委員會やうのもので確定するのが妥當である、しかし私のいふ斯道の大家といふ中には、骨董家や古本商などの投機的評價人は絶對的に入れてはないのだから一寸御斷りして置く。

今日我國には内務省内に古社寺保存會といふものがあつて、此會でも古社寺所有の有名な繪畫又は書籍などは、國寶又は准國寶として登錄することゝして居るしかしこれは主に古社寺保存の側からの仕事で、特に我邦の美術保護の仕事の方が主であつて、書籍の方は專門に調査するのではないやうである、況して古社寺の範圍以外のものは全く雲烟過眼的である。

又帝室博物館でも、古書の保存に從事せられて居る事は事實である。東京のでも、京都のでも、奈良のでも、何處のでも博物館には古書の蒐集があり、特別保護があり、又陳列展覽もある。しかしこれらも博物館事業のほんの一分業としてされて居るので決して充分

の機關を備へて、今後の發達が保證されるといふ次第てもない樣である。

內閣文庫、帝國圖書館、帝國大學圖書館などを始め、幾多の圖書館には、貴重なる書籍の保管されて居るものが少くない。其他有名な神社、寺院、華族、富豪、學者などで貴重書を所持して居るものは夥しく多い、しかし今日までの處、何人も此等の書籍に就いて統括的に研究し、其目錄を作り、其解題を試み、其傳來を明にして我邦に於ける此精神上の寶庫を、國民の前に指示したものはないのである。言ひ換へて見れは、我々日本人は如何なる貴重書を現在有つて居るか、それは何處に現在保管されて居るか、そうして又其貴重な理由は何故てあるか、といふ事などを全く知らないのてある。勿論我々は見聞の上で、其幾分は知つて居る、しかし悲しい事に大體を知らないのてある。

それから又日露戰爭後の宇內學術界の趨勢を見ると、歐米諸國は多年の迷夢から覺めて、今後は專心に東洋殊に日本の事物研究に從事し始めたのてある。東洋の典籍殊に我邦の典籍を、蒐集する企をするものは決して尠くないのてある。彼等の此等書籍購入の爲に支出する金額は、到底我等の考へられないほど巨額なものてある。かういふ面白い時代になればなるだけ、我々日本人はフンドシをしめてかゝらなければならない。我邦の貴重な書籍が、海外に散佚するのが、丁度あの維新前後に於いての本邦美術品のやうであつては、これは如何にも殘念である。朝野の人に論なく、此點は餘程用心を要する事であると思ふ。

そこて私は中央政府が委員會を組織して、此明治の聖世に我々日本人が集め得た所の、又現在所持して居る所の、貴重書の調査をし、これが登錄の方法を制定して、その散佚を防ぎたいと思ふ。勿論箇人の所有にかゝる書籍が隨意に賣買され、又事情の上では、海外へ出ないとも限らない。これは誠に止むを得ない事てそれは壓制的に禁止するといふ事も出來ないが、それにしても一度登錄された書籍の移動に就いては、充分調査の方法がつくやうにして置きたいのてある。

私は此事業は、他日我が帝國學士院の爲すべき事業の一であらうと思ふ、そこで登錄され、目錄に作られ、それ〴〵の解題を得、さうして一方では適法に其再版等も講ぜられべきであらうと思ふ。事によりては書籍保護法の制定、國家に於て或る場合に買上ぐべき義務ある場合等、皆此學者の委員會に一任されべきであらうと思ふ。

文體論

山路愛山

中央公論記者足下。先日は文體論につき愚見を呈すべき旨御約束いたしたれども、其後いそがはしくして執筆に暇なし。左の一篇は舊作にて信州に居りし頃作り、今度、拙著「讀理と論理」の中に入れた旨はるものなり。是も同意なれば差上申すなり。御一讀下されたし。論それにて盡きたり。多言の要なきこと歟。

世には文章の事に懸念する人多く拙者も、作文して見たきことあれども何分うまく書けぬ故困却すなど云ふ人あり。我輩思ふに文章の事は左樣に六づかしく考へるに及ばぬことなり。人若し面小手を着け竹刀を持ちて劍術の道場に臨めと請はるゝ時は或は僕は未だ劍道を修行したることなしとて之を拒むことを得べし。然れども一旦仇人ありて眞劍勝負を促さば如何。僕未だ劍を學ばずと曰ひたりとて眞劍の切込みを免るゝ譯にもあらねば是非立合ひて勝負を決すべし。既に立合て勝負を決する以上は平生劍術の素養あるもの必ずしも常に勝とは限らず。其人の膽力にも因り、身體の强弱にも因りて其勝負は樣々なるべし。此時に當りては術も論ずる所に非ず。法も必ずしも拘はるに及ばず。横面にても胴外れにても頓着する所に非ず。要するに當の敵を擊ち倒せば可なり。文章も亦此の如し。世の爲め、人の爲め、言はねばならず、書かねばならずと決心したる以上は言文一致體にても、書簡體にても、「果して然らば」「豈夫れ然らんや」流にても文體は撰ぶ所に非ず。唯我言はんとする所を言ひ、書かんとする所を書くべきのみ。つまり自己の意思が讀む人の心

に徹すればそれにて文章の能事を盡したるものなり。之を筆墨の外主張ありとも、直ちに胸臆をのべて文章と爲すとも曰ふなり。たとへば世に文章の心得なき婦人にても其愛子の許に寄する手紙を書くときは子を思ふ親の誠の有り〳〵と紙上に溢れ、讀む者をして自然に涙を流さしむるものあり。是れ其心の中に滿ちたる感情の泉の、筆にも墨にもせき留めかねて蔽ふことも抑ゆることも成り難きが爲めなり。名もなき匹婦の文章が人を泣かせ、堂々たる文章家の文章が人を泣すること稀なりとあつては如何にも奇怪千萬の事なれども深く考ふれば不思議はなし。「カーライル」と云ふ英國の文人嘗て「グレー」「ジョンソン」など云ふ人の詩文を論じて、此人々の文章は字句も精練してあり。恰も大理石の彫刻の如く如何にも立派にはあれど要するに書にかきし火に似たり、つひに人の心を焚すこと能はずと云へり。母の子に對する情は眞の火なり、其火を筆に移したるものなれば善く人の感情を焚すなり。尋常文士の文は形式ばかりを移して心に火なし、故に善く出來たるものにても書にかきし火に似たり。是を見れば文章のことは餘り懸念するに及ばぬことなり。人若し世上に風聽したきことあれば思ふまゝ、感ずるまゝを自分の常に用ふる語で其儘書くべきのみ。重言も片言も、假名違ひも、方言も、そは思想感情を表はすの害となることなし。食物を椎の葉に盛るも、重箱に盛るも食物たる性質に於ては差異なし。思想感情は漢文の衣を着るも俗文の衣を着るも其尊ぶべき思想感情たるに害なし。されば甘く書かうなど云ふ野心を起すことなく、文章はたとひ襤褸にても中身の議論が金玉なれば善しとして思ふことゞもを遠慮なく書くべきのみ。

ワグネルと我現代

三宅雄次郎

近來煩悶といふ語の頻に用ひられ、大なる煩悶なければ大なる事業も成らずといふ意味のこと幾許か流行

中と稱して妨げなく、或る部類の人々は自ら煩悶に堪へず、又は將に煩悶せんと欲するものゝ如し。之と相ひ對して立つは活動といふことなり、此語も亦頻に用ひられ、目今唯だ當に大に活動せざるべからざるを口にす。煩悶を當然とする者は、徒らに活動するを無意味のことゝし、動物に近きが如く思ひ居り、活動を念とするものは、煩悶を無用の心配とし、世に出てゝ働く能はざる無氣力者の通癖なりと見るなり。されど仔細に考ふれば、煩悶に傾くものゝ中、活動に堪へざるもの少からざるに拘らず、必ずしも皆な然りとすべからず、更に常人に比して一層深く人生のことに考へ入り、解決を得るまで煩悶するもの無きにあらず、或は釋迦が大煩悶の後ち大悟したるを引き、己れ嘗て然らんとて新たに煩悶し始むるもあり。

煩悶なる此語は解釋の如何により、悲憤慷慨、取越苦勞などを悉く含むに至るが、其の最も行はるゝは文藝及び宗敎に關する方面に在り。此方面にて種々の人を理想に取るが、ワグネルの如きは其重なるものゝ一人なり。ワグネルは大に煩悶して又大に活動したる人、一生の多くを煩悶にて貫きたりといふも可なるほどにて、而も又彼程に活動したるものも稀れなり。煩悶は活動し得ざるものゝ通癖なりといふものも、ワグネルの活動せし跡を見て更に己れの活動に顧みなば殆んど言ふを値せざるを覺えん。煩悶すること彼の如くにして、又能く活動すること彼の如くならば、他より何等の非難を容るゝこと能はず。隨て之を揭げて理想となし、幾分なりとも類せんと勉むること固より惡しからざれど、翻て思はざるべからざるはワグネルに關し、其個人と其時代とよりの觀察を要すること是れなり。

彼は個人として大なる天才なり、啻に文藝の能に秀てしのみならず、事業を企て事業を遂行するの才あり、情に富めり、品性も高し、多少の缺點あらんも、稱して人傑と爲さゞるを得ず、繪畫や、音樂や、詩や、凡ての藝術を合して之を演戯に發せんとし、一々自身に試みて何事にも相應の力を現はし、行くとして可ならざるなしといふ、實に驚嘆に堪へたり。人は分業を念と

して一部分に專らなるべきか、將た八面鋒を揮て諸般に亙るべきかは疑問なるが、兎まれ其一部分すら常人の能くし難きところを各部分に亙りて秀でんこと容易にあらず、二兎を追ひてさへ一兎をも得ざることを忘るべからず。されど指を各部分に染めて一不可能事なしとの概にて邁往せしワグネルの行動は、才を恃む者の動もすれば模擬せんとする所にして、たとへ望みて得ざるも必ずしも咎むべきにあらじ、斃れて後ち止まんとするの意氣を稱すべし、個人としてのワグネルは或る一派の理想的人物とするに足ると見做して可なり。

さりながらワグネルが當時に爲しゝところに見て、直に移して今の世に施さんとするは實に時代を解せざるの事とすべし、ワグネルの活動に最も見るべきは反抗にして、彼は時の習慣に反抗し、時の宗教に反抗し、時の政治に反抗せり、其の志とするところは、此等の壓抑より文藝を自由にし、希臘の昔時に復せんといふに在りしが、否希臘の昔時に復して而して將來の文運を開かんといふことに在りしが、當時に於けるそれ等諸方面の壓抑の大なる、飽くまで奮戰健鬪するの價値ありしに相違なし、文藝は多く傳來の格式に束縛せられ居りぬ、宗教は羅馬法王の支配下に嚴肅主義に傾き居りぬ、政治は固より言ふに足らず、此時に當つて苟も力あるものゝ振つて壓抑より脫せんとするは自然の數にして、恰もフイヒテが健鬪之れ人生の事、唯だ健鬪して幾分なりとも自由の天地を拓き行くべしとし、極力之を叫び之に身を委ねしが如く、ワグネルは文藝の方面にて健鬪を自らし、又之を自己の作中に發表したり、四十八年の革命を勃發せし潮流は即ちワグネルの舟を泛べしところにして、獨り彼に限らず、多少意氣を負ふ者は皆何等か革新を思ひ立たざるなく、唯だ其現るゝ方面を異にせしのみ。

四十八年の潮流は後ち漸く目的を達すると共に靜穩に歸し、而して國家的活動が更に代りて隆盛を極めんとするに至れり。ワグネルが晩年に於ける獨逸の國情は、彼が頻に運動したりし當時の事情より大に變化し

居れり、或る點に於て別世界の觀あり。但だ獨逸にては國際的關係の全然一變しながら、猶ほ社會の狀態の大に變せりと言ひ難く、往年の習慣の依然として存するあり、宗教も或る處は新教なれど、南部は多く舊教にして、カイザルも時として法王との交渉に苦しむことあり、動もすれば舊教が勢力を張らんとする疑ひあり、政治は帝國の下に一なりしも、各聯邦は所謂獨逸流にて、自由の名ありて其實なきと珍しからず、ワグネルが反抗したりし當時の事情は猶ほ舊態を改めざるもの少からず。其の然るの故を以て。人格相當の好遇を被むらざりしワグネルは、死後生前ほどの惡評なく、寧ろ一般に好評に傾けるの明かなるも、猶ほ充分に故鄕に理會せらるゝには至らずと謂ふべし。

英國は之と事情を異にし居りて、ワグネルが反抗の已むべからざるを感ぜし如きことと多しとせず、幾分かあるも、左まで熱心に從事すべきことゝ思はれず、其の作品の玆に大に行はるゝも、現在の事情に衝突するところなく、全然美術の上より見らるればならん。音樂を聽きて喜び、劇を見て喜ぶといふが如き、其中に現るゝものの煩悶に苦み、煩悶より離るゝに、深き趣味の感ずべきあるも、現代の必要と直接の關係を有せず、宛も人に運動の筋肉あり、空しく放置すれば、用なきに動かして、快味を覺ふと等しき趣なきにしもあらず。

さらば我國は如何といふに、ワグネル當時の獨逸とは大に國情を異にす、四十年前の封建時代には頗る相ひ類似する點あらんも、今日のところ社會の壓抑といふほどのものありや、宗教に壓抑といふほどのものありや、政治に壓抑といふほどのものありや、多少はあるべし、されど身を挺して奮戰苦鬪すといふほどのものありや。ワグネルが不快に感ぜしところは、時人が舊來の形式に束縛せられて、天眞の情を發揮し得ざるに存せしが、我國には果して斯く感ぜざるべからざるものありや。全く之れ無しとせざるも、自由國は自由結婚にて我は然らずと稱するが如き、實に形の上のみにて、場合により我の却て自由なることとなきに非ず。

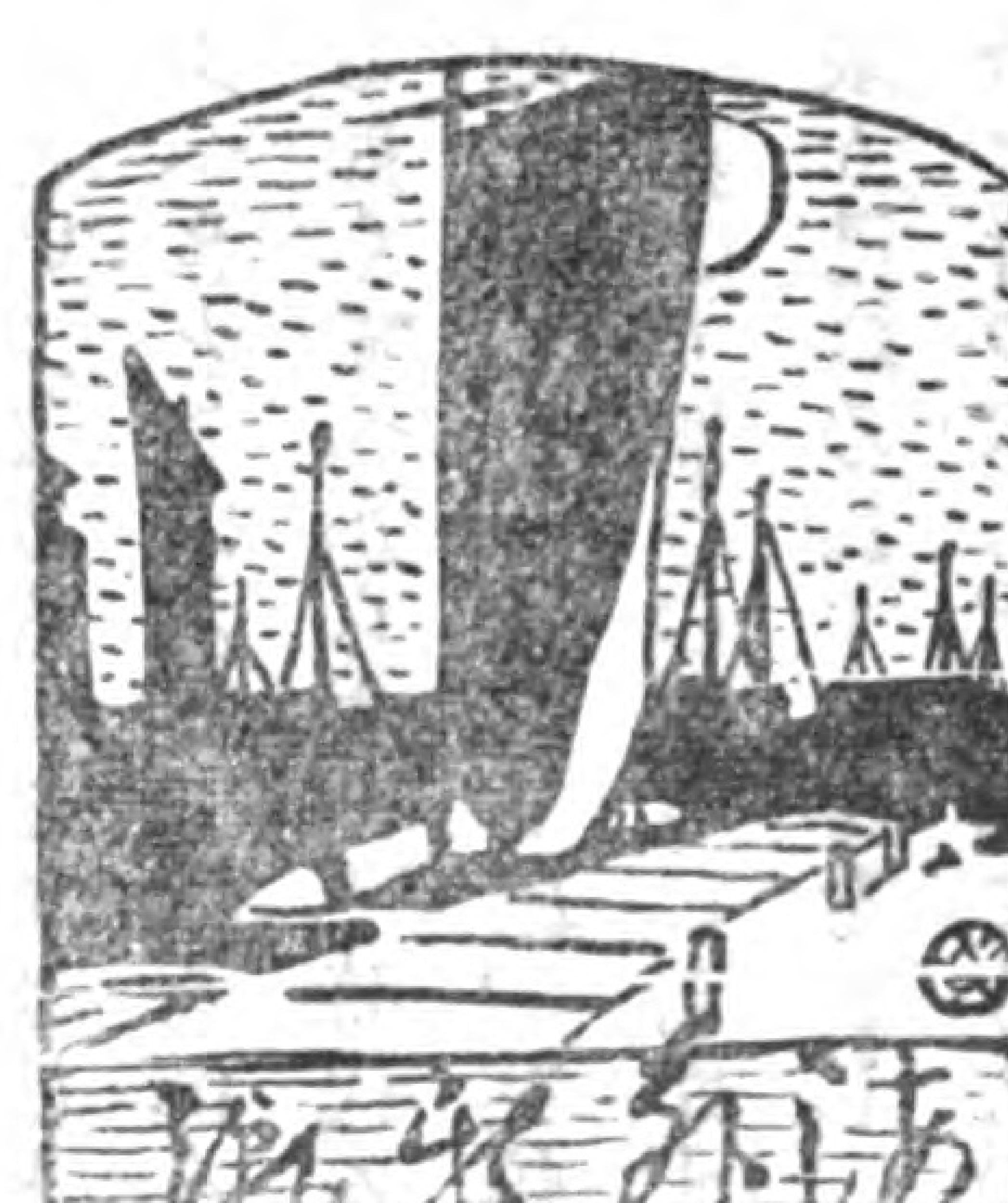
我國にては藝妓の身受けされ、大臣夫人、元勳夫人、侯伯夫人として公會に出で宮中に出て、而かも何の咎めらるゝあらざるが、此等のことは彼に在りて能く爲し得るところなるか。幾種の宗教あれど、倫理の上に如何なる力を有するか、佛教に戒を說くの嚴なるも、文字の上に止まりて實際の敎化に現れず、普通の生活に何程の制限を與へず、基督敎も特に制限を與ふるあらず。政治には猶ほ閥族の習風の存留し、時として是非顚倒することあるが、人の行動を束縛し、煩悶に堪へざらしむる如きこと多からず。己れが理想を描きて之を行ふに困難を感ずるは、一に周圍の壓抑に歸せんよりは自己の力の不足なるに歸するの當れるを見る。乃ち反抗して立たんとするも、何ものに反抗すべきかは明ならず、意の如くならざるもの多し、到るところに存すべけれど、さればとて一たび力を籠めて攻擊せんとすれば、其ものは暖簾の如く、幾何の抵抗力をも示さず、殆んど攻擊し甲斐なき有樣なり。常に斯かる狀態と爲すべからざるも、現時の狀態は正に此の如く、之をワグネルが奮鬪せし當時の社會に比して大なる差違あるを見る。

ワグネルの人と爲りを學ぶは善し、其何事にも驚くべき力を現し、屈せず撓まざりしところは、己れの氣力を鼓舞する上に効あり、其作品は勿論、其理想も亦頗る採るべきあるが、其の煩悶し奮鬪したるところのものを、直に移して我現時に繼承し、模倣せんとせば、如何にも不可思議なる沙汰となるべし。我現代に未だ可ならざるもの擧げて數ふべからず、之を改めんとして煩悶すといはんは善し、されどそはワグネルが反抗して立ちしものと性質を異にするなり。今は反抗すべきものありといふよりも、却てさほどにいふべきものなきに憂ふべきところあり、寧ろ進んで何等か反抗し甲斐のある如くすべからずや。時代の如何を察せずして唯だ煩悶を同じくせんとせば、其煩悶は無病の呻吟たるのみ、初より無きの優るに若かず。それよりは各自の能ふ限り己れの爲すべきを爲し、いはゆる人事を盡して天命を待つべし。煩悶なるものは語こそ違へ、

極めて古よりあり、孟軻の四十にして惑はずと言ひしも、煩悶するもの多ければこそそれに對して言ひしものなれ、煩悶を一種新しきもの丶やう心得、必ず爲さゞるべからずと思ふは誤れり。神經質に過ぎて煩悶に堪へざるは、其身體の健康ならざるを氣の毒に思ひやるべきのみ。煩悶するものは、顧みて煩悶の如何なるものか、何に由りて來れるかを考へられたし。（筆記）

次號の本欄には金子筑水氏、田中穗積氏、河津暹氏の論文揭げらるべく、其他寄稿の約を得たる大家尠からず。

每號連載し來れる男女學生交際論は、本號收むるところの中島、建部、野口の三氏にて既に十有五大家の高見を紹介するを得たり、本號には特に福田英子女史の意見をも載すべかりしところ、紙面に限あり遂に次號まで割愛するに至りしと、讀者と共に遺憾とするところなり、閱歷多き同女史が女性觀よりして如何なる立論の生ずべきか、暫く次號の出るを俟て。



將來の戰爭の經濟的結果

（ペテルスブルゲル、ツァイツング）

ジュール、ロシュ氏は「ジュ、ゼー、ツー」誌上に於て、戰爭と經濟生活との關係に就て論ずるところあり。氏が所論の歸結は、現今の紛雜錯綜せる經濟生活に對して、歐羅巴に於ける戰爭は實に一般的滅亡を來すの外なかるべし、即ち吾人が生息する世界の地層を一瞬にして壞滅する、彼の恐るべき大地震にも對比すべき、吾人が全經濟生活の根本的總破壞を來すの外なかるべしといふにあり、然して氏は彼の一八七〇年、七一年の戰爭（普佛戰爭）に於て使用したる兵力と費用との統計の上にその立論の根據を求めたり、フライチネットの計算に據れば、共和國の戰鬪力は、戰場にあるもの六十八万人、巴里に於ける豫備軍六十万人、合せて百二十八万人を出でず、然してその中には五百万人の國防軍を包

含しきと、然るに戰爭の當初に於て、佛國は之と殆んど同數の兵士に武裝せしめ、その兵力は優り、百二十万人を以て算しき、獨逸の戰鬪力は一八七〇年八月に於て、百十八万三千人、一八七一年即ち出兵の極度に達したる時期に於て、百三十ヶ万人を以て算せりき、然してロシュー氏は一人の兵士一日の費用を、十一フランの割合を以て算出せり、即ち氏の計算によれば、戰爭の總費額九十二億八千七百万フランの内より、佛國が支拂ひたる償金五十億フラン、並に戰爭の結果として生じたる支出十億フランを控除すれば、純粹に戰爭の爲に支出したる費額は尠くとも三十二億八千七百万フランなるべし、今之を戰爭期間八ヶ月即ち二百四十五日と兵力百二十万とによりて比例を立つれば、即ち一人一日の費額十一フランとなるべしと、然るに爾後佛國の兵力は著しく増加して、現今に於てはその常備軍を動かすも優に二百八万人を以て算すべく、之に彼の六階級に於て各十三万人を有する豫備軍を合する時は、實に二百八十六万の兵力を得べし、之れ即ち佛國が戰爭の第一月に於て武裝せしむべき兵員なり、然らば總員一日の費額は三千一百四十六万フランとなるべし、而かもこの一日十一フランの割合は最も低く見積りたる率なる事を記せざるべからず、彼のボアー戰爭に於ける英國人一日の費用は二十フランにして、佛國の兵士より數等安價に給養すべき露西亞の兵士すら、彼の日露戰爭に於ては一日十フラン以上を要したり、



" EVFRYTHING IS QUIET HERE NOW!"
—*Russian postcard.*

從て更に六十万の國防軍をも合して總軍を動員する時は、總軍一日の軍費は三千八百万フランの多額に上るべし、今若し假りに戰爭期間を普佛戰爭の時と同じく二百四十五日とせば、實に其總額は九十三億一千万フランとなるべし、更に又この十一フランの率を以て獨逸の軍隊五百四十万人、奧太利の軍隊二百万人、伊太利の軍隊三百三十万人に對して計算を爲せばこの三ヶ國の一日の軍費は一千億フランの巨額に達すべし、

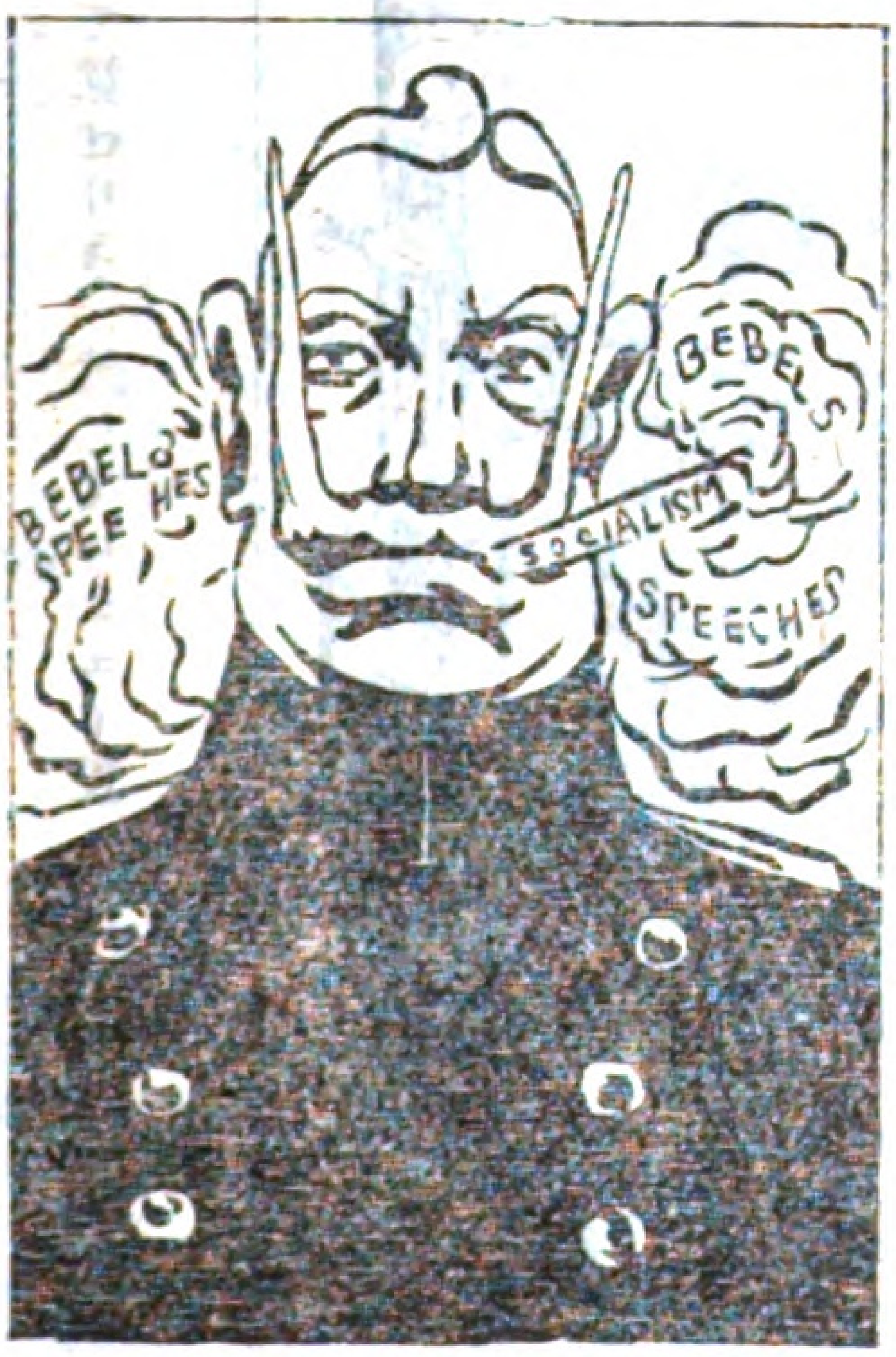
今之を佛國政府歳出豫算の一日の割合一千万圓の中軍事費として支出する、二百万圓の豫算と對比して考ふる時は戰爭中の軍費は平時のそれに比して十九倍、政府の總豫算に比して三倍半以上となるべく、以て其額

の如何に巨大なるかを知り得べし、而かもこの強大なる消費に加ふるに全國の產業界に經濟的恐慌の來るべき事を記せざるべからず、七十年、七十一年の戰爭に於て、佛國はその國立銀行の正貨準備を消費することによりて、漸く一國の破產を免るゝ事を得たり、されば今日に於ては佛國の銀行と雖も、かゝる巨大の金額を支出することは全然不可能なるべし、二十才乃至四十五才の男子は、殆んど凡て戰爭に參加すとせば、生產的企業並に經濟的事業の大部分は、勢、其運轉を中止せざるべからざるべし、玆に至りてはこれ等二百万乃至三百万の男子が單に產業界に失はれたりとのみにはあらず、更に殘餘の生產者をも全然無活力となすに至るべく、斯くては一國の生產は漸く個人的勞働によりてのみ爲さるゝに過ぎざらば、斯かる個人的勞働は近世の經濟生活に於ては、著しく其數を減じたるを如何にせん、而かも之に加ふるに、一般の交通並に社



WILLIAM THE SILENT.

WILLIAM THE TALKER—"It is very amusing to think that a man should become great by holding his tongue."



IN THE SMOKING-ROOM.

KAISER WILHELM—"I am used to smoking pretty strong cigar's, but I don't believe I can stand this one very much longer."

會生活一般の經濟が沈滯するに至らば、その混亂の有樣は一しほ顯著となるべし、街路に照すべき電光なく、市街に鐵道なく、馬車なく、電信なく、瓦斯なく、我世は實に悲慘なる暗黑の世界と化し了るべく、印刷は廢せられ、礦山は破壞せられ、斯くて戰爭は到るところに其最も凄慘なる姿を現ずるに至りぬべし、斯くても尙ほ暗黑の度は刻一刻に增加して、貨幣は遂に全くその流通を停止するに至るべし、

七十年、七十一年の戰爭の間、佛國の三プロセントの國債はその價額の三分の一まで低落したり、而かも當時戰爭なるものは毫も一般的傾向にはあらざりき、之に反して英國の國債は殆んど低落することなかりき、尙今日佛國の國債は四百八十億を算するに關らず、當時は僅に百四十億フランに過ぎざりしなり、現今の戰爭の當面の結果は、一瞬の間に凡ての價値を減却すべき、奇怪なる急轉的衰亡なり、其効果は貨幣制度の根本的危機の現

出なり、七十年、七十一年に佛國を脅したる軟貨の毒々しき妖怪は、轉て益々、その暴威を逞うすべし、千八百七十年の貨幣の危機に際して、時の大藏大臣が發したる叫びは實に下の如し、「この軟貨こそ實にも佛國の悲慘なる根本的滅亡を意味すべきに」。當時は尚ほ佛國國立銀行の關渉によりて、幸にも人々は之に就いて沈默を守りしと雖も、今日に至りては國民は何とて左まで穩便なるべき、必ずや、彼の佛國革命後のアッシグナートの時代は復活し來るべし、即ち軟貨の價値は最早減却せられ、遂には百フランの紙幣は僅に三スーの價値を有するに過ぎず、一磅の砂糖は四百七十フランを、一片の麵包は六十フランを値するの時期は到來すべし、而して歐露亞の戰爭は、獨逸、伊太利、墺太利、英吉利、その何れに對しても、亦同樣の恐るべき結果を來すべし、經濟的滅亡は至るところに發するに至り、斯くて光榮ある勝利はその誇りかなる勝利者に對して、遂に耐え難き高價の獲得物となるべし、然してこの悲慘なる結果は、全社會生活の調和を見るまでには、尚ほ永年の間その狀態を繼續すべきなり。



WITTE TRYING TO SIT ON TWO CHAIRS.
—*Russian postcard.*

西半球に於ける未來の敵手としての獨逸

（リテラリー、ダイヂェスト）

獨逸は吾人の好伴侶たるべきか將た好敵手たるべきか、今や幾多世の老功なる政潮觀察者が意見を定めて、之を解決すべき時とはなれり、レビュー、ブリュー紙上(巴里發行)にてアシール、ヴイアラート氏は曰ふ目下此強大なる兩國間に領會すべき多くの理由存すと、更にフランクフォルト、オン、セ、メーンの有名なる法學者、且つ政論者たるアルブンヒト、ヴイルト氏は米獨同盟說を建言し、グレンツボーテン紙上(ライプシック發刊)にて、暗に其方向に動ける國民の意見の爲にカイゼルが米國に趣かんとを諷せり、氏は曰く、此同盟は獨逸を現在の狀態より救ひ、冷頭を以て歐洲に於ける英佛

同盟を思料するを得しむ可と、レビュー、ブリュー紙に於てアシール、ピラート氏は吾人に語りて曰く、獨が米との同盟に於て如上の利益を得んは固より明かなり、獨にありでは、今、他の大なる海權を有する强國の後援なくして、敢て英國との爭渦に投ぜせんは痴人の業のみ、佛にして一朝彼と絕つことあらんか、彼は威力、實力日に月に加はれる壯鋭なる米國艦隊を措きて、他に豈如何なる援助をか求めんやと。

氏は更に如何にして此計畫が實行せらるべきか、將た此問題に對する贊否何れにあるかを問はんと、獨逸を本土の米國民は想ふに此計畫には贊成なるべく、斯かる獨逸米人は其數極めて多し、千八百二十年以降獨逸より來れる移住民は五百万人、而して現時我亞米利加に居住せる其等の後裔は無慮九百万人を算し、多くは職業者に屬せり、氏は乃ち論じて曰く獨米兩國の野心は能く相伴ひて行動すべく調和せられ得るか、寧ろ支吾すべく、否更に衝突にも至るべき運命を有するにはあらざるか

氏はサモアの事件を追說し、マニラに於ける提督ディエドリッヒ氏が提督デヲウエー氏に對する態度を回憶しぬ、南部亞米利加に於けるヴエネズラと獨逸の海軍演習は又更に兩國の親交に一障害たるを暗示せんとて、推論せられたり、ウイリアム二世自らが明かに終始一貫のモンロー主義の信條には對立せるものなるに、曲げて此に從ひ、友愛と善意との實證を示さんと勉めつゝあるは事實なれど今に米國の信用を回復する能はざるなりと、其文を抄出すれば、

將來獨逸政府は米國に對して至大の友情を示すを止めず、關稅問題に就き近來起りたる兩國の紛糾にも、獨逸は米國の要求に退讓し、僅に其報酬として形式上の讓與を得たるに止まる、斯くも米國に對する溫和なる折衝が、佛に對する更に卒竦なる態度に比して能く幾何の成効を得たりや、吾人は之れを疑ふ、今を去る少時、米國の輿論が獨逸に對して現はせる不信の感は決して消えざるところなり、獨が何處にてか少しく不謹愼の行動あらんか、忽ち惡感を抱懷せしめ、動もすれば、純然たる敵慊心をも起さしむるに至るなりと

記者は更に吾人をして、五十万の獨逸人は既にブラヂルに移住し、且つ强大なる勢力を其土に振ふを想起せしめぬ、南部亞米利加諸邦が尤も孱弱なるラチン民族の一支族の管治下に長く立つこと能ざるは知らるべきなり、其ラチン亞米利加人は早晩四洋に於ける土耳古人或は支那人と成り了るべく、而して獨逸は亞細亞に於けるそれ等の人種を處によりて驅逐したるが如く、又彼等をも驅逐するなるべし、氏は實にグレンツボーテン紙上にて、獨逸移住民帝國が、アンデス山下に崛起すべく、そは古來歐洲人によりて企圖せられたる殖民的事業中、尤も善美にして尤も長久なるものならんと言ひ、更に亞米利加大陸に於ては兩國は決して同盟者たるを得ず、實に敵手たるべき運命を有するものなりと、更に附言していふ、

米獨の親交は兩國何れかの一が其深き根底を有せる野心を甘んじて放棄する時に於て初めて求め得べきことなり、米國は決して新世界に於て行はんが爲に創定せる其主義を棄却することなかるべし、現在に於て如

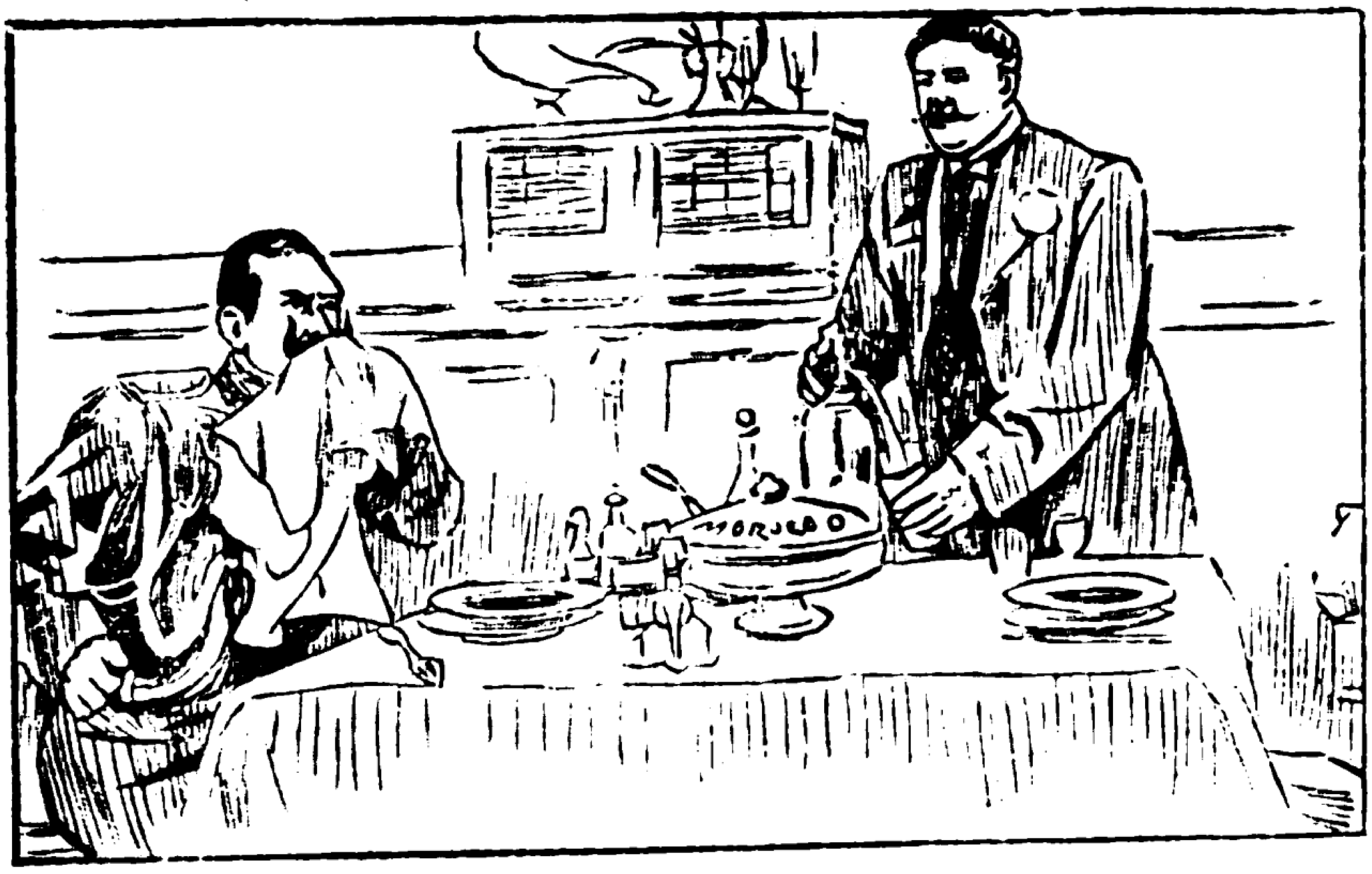
何に獨逸が勉むとも、以て米國をして能く彼が國際問題に關して常に取り來れる細心の態度を變ぜしむる能はざるなり、更に況んや兩國間には多くの抗爭の原因あり、そは獨逸がアンデイルス並にラテン亞米利加等の領域內に全然政治的活動を廢棄するにあらざる限り、止むべからざるものなるに於てをや、と、

歐羅巴の將來

エヴエブリー卿

エヴエブリー　ジヨン、ブホックは「ナインチーンス、センチユリー」誌上にて歐洲の將來に就き論じて曰く、

往昔バビロニアに始まりてカルデアに徙りし世界の文明は、絕えず西方に徙移するの傾向あり、即ち小亞細亞より希臘に轉じ希臘より伊太利に轉じ、更に西方へ西方へと移りて、佛蘭西に轉じ、英國に轉じたるが、此に就きて今日考料を要すべき問題は、其の今後も尙ほ依然舊時の如く益々西方を指して徙移すべき乎、詳言せば英國より更に大西洋を絕ぎりて亞米利加に轉じ、仍りて北米合衆國をして戰爭に於ても平和に於ても將た文明に於ても世界第一と爲らしむべき乎といふこと是れなり、而して今日の論者の中には、之を肯定する人々の多きのみならず、又た實際合衆國の將來當に然るべきを推定せしむるの事例ある少からざるなり。



A HOT MOUTHFUL.
THE KAISER—"Onch!"
BUELOW—"Yes, it *is* pretty peppery, isn't it?"
—*Amsterdammer.*

北米合衆國は領土の大なるに於て能く歐羅巴全洲と匹敵するに堪へ、精細に比較すれば僅々一二十萬方哩の不足を見るのみ、而も是れ數字の上に現はれし差異たるに止り、實際に於ては却て合衆國の歐羅巴に優さりて利益を有する多きを見る。蓋し合衆國の大部は未だ手を着けざる膏腴の肥地なるに加へて、其の天然の富特に諸鑛物は處々に埋藏せられ、猶ほ未だ發見されざるものさへ極めて多ければなり。加ふるに北米合衆國は保護主義を以て己れ自らを煩はすの妄態を固執せんとするの傾向ありとはいへ、其の國內廣く世界列國に向つて開放せられ、新英倫よりテキサスに至る間の廣土は桑港より紐育に至る間の廣土と同じく外國製造品の入り來るを拒まず、特に面積の大を以て言へば、或る他の自由貿易國の孰れにも優にあるを見る。而して此の事たる米國の工業に取り

ては最も重大なる利益なるに、此の新興國の現に受けつゝある利益及び今後更に受けんとする利益は單に此の如きのみに止まらず歐洲列國の間に屢々關税戰爭の起りしと、列國間の均衡を保持んが爲め過大の軍備擴張を事として壯丁に苛重の血税を拂はしめたるとは、亦た自然に合衆國をして種々の利益を得せしむるの原因と爲りぬ。但だ歐羅巴全洲を一括として合衆國と較視すれば、商業の上に於て動もすれば合衆國側に一步を後るゝの形あるを見ざるに非ざれど、由來文明の進步は、富の結果たるよりも寧ろ國人の性格と能力との結果たりといふべく、假し多少合衆國側に商業上一步を他に遜るの形あるにせよ、而も將來の合衆國民が能力及び性格に於て毫も缺くる所あらざるは顯然疑ふべからず、且つ其他の諸點に就ては合衆國决



ITALY'S FEALTY.

Italy is such a loyal friend that she not only remains friendly to Germany, her partner in the Dreibund, but is willing to be friendly to France and England too. —*Kladderadatsch* (Berlin).

して歐羅巴全洲に劣るを見ず、却て或る點に於て優るを見る少からざれば、之を從來の經驗に徵して世界文明の舊に依りて益々西漸し、英國より更に大西洋を絶ぎりて北米合衆國に轉じ、茲に一層の光彩を放つ文華の開發するを見るの時あるを期すべきなり。

是に由りて之を觀れば、北米合衆國は將來の進步開發に最も有利なる機會を有する者たると明かなるが、然らば歐羅巴列國は如何にして進步開發に後くるゝを免かるを得べき乎、吾人の觀る所を以てすれば其の方法蓋し二あり、即ち一は關税的戰爭を止むることにして、他は軍事的競爭を止むること是なり。

若し北米合衆國に比して約四倍の人口を有せる歐羅巴列國をして各々其の關税の障壁を撤去し、仍りて全く關税的戰爭を止めしむるならば、

乃ち列國は是に依りて少くとも其の失へる一半の好機會を收回するを得べし。試みに最新發行の青冊に就て檢すれば、佛國と瑞西との關稅戰爭露國と獨國との關稅戰爭、及び佛國と伊國との關稅戰爭に因りて如何に多くの損害を釀生したるかを見るべく、且つ列國の間に釀生したる此の損害が更に延いて全歐羅巴の不利益を釀生するに至りしを察するを得べし。而して此の點に於ける究極の問題は、關稅戰爭を止むるが爲めに眞個の損失たるべき者の孰れなるやに在り、即ち爲めに損失を被むるべき者の苦痛は決して尠少に非ざるべきも、而も歐羅巴をして將來に現はるべき最高文明を其の洲内に培はしめんとするならば、先づ打勝たざるべからざる大敵の此に在るを記するを要す。

次ぎに務むべきは戰爭——如何なる戰爭——をも之を避くるに在り。我が英國の陸海軍費は過去十年間に五千萬磅（約我が五億圓）以上の增加を見たるに、ロバーツ元帥は猶以て足れりとせず、却て今日の軍備の狀態を以て千八百九十九年の冬（即ち南阿戰爭の開始の際）に比らべて稍々劣れるものとありと爲せり、夫れ我が英國陸海軍費の增加が、獨佛兩國を合したるよりも尙ほ更に多きことは、各年度の歲計に徵して瞭かなるに、我が軍備の擴張に熱心なる元帥は乃ち猶ほ足らざるを絕叫する此の如し。且つ更に歐羅巴全洲を以て北米合衆國に較ぶるも、今日の歐羅巴は合衆國に約四倍せる人口を有するに、其の陸海軍人は則ち合衆國に約四十倍せるは、實に統計表の明示する所なるが、是れぞ大西洋の彼岸に國せる合衆國が將來の進步開發に於て大西洋の此岸に國せる歐羅巴に優さるべきを期すべき理由の一なる。但だ歐羅巴列國民相互の交通は近時一層の頻繁を加へ、將來尙ほ益々親密を加ふべき傾向ありて、列國民の互に混居雜住せる結果、今や外國人を以て他を目するの風漸く止みつゝあり、特に此の傾向の歲を逐ひて益々長じつゝあるは事實の明證する所なりとはいへ、此際尙ほ一層望ましきは、此の傾向の遍く歐羅巴全體に擴延するの一日も速かなることなり。軍國主義の歐洲に威を逞くせること既に久しく、各人を安んぜしむべき座席として銃劍の不快危險なるの恰も彈藥函の不快危險なると同じきは、何人も之を認めざる莫し、是れ早晚必ず勢を失ふを見るべきものにして、今後開かるべき海牙萬國平和會議こそ、實に歐洲の弭兵に就きて多大の希望を屬すべき所なれ、此に於てか吾人は斷言す、海牙萬國平和會議に於て最も愼重に討議さるべき議題中の大議題は、即ち歐羅巴の將來に關する問題なりと。（日本人）

ゴルキーの演說

（エヒヨー）

三月十九日、ベルリーネル、セチエッション俱樂部の催しにかゝる、マキシムゴルキー氏の歡迎會に於て、氏はリーベルマン氏の開會の辭に對して、答辭旁、大要左の如き演說を爲したり、

之を譬ふれば、地球は宇宙の間に存在する新羅萬象の凡てを理解し、夢の如き凡ての謎語を解き、斯くて眞善美の美しき調和を遂げんとて、

男々しき希望の光を掲げて不斷に鼓動する宇宙の心臟なるが如く、藝術はまた全き人生を包括する我地球の大なる心臟なり、凡ての人類が欲求する努力の實行を擧げしめんとて、靜心なく移り行く我等が千變萬化の精神生活を寫し出して、吾等が喜、吾等が悲、凡て喜悲哀歡の凡ての感情の多樣なる色彩を、その妙じき亢進の妙音に描し出すべき我世の大なる心臟なり、藝術は凡てのものに同情し、凡てのものと共に悲痛し、譬へば、彼の昭明なる太陽の如く嚴正に、威風凛々しき勇士を贊すると共に、又最も微小なる者の果敢なき事業をも愛撫する、實にも愛と眞理との永劫不斷の源泉なるなり、又譬へば凡ての人類をそのいつくしき愛子としてはぐゝみ玉ふ慈愛の母なるなり、藝術は現實の邪惡にして暗黑なる忌はしき凡ての力の對抗あるにも拘らず、尙は且つ自由ならざるべからず、我故國は人類の最も痛ましき憂悶の國なり、これ即ち我故國の藝術が常に好んで死と煩悶とを描くの傾向を有する原因の一なるべし、現代に於て實にも壓制が如何に我故國の凡ての苦痛煩悶の根原なるや、されど吾國民は彼の覇者を苦しむる卑劣なる重荷をその肩上より拋たんとて、今や猛然として蹶起したり、その掲げたる正義の刀は必ずや光榮ある勝利を以て酬ひらるべし、斯の如くにして新しき藝術、光明の藝術、淸く誇りかなる藝術!!、満場の諸君、諸君は藝術を愛せらるゝ、藝術の熱心なる崇拜者なり、今や予は滿腔の誠意を以て藝術に憧憬れたまふ諸君に向て、諸君が露西亞人の自由戰爭を助けられ、以て新しき藝術、自由なる露西亞國民の藝術の出產を一日も早からしめん事に助力せられんことを望む、學藝の世界に於ては、堪えて希臘人種、又は猶太人種の差別はあらず、等しく之れ眞の同胞なり、諸君は諸君が熱心に予を迎へられたる時に於て、既に一度明に此事業を擧止せられたれば、余は更に諸君が再びこの事實を全世界に示されて、吾國民の爲に助力せられ、斯くて最後に藝術は地球の純潔美妙なる心、この心に對しては凡てのものの互に相接近し、互にその權威を等らし、斯くてそは凡てのものと苦を共にし、悲を相分つべき我世の純潔なる心なることを遍く世に宣示せられんことを切望す。

猿腦と人腦

クラウゼ及クレムブネル述

クラウゼ、クレムブネルの兩氏は猿の腦につきて、研究したる結果、「オラングー」の腦の構造は「シムパムゼー」の腦よりも下位にあることを說明せり

兩氏の實驗に依れば、「オラングー」の腦は幾多の關係に於て、初生兒或は幼若なる小兒の腦に類似し、之に反して「シムパムゼー」の腦は許多の點に於て生長せる大人の腦に類似す

是に由りて之を觀るに、「シムパムゼー」の腦の構造は「オラングー」と人との中間に位するものと云ふべし

（人　性）



病戀愛

芥　舟

大抵ローラン說の病戀愛を讀了された頃であらうから其紹介をとの御注文でありますが、そう右から左へと容易に準備も出來ませず、夫に西洋殊に佛蘭西あたりては此種の研究は仲々盛んでありまして研究の大家は數多く研究の徑路は複雜で吾々素人の推測する程簡單なものではありませぬ、社會の機運は兩性問題の眞摯なる研究を日々に必要として來ましたから專門家の手を經て詳細に紹介されましやうし、また研究もなされるてありましやう、茲に擧げますするのは無論心理的生理的研究と銘打つ程のものではありませぬ、一回讀切りの目的には自然簡單なものでなければなりませぬから、フィンク說の戀愛論の一節として戀愛と氣違との類似の三點を擧げ且つ次に病戀愛に就いて略述して見ましやう。

天才と氣違と似たところがあると言へる詩人等は、また戀愛と氣違と似たところがあるといふことを發見しました、戀愛は一種の氣違であるといふ觀念は旣に古るくプレトーからありますので、少壯の男性美を崇拜することは氣違じみた不合理の人間の理性を失つたことだと言ふて居ります、總ての愛情を病氣と見立てて居りまするストイック派は戀愛を重い病氣として居ります、それから近世詩にも同一の見立方は數多ありまして現に沙翁の文句にもチラホラ見えて居ります。

一體斯く詩人等の朧げに感じたところに眞理の基礎がありますので、今日精神病のお醫者さんは昔のやうに患者を暗室に監禁したり鞭撻を加へたりはしませぬ、精神病患者は頭腦の病氣と見做されて研究も分類もされた上に衞生や治療の原則に準じて取扱ひを受けて居

ります、精神病學に採用されて居る分類を戀愛の徴候に比較對照して見ると、氣違と戀愛とが主として次の三點に於て相互に類似して居ることが分ります。

抑も〳〵氣違の人が自己の想像の生む幻影を外界に描くには幻覺と錯覺とに依りまするが、幻覺といふのは想像が架空に創作して外界には之れに相當するものも乃至之れらしく思はしめるものもないのでありますが、幻覺に惱む患者は空處を凝視して或は朋友を視或は魔物を視ます、而かも其朋友や魔物は手以て觸れ得べき實在物のやうに明晰に見えるのですが、是れは患者が心の眼に描き出すのです、錯覺といふのは之れと異にして外界には錯覺の原因たるべき實在物がありますが、病める想像は其物を誤解して外界の實物と內界の幻影と殆んど類似が無い程になりまして、錯覺に惱む患者は蠟燭を視て太陽と考へ足音を聽て雷鳴と思ふのです、丁度是れは戀愛中の人が自分の戀ひ慕ふ相手のものを、實際は夫れ程でもない平々凡々の人であるのに、楊妃衣通姬のやうに美しく業平丹次郎のやうに優しいと考へ、色々の秀でたる性質を具備して居ると思ふと同樣ではありませぬか。

それから氣違の極めて普通な形式に被害妄想といふのがあります、之れに惱む患者は何人も盡く己れを注意して居るやうに思ひ、己れを訝しく怪しむで居るやうに思ひ、甚だしきは己れに害を與えんとして居るやうに思ふ、或僧侶が之れを惱むでからは自己以外の總ての僧侶が徒黨を組みて自己を祈り殺す企圖があると考へて身親ら寺々に行つて他の僧侶の言句を聽いたところが、隱約の裡、機微の間に果して自己を祈り殺す企圖が現はれて居るやうに思ひ、手紙を管長其他の當路者に送つて罪惡の報告をなし、彼等にして依然として改むることなくむば正當防禦上止むを得ざるが故に彼等の身の奇禍を招ぬくあるべしとの威し文句を用ゐたのです、パスカルの言ふた辭に「戀する時は人悉く之を知るが如くに思ふ」"Quand nous aimons nous nous imaginons que tout le monde s'en operçoit."—Pascal. といふのがありますが、一體戀愛中の人は自己の周圍に

居る人々か悉く自己の秘密を窺知するに相違ないと感ずる、斷えず斯樣に掛念して居るものであるから大抵は遂に知られて仕舞ふのです、それから嫉妬の念にかられて毛程のつまらぬことを薄情の證據にしたり、外の人に空世辭をなしたのを戀の仇敵に考へたり、微笑を向うの人にしたから心變りの爲めだなどゝする類が數多ありますが、斯うして見ると戀人は先きの僧侶と何處に違ふところがありますか、單に僧侶の場合よりも戀人の場合の方が病める想像の常態に立ち歸へることの容易といふより外に差違はないてはありませぬか。

それから戀愛の人と氣違の人とは憂欝の頃には共に寂しいところを好みます、氣違の人は日となく夜となく頭腦のなかにある一の觀念のとのみに氣を取られて四圍の事物には平然として動かずに獨坐して居ります、瘋狂院を訪問すると欝狂の患者が自由にしてある處ては各々他を顧みず獨り寂しい場所を探す樣子を氣付かぬ者はありますまい、しかし如何程氣違の人が孤獨を喜んでも、彼の戀愛の詩人バーンスが其情人と共に羽翼を擴げて此浮世を飛び去つて天空の彼方に唯だ兩人丈で樂しき日を暮らしたい、引力の法則以外に出てゝ星辰の間を逍遥し自ら湧き出てゝくる歌に托して相互の思ひを語り合ひたいなどゝいふ大袈裟な孤獨を考付くには至りますまい。

斯うして見ると、氣違の錯覺には戀愛の誇張傾向に似たところがあり、氣違の被害妄想には戀愛の嫉妬を偲ばせるところがあり、氣違の孤獨には戀愛排他双棲を想はしめるところがあります、

歷史を披ひて西洋の男性が女性に對しての鄭重慇懃な行狀が極端まで走つた跡を讀むと氣違に近い點が數多ありまして、例せばムーアの所言に依れば雅典て希臘の一少女を戀ひ慕へる詩人バイロンは希臘に行はれる慇懃を示す一行爲として自己の短劍て自己の胸上に疵をつけたとしてありまするし、メモアール、シユール、レスパーニユの著者マダーム、ドーノアの所言に依れば、十八世紀の始めの西班牙ては、女性を伴ふ時に男

性の腕の下に女性の腕を取るを失禮として、西班牙式上衣の寛濶なるを腕の周圍に捲き纒つて其臂の上に女性の腕を載せたとしてありまするが、殊に中世紀の騎士等の行爲の氣違じみたことの數々あるうちに下の如きは甚だ可笑しき一例でありましやう、十二世紀のトルバドールでピール、ヴイダルといふのは戀人の名がローバとて狼の意味であるが故に其機嫌をとる考で狼の皮を被つて自ら狼になり澄まし、狼の吠える聲を出しながら山中に這入つた、すると羊番の犬共は眞の狼が來たと思ふたから寄つて集まつて辛い目に遇せたといふことであります。

一體戀愛の特徴は何に限らず顯著になつてくると時として瘋狂院を想起させるものです、平々凡々の男が平々凡々の嫁を格外に自慢する工合は天下の將軍也と巣鴨で意張る蘆原將軍と同じく可笑い、常人同志の相惚は勿論、親類縁者の得心づくにも關せず、嫌がる嫁を無理に婿が捉へて行く假りの形式が今日も數多の國にありまして羞恥を示す型になつて居りますが、此習慣の起原を知らぬ人々には全然氣違と擇ぶ所がありますまい。

是れ迄述べ來つた一般類似の外に實際の氣違であつて病戀愛といふ眞正の精神病があります、ハムモンド醫の言ふところに依りますと病戀愛に惱むで居る氣違の女性は其戀愛を一人に限らないで男性全體を嘆賞して何人にも結婚申込をする、斯ういふ患者を病院に入れて置くと、看護人にも醫者にも乃至は男性の氣違にも秋波を注いだり微笑を漏らしたりして戀愛に恒久の性質を缺き、甲から乙へと氣移りする鹽梅が洵に容易で又理因が極めて輕少ださうです、或る患者がハムモンドに向つて「妾はね、——醫士さんに岡惚れして居るのですがね、彼の方は昨日遲く此室に來たのですもの、それで今は貴方に惚れちまつたわ、これから始終來つしやいな、ね、ね、宜いてしやう」と話して居るうちに院長が見えたら患者は早速「あらまあ、斯の情夫は何だつて斯う暫らく來なかつたの」と大聲で叫んだ。

フオン、クラフトエービング教授は其有名なる著書精

神病學中に病戀愛を概括して下記の如く言ふて居ります、「社會の地位に於て自己より必ず高い異性の者に自己のみが特に戀ひ慕れると妄想するのが病戀愛の根本始原である、それて其人に對する患者の戀愛はロマンチックであるが全然所謂プレトー式戀愛であることは注意する價値がある、此點に於いては西班牙のセルヷアンテスが鈍機翁物語て打擊した昔時の騎士を想起せしめる、(中略)斯かる患者は向うの人の顏付身振は悉く意義があつて自己に對しての應答だと推測する、自制は急に喪失して、つまらぬ些細な事も戀しいとの符號、近寄れとの勸誘だと思ふ、他人に關する新聞廣告さへ思ふ人からの音信と想像する、終には幻覺が起つて患者は戀人と談話をする、錯覺も加勢に來て他人の談話に自己の戀愛事件を聽く想ひをする、自惚れに昂心して嬉れしく感ずる、(中略)最後に患者は妄想に相應する行動を始める爲めに噴飯の種子となつて社會に放任して置くことが出來ず、止むを得ず癲狂院に入れるやうになる」(完)

机上小観

戸川秋骨

一 自覺の苦悶

Aus der Nacht der Bewusstlosigkeit zum Leben erwacht findet der Wille sich als Individuum, in einer end=und gränzenlosen Welt, unter gahllosen Individuen, alle strebend, leidend, irrend; und wie durch einen baugen Traum eilt er zurück zur alten Bewusst losigkeit.

無明の闇より出て、限りなき世に生を享けて、人となれる意志は、もろ〲の友と共に、迷ひ悲み、はた悶へつゝ、恐ろしき夢より発るゝ如くに、急ぎて舊の無明の境に入るなり。

淀の川船の乗客すでに滿ちて、今船を水上に浮んとして、これを坐上せる砂汀より押し出せり。たま〲砂上數多の蜆貝、これに轢かれて壓滅され了せり、旅客

の一人これを見て憐憫の感にたえず、同乗せる出家に問ふ、ア、此無辜の故なく死する、抑もたれの罪かと。僧言下に答ていふ、問ふ勿れ、此れ則ち汝の罪なりと。こは嘗て法話の書に讀みし事なりと記憶す。佛家の教理は吾知らず、此の一話自覺の罪業を教へたるに感銘する處殊に深かりき。人生は罪惡なり、苦悶なり、知は罪なり苦なり。一たび無明の境を出でゝ、有漏の世に生る、則ちこれ懊惱の世界に入れるなり。赤鬼青鬼の訶責に苦むなり。知る處いよ／＼多くして、苦は益々深し、若しそれ罪業を恐れ、煩懊を厭はゞ、去りて山の奥に入れ、山の奥に鹿の聲悲し。如かず化して犬馬とならんに、犬馬に煩惱あり、むしろ木石たらんには。意志の存する處、死もまた苦を滅し得じとは、西哲の教なり。ア、如何にして救はるべきか、如何にして涅槃の境に入るべきか、ア、罪障の世や。

當初上帝天地を創造し給へり、こゝに人類を保育し給へり。無爲無覺の人類は其樂園に優遊せり。忽ちこゝに誘ひありき。惡魔來りてかれ等に自覺を與へぬ。かれ等に善惡を知るの樹果を味はしめぬ。禁制の木の實其味の甘き事如何ぞや。ア、然れどもこゝに彼等の眼は醒めたり。こゝに彼等は自覺の境に入れり。これよりかれ等罪障の子となれり。然りかれ等は世界の人類となれり、まことの人間となれり。罪は人世なり、苦は世界なり。抑も亦何等上帝の愚算ぞ。

頃日知友藤村子に「破戒」の著あり。一個平凡善良の小學教師、始めて其穢多族なりしを自覺して苦あり。彼自から苦み、自から影を書き、自から形をつくりて、而もまた自からこれを蔽はんとし、これを蔽はんと欲して、益々これを顯出す。自覺終にかれの靜平を破れり。自覺は世の悲劇なり。自覺の悲劇は宇宙永久の態なり。

顧て思ふ、文藝復興の當時は奔放の時なりき。また自覺するの暇なかりき。次て宗教改革に及びてや、内省的となれり。然れども下りて前世紀智識の進度著しく、こゝに苦悶懊惱やうやく益し來れり。進化出でゝ、人生の解釋一新せしと雖、根帯の問題なほ益々疑問を加

へたり。世紀末及び現世紀に至りては更らに甚しとす。人智年に進み、心眼日に開けて、苦惱益多し。近時蜚出の吾が預言者に、得意の氣焰見えて、此の苦惱の姿なきはむしろ異とすべし。似而非預言者の蜚出は笑ふにたえたり。青年男女の所謂煩悶は憂ふべし。而も洋の東西を貫きて、宇宙的苦悶の溢るゝは事實なり。抑も何者かこの横流を沮むべき。前世紀の苦は前々世紀の知らざる處、世紀末の苦は、世紀當初の苦にあらず。似而非預言者、懶惰青年男女は知らず。世に苦悶懊惱のあとは絶えじ。アヽ如何にして救はるべきか、如何にして涅槃の境に入るべきか。牛馬となり、木石と化せんか、抑も亦如何にして意志を滅すべき。然れどもこの意志夫れ終に滅すべからず。如かじこれをして益々向上せしめんには、勇猛、奮闘、苦戰して吾が性を磨き、聖賢となり、神人となり、依て以て涅槃に入り、神とならん。人生の極致こゝに在るのみ。此れこの苦惱の世に處すべき唯一の奮闘的生活（ストレヌアスライベ）たるなからんや。

二 基督教會は時勢に後れたり

余は頃日密かに吾が社會事物の變遷の跡を考へ、其進步の急激なりしに驚嘆しつゝありしに、計らずも一事の現社會の事物と全く逆行せるものあるに心附き、好奇の念を以てこれを觀察するを禁じ能はざりき。一事とは則ち基督教會をいふ。則ち余は斷じて基督教會は時勢に後れたりと言ふを憚らざるなり。然り宗教に古今なく東西なし、そは人間終極の渴仰なり。それ宗教は人の性なり、人性の上に其基督を置ける基督教の、其教會また古今なく東西なし。然るを號して基督教會は時勢に後れたりといふ。識者は言の淺薄輕浮を笑ふべし。而も余はなほ重ねてこれを斷言するに躊躇せじ。」顧れば明治時代事物の轉化變遷は驚くべきものあり。殊に過去の十數年に於て然りとす。一時間數十里を疾走する汽車に乘れるものゝ如く、目眩み頭舞ふの感なくばあらず。その進步變化の急なるや、徒に海外に留學するもの、時勢に後るゝの恐ありとは、某知名の士

の言なりしと記憶す。これまことに現時の狀態を說破して餘ありといふべし。而して其進步變化の由來たるや、吾が社會の特に日淸戰爭以後、一躍活動の世界に入り、新事物智識を吸收するの急なるにある事勿論なりと雖も、其新事物新智識を吸收する機關となり、其手段となれるものは則ち新時代の新人物にあり。新人物の出顯則ちこれ時代の進步なり、新進氣銳常に時代の先頭に立つ人士の輩出、これ尤も世運消長の關する處たり。然りと雖も新進氣銳とは單に年齒の豐なるを以てすべからず。則ち新思想を有し新智識を蓄へたる識者を指すなり。

余は現時の狀態を攷へ、其停滯して進步なきものを數へて、僅かに政黨と基督敎會とに想ひいたれり。然れども政黨の一面、舊態を株守するむしろ厭ふべきものありと雖も、なほ近時の進步は頗る注目に値すべきものあり。現首相年齒すでに耳順に近くして、其鋒鋩の往年政黨に名を列ねたる當時の面影ある、侯の一身すでに政黨の一新現象たり。殊に偶然にも政黨界の新空氣が、其一半基督敎會に關聯せるに至りては奇といふべし。德富氏は政黨に加入せずと雖も、其政界の雄たる全くかれに緣なき人にあらず、而も其主義主張の變化や驚くべし。横井氏は敎壇より入りて政黨員となれり。西園寺首相が參謀長たるの觀ある竹越氏亦敎會に關係ありし人、而も現時政黨の間に新思想を注入する、氏は其第一たり。此他二三の所謂高襟黨と惡稱せらるる人、常に政黨の空氣に刺激を與へて、おのづから此れが發展に力めつゝあり。今日の政黨は又昔日の政黨にあらず。今基督敎會若し斯くの如きを見て、自から政界淸新の本源たりと誇る處あらば、これ自からを知らざる大愚の爲たり。かの諸氏は敎會をすてたるなり。敎會は諸氏を包藏する能はざりしなり。蓋し何人も諸氏が爾後の行動の明らかにこれを證するを見る能はざるほどに盲目なる能はざる也。現時の基督敎會に安んじて自己の生命を托し能はざるもの、必らずしも前記諸氏の如き才人にのみ限らざるなり。些少の志あり多少の識見あるもの、相率ゐて反き去ると雖も、敎會は

これを防渇する能はざるなり。生命の淵源にして、而も志人識者の生命を預る能はざるは、豈に末路と言はざるべけんや、抑も亦時勢に後れたりと言はざるべけんや。

現代吾が政黨の機略權謀に富み須臾も一定せざるに反して、宗敎は本來靜止的のものたり。たとへば羅馬舊敎の如き、萬古不易一貫して變る所なし、かくの如きは幾多の弊あると共に實に、宗敎の美處たるを失はず。余は舊敎のことに宗敎の性に合へるに敬服せり。若し夫れ羅馬舊敎の如くんば、時代に後れ前立つの譏りとはた賞讃との外にあるべければなり。然れども新敎に至りては全く其趣を異にす。其根本の主義すでに舊敎と異れり。新敎は當初より自由を稱へたり。個人の自由を認容せり。故に敎會は必然敎派に依りて區分せられ、終に其停止する處を知らざるに至れり。新敎の各派はユニテリアンを生じ、ユニテリアンは唯物論に至らざればやまず。其結果する處、信仰は全然各個人の主張となり、これに滿足するの外に道なきに至り、こゝに敎會は絶滅す。此れ新敎主張の論理的結末なり。然れども新敎の此主張にも亦其美所あり。進歩開明の社會に處す、宗敎も亦おのづから斯くの如くならざるを得ざるべし。然れども果して斯くの如くならんと欲せば、則ち宗敎に東西なく古今なしとして泰然たるべからざるなり、はた能はざるなり。然り敎會も時勢に後るゝ能はざるなり、何となればそは敎會自からの主張たる、自由と進歩とに矛盾するものなればなり。

今は敎會興起の時なり、爲すべきの事業積んで山を爲せり、况んや氣運は宗敎を渇望せるをや。所謂時機なるものは來れるなり。見よ、世には所謂自稱神佛なるもの出現して、想界を騷がしつゝあるにあらずや。かれ等の徒或はそれ自負驕慢の結果こゝに至れるものならん。然れども其心裏豈に一片の誠心なきを得んや。かれ等をしてこゝに至らしめしもの、豈に時代の要求する處あるに依らざらんや。而も基督敎會は一指をだにこれに加へ能はざるにあらずや。抑も亦かれ等をして出現せしめし事實、すでに敎會の恥辱ならずや。神

秘主義は歐洲の想界に瀰漫し、文學藝術に偉大の勢力を及ぼしつゝあり。何事にも容易に動かされざる盤石の如き英國に於てすら、此氣運現代を動かしつゝあるは頗る留心すべき事實たり。かれの神秘主義と吾が神佛と何等關係する處なからん。而も東西融和の急潮は、自からこゝに至らしめしや未だ知るべからず。現に神秘のメーテルリンクはうるさき迄、吾が詞壇に紹介されつゝあるにあらずや。象徴派の詩盛んに稱道せられつゝあるにあらずや。象徴これ神秘の一面にあらずや。神秘これ宗教の捉ふべき大機會にあらずや。而も基督教會は此等に對し、如何なる態度を取れりや。余を以て見れば、教會は凡ての新思想凡ての新氣運に對して恬然超然主義を取れるが如し。否、抑もこれを了解する事だに能はざるが如きの觀あり。かれ教會の知れる處はウオーズウオース、ブララウニングのみ。ウオーズウオーズ、ブラウニング亦可なり、只其着眼の舊套なるを憾む。老衰は蓋し新氣運を感知する能はざるか。アヽ老衰、此れ凡てを解釋するの秘鑰たり。吾が社會の轉化變遷は靑春の氣に依りてなる。必らずしも年齒を言はず、何れの方面を見るも、常に新進の後繼者相率ひて、先進を押し且つ排して進むなり。此に於てか先進後進共に一日安逸なる能はず、安逸なる能はず、故に力行研鑽日もこれ足らざるなり。力行研鑽日もこれ足らず、故に進歩あり。今翻りて基督教會を見るに、曩きには有爲の士を逸して、今や先輩を凌ぐの後繼者なし。必らずしも神秘主義を解せざるを咎めじ、氣運を捉へざるを異まじ、余は只後繼者新進の士の全然教會に求むべからざるを見て、以て教會は時勢に後れたりと爲すなり、吾が斷案非か。政黨の依然伊侯隈伯を仰ぐはなほ恕すべし。何となればかれ等は神輿として擔はるゝに過ぎずして、新進の士は少なからず後陣に輩出せるものあればなり。而も教會には十年二十年はた三十年、以前の老輩なほ局に當りて事を執れるにあらずや。老輩の跋扈は可なり、老輩必らずしも老衰にあらざればなり。余は斯界宿老の過去を想ひ其十年一日の如くなるに感謝す。然れども靑年の士一たび教會

に入りて生色なく、老蹟の模型に入りてまた進まざるは如何。此れ實に敎會其ものゝ老衰する唯一の原因なりとす。

果して然らば其後繼者の輩出せざるは何に職由するか。アヽ夫れ何に職由するか。これ頗る注意を要する問題なり。基督敎其ものゝ性質と廿世紀以後の新思想との關係、さては吾が國民の性情との關係より深く考察すべき問題に屬す。

路傍觀

いとう政女

△かう電車が通ッてしまッては。あんまりをかしい御話てはなけれど。十軒店の何處ぞの娘に。無類飛切と云ふ代物が見たし。正眞のは無いとしても。小説位にやア有りさうなもんね

△思ひつきの名は通町の小紅屋。なるほどこれならば。つひそこに柳屋をひかへて居ても。些ともめげぬ筈だわいと。うなづかれる店つきなり。但し看板が少々中横にして。

△上から覗いて見ると。箪笥。茶箪笥の眞新しいのを横にして。意氣な年增と向ふ前に。一盃引掛けて居る紋々の大肌脱ぎ。江戸と云ふ所は動かぬ新場橋も。まん向ふに。坂本小學校。消防分署と云ふ半西洋があッて千兩と行かず

△結綿に。しぼりばなしタップリ掛けて。高等な浴衣に博多の帶。それも。今の上の方ばかり。帶揚小高くした流行とは事變り。下へ／＼と重みをつけたしめやう。乳母を相手に凉臺で。團扇をつかはうと云ふ娘は。東京中をザット見渡した所て。一の橋。三の橋の間より外にはない樣なり

△同じ鳶口を使ッても。深川のは水の上川並と云ふ商賈をして居る男。木場から洲崎へかけてタントあり

△葬儀屋のどこへ行つても大きいのは。まさか。數が少いからではあるまじ

△「本郷もかねやすまでは江戸の中」

と云はれた。あの草分の店が。リボンや花束を別に出すやうになつたは嬉しくなし

△氷月でおすしをやるやうになつたのも右同斷

△殊に猿飴の家が。駄菓子を賣り始めたは。目も當てられず

△川柳に伊勢屋と云ふものがある爲めばかりではなし。呉服屋の屋號の伊勢何。々々々には何だかそこの主人の風采が思はれて。ヒヤ〳〵するのは此方が惡いのなるべし

△氣の知れぬ町名は。麻布芝森元町

△男橋。女橋

人形町を通り抜けて。中洲にかゝる時。何だか餘所の國に入るやうな思ひのするのは。あたし一人かも知れず。こゝの住人は。何方かと云へば深川的

△流行は。こゝにも入つたものと覺しく。博物館の入口にも。庇髮の可愛いのが。歴史風俗人形の寫眞を賣つてゐることよ

△新川の中央商業學校

七軒町の第一高等女學校

ありさうもない所にあるもの丶二ッ

△場所にあれば。敷金の三百圓も取らうと云ふ。土藏附二階造の貸屋マッチ箱宜しくの屋臺を周圍にして。入谷の眞中にスックと立ッ。半年末だに入るものなし。其癖家賃たッた九圓

△東竹町の女學校が。校長の銅像を門番みたいにして置くは洒落にもならず

△雲井形。すゞめ形。當世風

意氣の。野暮の。どちらつかずの。家々によりても。とり〳〵髷形はあるものなれど。判らないのは。元祿形と云ふやつなり

△あの時代に。こんな格恰の丸髷はありしとも覺えず。さればと云ッて。模樣などは樣子がちがひ。元祿と云ふものを形にあらはすべく力めた。此髷の作者は。よッぽと發明なお人で御座んせうと。先づ申してもおきませう

△三色咲分け牡丹あり

縱覽隨意の門の貼札。處は大久保なり。躑躅は今が盛りなり。序に見せて。茶代でもせしめる積りかと。入ッて見れば。さうでもなし。さては。朱鷺色。緋。牡丹色の。珍らかにも大きやかなる。此花を御自慢の庭かと思へば。見よがしの主が面もなし。何れは風流の上だらうと。あちらこちらを眺め廻せば。これは又。ぶちこわしな——紙を短冊なりに小さくきりたるを。それも黒い木綿絲でブラ下げ。鉛筆を添へて置て椽臺の前

△堀切くんだりまで客を呼ぶ程なら。勝武餅や。泥くさい鯉こく位で。お茶をにごすは心得ず。菖蒲の御客に。口果報は受けさせぬ積りか知らねど。たゞ行ッて。花ばかり見るのはあつけなし

瞥見佇想錄

村山鳥逕

こは皆我日記中の一節なり。讀者より厭ふ處單に短見陋想の譏ならんのみ。

△四月十六日（月曜　晴）毎年櫻時分になると、身體の具合が思はしくない。今年も此二三日、殊に今日の如きは朝から濃い陰欝な霧にでも包まれて居るかと思ふやうで、實に氣色の惡い一日を暮した。然し夕方から散歩旁神田の○○氏に招待されて居た晩餐會に出掛けた。其歸途の事で、十一時は少し廻つて居たらう、それでも甲武の電車がまだ出るさうであるから、御茶の水の停車場から、ギシャ〳〵ギシャ〳〵と獨りで鳴つて客を待つて居た二臺連結車の前部に飛込むだ。例の通り頗る明るい内部に、先着の客が單た一人居た。後から大衆乘込むだやうであつたが、其時には自分の注意が先着の其一人に專て他の客を顧る遑が無かつた。先着の男は腕を拱んで冠つた鼠の中折帽が落ちさうになる程垂首れて居る、顏は見えぬが二十二三の靑年で學生らしい、衣服は柔い物の入つた手織縞で、羽織は黒木綿の紋は揚羽の蝶。傍に黒毛繻子の小い風呂敷包が放つてある。自分は一目見て何となし、只惘然

に感じた。蓋し其態は決して得意の人のやる風では無い、又得意の人の態々やるのは、どうしても利害關係の無い他人の注意を然程に惹くものでは無い。少焉吐息を漏らすばかりでピクとも動かなかつた彼は、發車の笛と同に車が搖ぎ初めると同時に、突然頭を昂げて天井の電燈を瞶ながら「然うだつたかなあ。――豈敢にと思つたが‥‥。」と獨話ちた。初めて顔が見えた。眉の間には一抹の雲が掛つて目は血走つて居る、口の締の惡いのが缺點だが先づ秀麗の好男子、人柄も賤しくない、唯時計の紐とシャツの腕とにリボンを用ゐたのが、他は知らず自分の氣に入らない、それに羽織の紐が服裝に比較はぬ美華な立派なのと、紐付が普通より高過ぎるのが變に見えた。彼は側に人の在るのも氣附かぬらしく、未だ獨語を繰返して居る「然うだつかなあ、あゝ可厭だ！豈敢と思つたが、殘念だ、奈何しやう。」自分は色々と男の身の上を想像しながら其顔を凝視て居るのも知らないで居る。電車が牛込に着いた頭は、又俯いて了つて前のやうに凝乎として身動もしない、時々何か獨語して居るやうだが、車の音で聞取れなかつた。市谷四谷と經て隧道の中で一度脚を組直したが其車の終點である新宿迄竟に頭を昂げずに來て、此處では皆降りるのに彼は尚元の儘で居る。自分は側に行つて「貴方此所は新宿ですよ」と言掛けた、すると彼は漸く我に復つたといふ顔付で、「おやもう新宿でしたか、些とも知りませんでした、千駄ヶ谷で降りるつもりでしたが、つい睡たものですから。」「それは御氣の毒ですね。」と自分は言ひながら、心の內では『いゝ加減な事を言ふ人だな、睡て居るのか覺きて俯いて居るのかゞ、他には知れないものと思つて居るのか』と思つた。自分は停車場を出て大久保の家に歸る途次、色々と其男の事を推量忖度した。竟に恁思つた。落第か失戀か掏徒にやられたのか、竟り賣られたのか賣りそくなつたのか、それは無論解らぬ、然し左に右、睡もせぬものを睡て居たなどゝ、言はでもの事をちよろッかに口走る處を見るとあの男は先づ運の良い方ではあるまい、これからも好運の生涯は送れまい。恁思

つて晴亘る空を見仰ると、恰も此頃には珍らしく大い星が北から南に流れて消えた。

△四月十七日(火曜　晴曇雷雨)　午後三時頃雷雨が遠然として來つた。其砌自分の處へは○○氏からの紹介て畫師が來て居る。新調の極めて意氣な脊廣を着て二重カラを掛け、揉上を剃落した處は奈何しても調色板に指を突込んで、カンバスに對すべく出來て居る、豈圖らんや其が土佐派の畫工ならんとは。その歸る時に貸したのが蛇の目傘、洋裝の日本畫工が蛇の目を翳(さ)して歸る姿、三重の矛盾で頗る面白かつた。

△四月十九日　(木曜　晴)　戀愛を以て相結びし人々の成せし家庭が、割合に口説多き由説くものあり、蓋し當れり。所詮は戀愛が敎る天啓を人情に沒却し、婚儀の關を超え、夫婦倶に無望の境に陷る故なり。人、望を得れば既に望なく、結婚を望としてそを遂ぐれば、玆に望先づ消ゆ、望無き生涯は生効なく隨て不快の日を逐ふ、於是乎和樂なく濫藉なし、口説多き所以なり。夫婦同棲の和樂は、めをとして夫は妻より、妻は夫より一層高きものを戀ふ家庭ならでは宿らぬものなめり。

△四月二十一日(土曜　晴)　さる家を訪ねて其處の奥樣と會談す、恰も腸を痛みし上旬なりとて其病狀を語るに、「尾籠ながら」といふ言葉を三度が程用ゐたり。「尾籠ながら」が眞に尾籠にして、事實は尾籠ならぬ尾籠多き事を發見す。

△四月二十二日(日曜　晴)　甲武の電車に乘る度に聖書を讀む連中に會ふ。彼等恐らくは厠にトラクトを用ゐるなるべし。

△四月二十三日(月曜　雨)　雨の徒然に自分の嫌なもの三十許書いつく。萬人等しく喜ばざるものは除く。木屋、一閑張、オーケストラ、咖啡入角砂糖、藪にらみ、端綎レイス、唐墨、鰈(かれひ)、江戸褄模樣、女傳道師(バイブルウマン)、山椒、代診、五經、琴の師匠、角帶、田舍者の江戸言葉、鼻眼鏡、角額、たどん、强飯(こはめし)、羽衣ショウル、校正の粗漏、女房のさん附、臺灣パナマ、鹽せんべい、羽二重、リボンの簪、口角の泡、やけこがし、ペンの

日本字、劍舞、獨逸語、

△四月二十八日(土曜　晴) 犬殺近隣を徘徊す。單に世道人心の爲を圖る者の人望なき所以は、犬殺の嫌惡せらるゝ所以、蓋し犬殺は人の小愛に抗して治國平天下の道を行ふ德者凡夫の甚しく之を憎む當に其の處なるべし。

△五月三日(木曜　晴) 少しく物心附きてやんちやの盛な三歳になる長女、今迄居た目の前に見えぬを訝り、「おや〇子は何處へ行つたらう」と謂へば、一椽の隅にて急に泣出す、飛出して見るに、情ないかな大事のチユリツプは散々に折り拔かれて、紅葉の手は揉くちやの花片尚握りたるまゝ目に當てたり。名を呼ばれて常の戒を想起し泣出したる處おもしろし、煩悶苦惱は自覺に來る。寧ろ若かんや人世の醉生夢死などゝ謂ひ度き處なるべし。

△五月五日(土曜　曇) 節句なり、長男菖蒲人形を見て「僕の御雛樣」と謂ふ、人形には女性的名詞を附すべきものなりと信ずるらし。」鯉の吹流しは腹が空虛なればこそ高く揚がれ。尾に重を附けし家あり。

△五月八日(火曜　晴) 己が得意の點に於て成功する者は神と惡魔とのみ。」傲るは人らし謙遜なるは惡魔らし。」人の顏色を見て語る人は惡魔の顏色をも覗る。」

△五月九日(水曜　晴) さる禁治產の男に會ふ、自分の想像とは違ひて甚だ眞面目な顏付したる人なり。曾て常に眞面目なる人は惡を爲す時も眞面目を失はざるものならんと感じたるを思ひ起す。

△五月十日(木曜　晴) 八年逢はざりし靑年に逢ふ、先方の十歳の時別れし後一度も顏を合せざりしに、不意四谷の往還にて先方より言葉かけられ、其誰なるかを忘れて名を問ひしに、「第一中學の制帽を胸に當てゝ微笑しながら「僕は〇〇です」「ああァあァ然うてしたね」「先生は餘り御變になりません」御變にならぬ處偖も耻かしき限なりき。

△五月十二日(土曜　晴) 批評せんとて友人の著書を讀むのは、小用を耐へて銀坐を步くやうな心持がする。

△五月十四日(月曜　晴) 當然な事てされると可厭な

事がある、設へば銀貨を板の間に打き付けて受取る商人の如き。汽車の切符改の如き、醫者に舌を出して見せる如き、用場の音の如き、湯屋で板の間を箒で洗はれる如き。玉突でミスの跡を續けて取られる如き。

文藝雜考（一）

佐々醒雪

日本特有の修辭

日本語は元來世界に比類の尠い語であるから、從つて比類のない修辭があるのであつて、僅かに西洋の修辭の佳所を窺つたり、修辭編の一部も讀んで、直ちに二千年來養はれ來つた、佳所長所を拋たうといふのは、寧ろ大膽に過ぎた話ではあるまいか。僕は今日の詩人、ことに新體詩人といふ人には、今少しこの點に反省する必要があると思ふ。古代の歴史が築き上げた土臺を捨てゝ、獨力で著明な建築物を作らうといふのも、殊勝な心掛けではあるが、又頗る無謀な企ではなからうか、予輩のやうな、建築の手腕に乏しいことを自覺してをるのは、せめては自己の立派な土臺であると信ずるものを、古代の國民の殘してくれた貴重な遺産と信ずるものを、他の天才に指示する任務を盡すべきであらうと信ずる。

萬葉の最も著しい修辭は枕詞序詞及び疊句である。その枕詞又は序詞と稱するものには、種々の種類があるが、その一つは「八隅しし我が大君」「大伴の三津の濱」といふ類の無意味な形容詞で、あつてもなくても、意味の上に增減がない、恰も白雪、呉竹の白、呉などの類で、あまり慣用せられた結果、當初の意味が遂に感ぜられなくなつたので、彼のホーマーの古詩に「濕つた浪」といひ「白い牛乳」といふのも、英の歌謠に常に「メーリーイングランド」「ドーチードーグラス」といふのも皆同じ系統のものであらう、これは古詩に通有な修辭で、現代から見れば、寧ろ無用の長物とも思はれる。しかし、同じく序詞枕詞などゝ稱するものゝ中でも、「梓弓春（張）」「大伴の三津（稜威）」といふ類の

同音異義語の關係から出來たものは、全然我が國特有のものであつて、その起源に就ては、種々の說もある、或は「情有馬の水天宮」などゝ同じ流義の駄洒落から起こつたものもあらう（但し後世のは上の語に意味があるので、昔のが冠辭であるならばこれは沓辭とでもいふべきであらう）、其起源は西洋の所謂パンから起こつたものも或はあつたらう、後世でも勿論滑稽又は機智を示す目的の弄語として用ゐられた。だが、奈良から平安朝にかけて名歌と稱せられるものにこの序詞枕詞が、詩美の源となつてゐるのが多い。文法上からいへば全く無意味なものが、修辭の上には莫大な力をもつてゐるものが多いといふことを忘れてはならぬ。例へば

大丈夫が獵矢手ばさみ立ち向ひ射る圓方は見るにさやけし

といふ歌の前半は文法上無意味な序詞である、だが、これあるが爲に圓方山がいかにも崇高に感ぜられるのであつて、直接な比喩でも形容詞でもないが、その武士が弓箭を執つて立つたといふ、勇ましい姿と、圓方山の聳え立つた形とが、自ら聯想の上に調和し融合する所に、此の序の價値が存するのである。試に「乙女子が揚弓とつて立ち向ひ」と改めて見れば、自ら滑稽の觀が起こる、これに對比して見れば、此の趣は一層明白であらう。だから、「空見つ大和の國」といへば如何にも古い國と感ぜられ「妻籠る屋上の山」といへばなつかしい山ときこえ、「劍太刀鞘ゆ脫け出てゝいかて山いかゝ我がせん」といへば、いかにも切迫した苦悶の情が表はれる。必竟其の濫用せられたものを除けば、直接な比喩や、形容詞を用ゐないで、或る物から生ずる必然の聯想を以つて修飾にしようといふのが、序詞や枕詞の最も巧なる用法ではあるまいか。有名な人丸の妻に別るゝ歌なども、全體の八分通りが序詞で出來てゐる。

岩見の海角の浦を、浦なしと人こそ見らめ、潟なしと人こそ見らめ、よしゑやし浦はなけども、よしゑやし潟はなけども、いさなどり海邊をさして、にき

たづの荒磯の上に、かあをなる玉藻沖つ藻、朝はふる風こそきよせ、夕はふる浪こそきよせ、浪のむたかよりかくよる、玉藻なすよりてしいもを、露霜のおきてしくれば、この道の八十隈ごとに、萬たび顧すれど、いや遠に里はさかりぬ、いや高に山は越え來ぬ、夏草の思ひしなへて、しぬぶらんいもが門見ん、なびけこの山。

この序詞は、文法上からは、單に「よりてし妹」の「より」といふ語に附屬したものと見ねばならぬが、實際は角の浦回の優艶な敍景を以つて、如何にも床しくなつかしい愛妻の面影を彷彿たらしめると同時に、その愛妻と居をともにした、優美な浦回をも謠つたものてこの歌の佳所は、全く、この工夫の上にあることは何人にも異存のないところてあらう。

かういふ風の工夫は、實に枕詞又は序詞といふものにして、初めて企て得るところて、例へば、先の、武士が弓箭を手にして立つた姿を、直ちに圓方山の比喩にしようとしても、それは無理てあらう、角の浦の敍景は決して直ちに愛妻の形容詞とはならない。彼と是とは比喩となるべき程な、判然たる類似はないが、唯幽かな趣味或は餘韻に於いて相通ずる所があるので、この幽かな匂ひを認め得たのが、作者の天才てあらう。しかしこれを現はすべき序詞枕詞の形式を存してゐるのは、日本語のジニヤスてある。

何國の天才も、言語の意味のみならず、その意味から起こるべき必然の聯想を利用することを忘れては居らぬ。だが、文法上の關係以外或は以上に出てゝも、ある語の聯想を利用するといふ企は、恐くは我が國語特有の長所てある、アストンやチャンバレンの輩が、これを正當に理解し得ないのは、外國人として或は至當てあらう、日本人までがこれを遺却して居るといふことは、頗る遺憾とせねばならぬ。

この種の修辭は、更に變じて「掛け語」などゝなり俳諧の附合となり、さらに新派の歌となつた。これを用ゐた人々は、全く別物と思つてをらうが、實は、全く同一の國語のジニヤスが自ら諸種の形に發展したものに

過ぎない。

古今以後の掛け語とか緣語とかいふものは、極めて濫用せられたところから、今の詩人はこれを輕薄なものゝやうに考へる傾向がある。だが、眞の名歌の上に顯はれたものは、輕薄などゝは思ひも寄らぬことゝて、これあるが爲に、他國語の殆んど企及し得ない、幽遠な思想を表はしてをる。例へば、

いで人は言のみぞよき月草のうつし心は色ことにして

といふ歌をとつて見て、假りに文法上から解釋すると、「月草の」は「月草の如き」といふ「うつし心」の形容詞て、「色」といふのは「外見」といふ程の意味で「月草」の緣語である。だから、イヤモウあの人は口先きばかり親切らしい、月草のやうな浮氣つぽい氣質の人は、外見ばかりが格別に良いものだ」とでもいふのであらう。して見ると、西洋の修辭學者は先づ「色」といふ語は比喩とリテラリータームとの混用であるといつて非難するだらう。だが、この歌の眞の趣味はそんな單純なのではない。月草の以下は實は人間ばかりを諷つてをるのではなくて、月草をも諷つてをるのである。詩人の主觀には、月草といふものを比喩に引いて來ようと思ふのではなくて、月草と浮れ男とが、例の幽遠な趣味に於て、全く同化し融合してをるので、月草の移ろひ易いが、しかも捨て難く床かしい趣と、口前の良い浮れ男とは、どちらが主でも從でもない、「心」といふ字が人間を代表してをると同じく、「色」といふ字が月草を代表してをるので、戀の歌か月草の歌かは、容易に斷定し難い。つまりは戀を知る人が詠んだ月草の歌といふのが至當であらう。

序に一言しておきたいのは、「月草の」の「の」といふ字である。これを「の如き」の「の」であるとは、よく古學者のいふ所であるが、それが初學者に早わかりがする爲といへばとにかく、それが元來の誤解で、「の」はどこまでも「の」である。「月草の心」「月草の色」と續けて讀むべき持格である。「ごと」「なす」などか「やうな」といふ意味をもつのは然るべきだが、

「の」が「やうな」といふ意味になるべき理由がない。貫之は、支那の詩論などにかぶれて、主觀的情想が詩の本體で、客觀は比興の用であるやうに、古今の集には說いてをるが、やはり實際其通りに信仰してをつたものでないことは、古今に四季の歌が多くとつてあるのでもわかる。ことには、四季の部に往々戀歌が混じをるところを見ると、天然によせた戀の歌と、戀人の作つた天然の歌とは、到底區別し難いことを知つてをつたのである。

ちりをだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我がぬる床夏の花

杜宇なくやさ月のあやめ草あやめもわかぬ戀もするかな

これ等はやゝ判然としてをつて、前のは床夏の歌、後のは戀の歌である。前のは愛妻の愛と床夏の惜しさとが全く同じであるといつたらば、あまりに極端で滑稽であらう、唯妻を愛づる心と床夏を惜しむ心とが、どこにか幽かな類似がある、それを掛け語でいひ表はしたので、後の歌も、杜宇のなく皐月の空、あやめ草の生ひ茂つた、曇りがちの空模様であらう、それがどことなく陰欝な戀愛の情緒と調和し、融合するやうに感ぜられる、だが、勿論比喩にすべきものではない。

これを要するに、形を短かくする爲に、或は言語上の巧を弄するとかいふことは、勿論、詩の眞諦ではない。必竟、比喩にする程には類似してはゐないが、幽かに相通ずるところのある、二つの事物を相連ねて互に映發せしめやうといふのが、枕詞序詞掛け語緣語などゝいふものゝ眞の意義である。時としては一つのものは他のものゝ爲に謠はるゝこともある、例へば陰欝な戀の趣を謠はんが爲に、皐月の空を敍し、圓方山の聳立したさまを想起せしむる爲に、弓箭の武夫を敍するやうなのがそれで、又時としては、二つの事物思想に輕重のないことがある、月草の歌のやうなのがその適例で、人丸の角の浦の歌も、亦この種に數ふべきである。この修辭が宴曲となり、太平記の道行となり、謠曲、淨瑠璃、景事、振事の文句となるに到つては、いよ／＼

明かに、二つの思想事物を同時に謡つてをる。敍景と抒情とが、全然同一の句の中に融合して表はれてゐるといふことは、世界に比類のない方法で、濫用し惡用したものこそ、讀むに堪へないが、巧なものに至つては、實に國語の誇とすべきである。

俳諧にも、其の初は同じ修辭が傳つた、貞德流は多くこれを惡用してをる、だが、流石に、奇傑梅翁の、

世の中や蝶々とまれかくもあれ

といふに至つては、掛け語の眞諦を得たもので、優遊自在な胡蝶の生活と、兎もあれ角もあれと世を茶にした一種の悟道とは、全然融合すべき思想である。これは蝶の句であつて又主觀の句である。しかし、この句は偶「止まれ」兎まれといふ都合のよい同音異義の語が、見つかつたから成功したもの丶、如何にホノニムの多い日本語でも、今相連ねやうといふ二つの思想の間に、何時もよいホノニムがあるとは限らぬ。それも萬葉のやうに長く連ねるものならば、何とかサーカムロキユーションをやつて、……例へば角の浦と妻とを連ねる爲に、浦の海草を敍して、海草から「……よりてし妹」と連ねるやうに、迂路をとるのである。……終にホノニムに達するといふ方法もあるが、已に短歌になると、これが餘程窮窟で、發句になれば、適當なホノニムを覓めることは更に困難である。そこでホノニムの方を主として、その連續する事物思想の調和不調和を忘れると、師範家流の瓦礫となり、貞德流の駄洒落となるので、

ねぶらせて養ひ立てよ花の雨(飴)

といふ風の、鼻持のならぬものになる。こ丶に一轉開悟したのが蕉風の俳諧で、その切字の法といひ句の附といひ、移りといひ、響といふのは、つまりはホノニムの助をかりないで、二つの事物思想の融合調和すべき修辭を案出したのに過ぎない。梅翁の句と、古今の歌とを、蕉風流に、改作すると、

蝶々や思ふことなき檜笠

月草や浮かれ男の顏白き

極めて拙いが、行き方はかうである。たとならべた丈

けて、必しも其の間に音韻上の連鎖を覓めなくても、聯想の融合には差支がないと考へたのが、一卓見である。しかし、比喩などにはならない、更に更に幽かな、こまかい、細い趣味の調和を認めるといふことは、既に萬葉の昔に胚胎してをる。蕉風の句法は唯形式上の進歩にすぎない。（未完）

啊哞錄羅婆を描き了れる「怪傳物」、次に現るゝは 高利貸の雄と膏藥万能主義の人 となり、稿は收めて編輯者の机上に在るも紙面の都合により、次號に廻すことゝしたるを惜む、覆面冠者が振り輝かす一面の照魔鏡裡、百妖千怪愈よ其面目を掩ひ難からんとす、

佐々醒雪氏」の卓說は之迄も本誌に載せ來れるが、爾來「文藝雜考」の名の下に引き續き毎號執筆の約を得たり、日本文學特には德川時代文學に多大の興味と深邃なる造詣とを有し居らるゝ氏、其氏が思想に接せんと欲するものは必ず先づ本誌を讀まざるべからず



國際再保險政略

『東京朝日新聞』

佛國は日本の眞友として視る可し。兩國其自身の間には政治上經濟上何等利害の衝突するもの有ること無し。日清戰後の三國干涉は一時日本人をして佛國に對し惡感情を抱かしめたるに相違なしと雖も、日露戰爭に對する佛國の態度は、夫のカムラン問題の如き、多少日本人を激昂せしめたるものありしに拘らず、吾識者は同時に佛國の苦しき地位に少からぬ同情を表することを禁じ得ざりき。而して今や日本の佛國を見る、依然として舊の如し。佛國も亦日本を慊からず思へばこそ。公債引受をも爲したる可けれ。加ふるに近來の英佛アンタントは自ら又日佛の交誼をを厚からしめんとする政治的因緣を作り出さんとす。尋常の感念を以てしても吾同盟國の親友は吾に於ても亦間接の知己たればなり。吾人は僤

りなく言はんと欲す、東洋政局に關し條約的同盟たる英國と精神的同盟たる米國を除けば、佛國は即ち日本の最も敬愛す可き親友なりと。

想ふに佛國の吾國を視る、亦必ず甚だ冷淡ならざる者あらん。「黃禍」の謬說に誤られたるもの、又は日本の侵略的野心を云々する者の中には、將來日本が印度支那を窺ふの日あるべきを杞憂し、同植民地の防備を整ふべしなどゝ意氣捲くものあれども、這は日本に取りては實に迷惑千萬の嫌疑なり。吾人は斯る荒唐無稽の嫌疑に對し、殆ど辯解の必要を認めず。日本にして印度支那を取らんと欲する位ならば、其前に淸國を取らんとすべし、否、今直に滿洲を取るべし。印度支那なる語は、滿洲若くは比律賓以上の聯想を日本人に與へざるなり。印度支那の敵を以て日本を喜ばざるが如きは、決して佛國識者の敢てせざるべき所。若し夫淸國に對する日佛兩國の地位に至ては、其間殆ど何等の關渉なく、固より利害の衝突などあるべき筈なし。淸國通商の上よりいへば、英米兩國は佛國より日本に取りて遙に恐るべき競爭者なり。而も日本は英國以て條約上の盟邦とし、米國を以て精神上の盟邦とす。日佛兩國は淸國に於て爭はんと欲するも得べからざるなり。

日佛兩國の間には互に相親しまんと欲して而して親しむべからざる理由なし。而して今日迄も相親しまざりしは、職として佛國が露國の同盟國として餘りに忠實なりしに由る。東洋に對する露佛同盟の擴張も、亦少からぬ障げなりき。然れども今や佛國の露國に對する義理立ては、少くも東洋方面に於て大に其必要を減ぜしを見る。戰後の露國の消極東政策、未だ容易に推測す可からざるものあれども、日英攻守同盟の動かざる限り、少くも戰爭前の傍若無人なる侵略的傾向を帶びざるべし。而して佛國は自然的に大なる對露義務を免かるゝにも至らん。日露戰爭及び日英同盟成立の結果、大に其行動の自由を加へたるは、吾人の推想必ず多く誤らざらん。現に佛國は露國の盟邦として露國の敵視せる英國とアンタントを結びしにあらずや。

此に於て吾人は日佛兩國相親しむの機、漸く既に熟せりと思ふ。而して兩國政府が共に力を之が爲に盡さんことを希ふ。吾人は日佛兩國が睦親しみ得べきが故に親しめよといふにあらず。兩國の親近は世界の平和に對し更に一の保障を加ふるものなるとを信ずればなり。今や東に日英同盟あり、西に露佛同盟あり、而して英佛のアンタント其間に在りて兩同盟を聯結す。佛國が英露を近づけんと欲せるは、一朝一夕の故に非ざれど、其實際有望なること今日の如きは未だ曾て有らざる所。左ればにや、昨年以來英露兩國は既に協商に着手したる樣子なりしが、近電に據れば交渉略既に纏まれりといふ。若も此協商にして早晩成立することもあらば、中央亞細亞即ち日英盟約に所謂「印度附近」より來る同盟の危險は、大方除かるべきこと言を俟たず。ビスマルクに由りて始に用ひられたる國際再保險政略も其目的の平和に存する限り、大に歡迎すべきもの。日英同盟に加ふるに、英露協商を以てするは、吾國に於て亦利益なり。左れど日本は未だ之を以て足れりとす可らず。只日英攻守同盟を補みて、日露の關係を一新することを力めざるが如きは、智者の事にあら

ず。日佛の親交は卽ち日露の關係を一新するの道なり。縱令日露の關係を一新し、親友を以て永く相交はるに至る能はざる迄も、將來兩國の間に起るとあるべき軋轢を緩和し、以て萬一の事無からしむるの道なり。吾人が日佛親交を以て世界の平和に對し、更に一の保障を加ふといふもの實に此に在り。今や日本に於ては佛國育ちの西園寺侯首相たり、日英同盟の締結に與りて力あり其後親しく英佛の交歡を目睹せし林子外相たり。而して佛國に於ては海牙の平和會議に盛名を得たるブゥルジォア氏外相たり。日佛の交誼を温むる實に今日より善きあらんや。

英佛の提携は、主としてモロッコ問題及埃及問題の妥協に依りて成立せり。日佛兩國の間には幸か不幸か殆ど妥協すべき問題なし。問題なきは兩國の接近の容易なる證據なると同時に、又其接近をして動もすれば無意義ならしむる原因ならずとせず。佛國資本の利用の如き夫れ或は兩國の接近をして早く永く且つ強からしむる捷徑か。吾人は佛國資本家及び日本事業家の注意を請はんとを欲す。

誤れる成功の教訓

《教育實驗界》　中島半次郎

成功とは近時の流行語の一にして我出版界にありても、成功を教ゆる專門の雜誌又は之に關する著書も少からず、出て居るが、かく成功に人の注意が向くに至りしては、我が社會の事業煩雜になりながら、然かも職を得るには困難なるに至りたる事情あるに出づ可きも、又一部は米國の成功熱の我國に入り來りたるに因ると見ざる可からず、米國は自由の國柄にして土地は廣く爲す可き事業は多々あるを以て無一物より起りて成功し易く、又成功せる人も多く、隨て之を教ゆる書籍雜誌の類も多く出て居る事は我國の比にあらず。

然るに亞米利加にありても、何を以て成功となすかの意義に至りては一定せず、初めは重もに金儲けと政治上の位置を得る事を意味したるが今は必ずしも然らず、其品性に依りて社會上の注意を占め、社會の人の尊敬を得る事をも、成功の中に含めて云へるが如し、今より十三年前ニューヨーク市の有力なる市民シチューブン、アルレン氏は、ホトソン河を溯る時、其汽船の破裂したるに依り、船と共に沈みし人なるが、其殘れる手帳に記せる格言は世に公にせらるゝに及び、米國人は之れ能く成功の福音を傳へらるゝものとして、稱贊せり、其格言に曰く、「善き品性は凡ての物にまさる、此を錬る事を怠る可からず、業を錬らんより寧ろ心を錬れ、かくて善き品性を得たらば、其品性は汝自身の行によりての外は、害せらるゝ事なし、富を作らんとあせる勿れ、投機に心を奪はるゝ勿れ、汝の收入の範圍内に於て生活し、浪費する事を避けよ、若し他が汝の事を惡しく云ふものあらば、汝の生活をして、他人が其人の云ふ所を信ぜざるが如く高尚にせよ」と云ふにありて、自力に依りて立ち、品性高き人となるを、成功の秘訣とするものなり、我國にありて、成功と云ふ言葉の中には、恰も亞米利加に於て、初めて成功の言葉が使はれし

如く、賢く立廻りて富、位置、名譽を得る事を指し、自力に依り品性に依りて、成功する事は第二に於けるが如き傾きあり、一例を擧ぐれば、或る權勢ある人々て阿附して政治上の位置を得、若くは或る豪家の附馬となるが如きは、殆んど青年の理想となれるとさへ見らるゝ傾きなきにあらず、かくの如く或外部のものに依り、巧みに機會を捕へて、立身出世するも、處世の一要件たる可きか、かくの如く外部の機會を顧まず、己が力に依りて正しき道をふみ、正しき品性を以て、世の困難と戰ひ、かくて男らしき公明正大の成功を成す事が、眞の成功なる事を忘るゝが如く見ゆるは、腑甲斐なき次第と云ふ可し、

尙我國には成功と云へば、何かの仕事を仕遂げたる人を指すが如し、然れ共、事業をなし遂げしのみが、成功なるか、譬へば、電信を發明せるモールスの後を受けて、蓄音機を發明せしエヂソンの成功は前者より大なりと云ふ可きか、スエズの運河の成功する迄には幾多の人が其財力心力を費して、失敗したるか、其失敗者は果して失敗者と云ふ可きか、其失敗者ありしが爲めに、スエズの運河は成功せしにあらずや、世の文明、人道の開拓に當りたるもの丶多くは一身を犧牲に供して、轗軻不遇の間に其生を終りたるもの多し、斯くの如き人は此を失敗者と呼ぶ可きか、公平の眼を以て見れば、世の所謂成功者は運よく人の功を納めたるものにして、眞の成功者は寧ろ恨を呑み、貧困と戰ひ、世の迫害と戰へたる人に存するにあらずや、運よく成功したるものもし、成功者とせば、其功を納むる丈けの道を開きたる人は一層の成功者と云はる可きにあらずや、

眞の成功は智識技能の成功たると共に、又品性の成功たらざる可からず、現今亞米利加にて意味する成功も品性を含むるに至りたるも、然かも尙亞米利加人の所謂成功には成功せんが爲めに品性を錬れと云ふが如き、口吻なきにあらず、予は寧ろ品性の錬られたる結果、自ら成功を來すと云ふが如く、解釋せん事を希ふ、換言すれば、出來る丈けが己が力を發達せしめ、其力に適したる職を擇び、充分に自己の品性を錬り、人間の一生を修養と考え、國家社會の進歩の爲めに、効顯し、其結果の生前に現はるゝと死後に現はるゝとを問はず、奮闘的生活を爲すものを成功と云ふ可しかくの如く考ふれば、今の所謂成功は、人を釣る一種の危險なる言葉にして、成功の秘訣として、別に何等の道ある可きにあらず但し成功と云ふ名の下に於て、人の正しき立身出世の道を正し、職業を示し、進歩の道を與ふるを成功を敎ゆる意味とせば、かくの如き成功は排斥す可きにあらず、處生の道を敎ゆる一要件として、認む可く、之をしも排斥せんとするにあらず、かゝる成功の標準よりして成功せる人を擧ぐれば、政治界に於ては英のグラッドストン、敎育界に於てはペスタロッチ、實業界に於ては米のチャイルズを擧ぐ可し、グラットストンは貴名家に生れ、富もありたるに拘はらず、此等に依頼せず、一に己が品性才能を錬りて最近五十年間の英國の歴史はグラットストンの傳記なりと云はるゝ程の働きをなし、然して氏は趣味あり、同情あり、一個尊敬す可き紳士なりき、ペスタロッチに至りては、生涯困難と戰ひ、其の死す

る時に至る迄、己の部下の爭の爲めに苦しみ、今の所謂成功より見れば僅かに失敗したる人なるも、然も氏は人類の敎育者として、世界史に輝き、そのイフエルテンにあるときには歐洲各國の君主に尊敬の念を捧げしめき、チヤイルズに至りては我國人のその名を知る人稀なるも、僅かに米國實業界の成功者と見ざる可からず、氏は今より十二年前に死せし人なるが、本バルチモアーの書籍店の丁稚なりしが其勤勉にして才力其所をフイヤデルヒヤの一書店の主人に見られ、此の主人は氏を其番頭に擧げたりしが、非常に能く、其事業を助けたるが爲めに、此の主人は遂に氏に其の暖簾を分ちて一書店を開かしめぬ、此間氏は絶えず、書を讀みて其智識、技能を錬り、當時の學者とも交際したりき、彼のアーヒング、エマーソン、ロングヒロー、ホーソンの如き、皆友とし善かりき、かくてフイヤデルヒヤにて發行する亞米利加のタイムスと呼ばるゝ、パブリツク、レヂアー新聞の持主となり、侃々諤々の議を吐きて世間を警醒せり、隨て政治上にも勢力を有するに至り、フイヤデルヒヤの市長に推され、州長に推され、遂に米國の大統領に推されたるも辭して就かず、その大統領に推されたる際の如きは、デモクラツト黨も、レパブリカン黨も、殆んど一致して之を推し當選疑なかりしに拘はらず、氏は職を得るを以て其言論の自由を束縛せらるゝ者とし、斷然此を辭退し唯米國の公益を圖るを主とし其勢力在野の大統領の如く、グランド將軍をして、予は合衆國の大統領たらんよりは寧ろパブリツタ、レヂアーの持主たらん事を願ふと羨やましめぬ、

今日に當り、成功の意義を正すは、現今の如き成功の多くは已れを輕まずして、人を頼み、自ら働かずして、他の機會を狙ひ、淺薄なる智識を弄して品性の勝利を忘るゝが如き、薄志弱行の精神を我が兒童青年の上に起さしめん事を要ふるに出づるのである。

目で見る文學

『東亞の光』　芳賀矢一

國文學が漢文の影響を受けたとは今更いふまでもないが、萬葉集の歌に漢字の義訓や戯書を用ゐて、涙を戀水、出でを山上復有山、北を向南、もちつきを三五月などゝ書いたのは已に目に訴へる傾向をもつて居る。併しこれは筆記する人の筆のすさびて、歌その者の價値に關係は無い。後世の和漢混淆文て、漢語の語彙を音讀の儘、國文學に用ゐる樣になつてからは、やゝともすれば、この漢字の魔力を利用して、漢字の外形によつて、文の裝飾とする樣な傾が見える。始終漢文學を見慣れた目から見れば、國文の假名ばかりでは、字體が已に柔かであつて、豪健な文には適せぬ樣におもふ處から、假字でも、漢字でも同樣である處に、漢字を使用しなければ氣が濟まぬ、なりと書くところへ也、べしと書く所を可し、容し、と書いて、其方が、强味がある樣におもふ。かよりも乎か、なよりも哉の方が勢があると考へる。無用な場所へ、矣、焉などの文字を使ふことは近來全く無くなつたが、こひねがはくはといふ一の國語へ

悲歎、嘆、慟などの文字を宛て、ゆくといふ語に、之く、往く、行く、逝くなどの漢字を使ひ分けるよは依然行はれて居る。何々然、何々爲などといふ漢語から出た形容辭を使ふのは漢文學に見慣れた形を使ふのであつて聞いただけでは分らぬ。字を見て始めて分るのである。濫觴逝くといふのを耳で聞けば、公園行くと同じである。漢字不可廢、漢字を廢すれば國文學の價値がなくなる。古來の文學を奈何にせんなど絶叫するのは、幾分かは國文學が漢字の字形を賴みにし、生命にして居る證據である。馬琴の小説中の閑話休題、却説、浩處、傍室、穉致、熱閙場、十字衢堂等を假字に直したところが、これは唯馬琴のペダンチツシな鼻を掩うて仕舞ふだけて、馬琴の作物には影響せぬとおもふが。銘銘、纏綿などの文字を列れて、凱旋祝文の重要な裝飾として居る文學では、漢字を封ぜられると、餘程困るのである。日本は早くから、漢字を國字として用ゐて居つて、目に訴へる方からも尠からぬ關係をもつて居るから、これは誠に當然な次第である。「岌々乎として殆い哉」といへば如何にも危さうにみえるが「きう〳〵ことしてあやふいかな」では危さの度が餘程減る樣に考へられるのである。支那文學と漢字とは離れられぬ因緣のあると同樣、國文學でも、幾分かは漢字とは離れられぬ因緣が添つて居るらしく見える。

それ程漢字の存在が國文學に必用な者ならば、未來永劫漢字を廢する事が出來ぬし、又將來の文學でこんな困難に打克つことが出來る見込ならば、成るべく、目に訴へる方の事はやめにして、漢字を離れて、國文學の價値を獨立させたいとおもふ。是は漢語傳來の語を國文學から除去するといふのでは無い。漢字の字形を以て、讀者をチヤームするといふこと、紙の上でばかり面白くみえるといふことを文章家がなるべく棄てればよいのである。漢字を離れて將來國文學の獨立が出來ぬといふ理由はどうしても無い樣に考へるからどうかさうしたいとおもふ。

近來の韻文について實はこの考を起したのである。近來の韻文界はむかしの外山先生時代から見れば、餘程進んだものである。思想の點から見ても。外形の點から見ても、十年二十年の進歩は殆ど別天地の感があるのである。唯一つ腑に落ちぬことは即ち前にもいふ通り、目に訴へるといふ工夫が往々用ゐられて居る事である。今の韻文は多くは讀むための者で、實際謠ふための詩歌でないのが多いから、自らさうなる事もあらう。掛り詞のワオルト、スピールなどは今の詩人は用ゐぬが、漢文字の助太刀を賴んで、詩歌の内容を豐富にしようといふ計略は今でも往々用ゐられて居る。元來の國語が語彙に貧弱な爲、やむを得ぬとしても、これは國詩の發達上大に考へなければならぬ事項と考へる。即ち詩歌の假名だけをたどつて讀むものと、漢字を知つて居つて讀むのとは其詩歌の味を享受するに於て大變な相違があるのである。（中略）國詩の作家としては、甚た卑怯な所置ではあるまいかとおもふ。國語にそれだけの語彙が足らなければ、漢語を其儘に用ゐるなり、外國語を用ゐるなり。俗語を採用するなり。新語を作るなりして、さうしてその調和をよくすればよいのである。その工夫が必要である。（拔萃）

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士
村上專精
新著

自省錄

和装 全一冊
定價金四十錢
郵税金四錢

吾人は毎朝必らず、洗面する習慣が出來て居ます、されど毎朝洗心する習慣を持て居るものは、甚だ少ない様であります、顔に汚れたる垢がついて居ては、如何に麗質の美人でも美人とはいはれませぬ、ところが心の垢は顔の垢に較ぶれば其毒が強くて洗ひ落すことが困難であります、又顔が如何に奇麗でも心が奇麗てなくては、人間の資格はありません、されば洗面上の規則的習慣も結構であるが洗心上の規則的習慣の方が一層必要であるといはねばなりませぬ。

此の書は村上博士が御自身の洗心用にとて定められたる五種の座右の銘を丁寧親切に説明せられたもので、附錄として雲谷禪師、蓮池大師、フランクリン氏の洗心自省の方式を述べられてあります、文章は言文一致體で流暢平易、何人にも解り易く書いてあります、男でも、女でも、老人でも、青年でも、是非一讀せねばなりませぬ、殊に前途春秋に富める青年諸君の如きは、速に本書を熟讀して心の垢を洗ひ落す工夫をせねばなりませぬ

發行所
東京市京橋銀座一丁目
大阪東區北久太郎町四
大日本圖書株式會社

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▶新小説は文藝雑誌界の覇王也◀

新小説

第拾壹年第六巻◉六月壹日發行

▲小説▼

- 二おもて……柳川春葉
- 夢みる人……西村醉夢
- 阿列布……小山内八千代
- 片腕……山岸荷葉

▲思潮▼

- 獨逸に於ける自然主義起源……片山孤村
- 焔魔王の話……松本文三郎
- 穴居の民……上田敏

▲雜錄▼

- 椀久末松について……三木竹二
- 近松著作雑考……高野斑山
- 京の物賣……寺町生
- さくら時雨考證……高安月郊

▲歐洲文藝見聞譚▼

- 小説中のアドヹンチユアス……島村抱月

▲時文▼

- 低級文學の價値……後藤宙外
- 同棲錄……後藤宙外

▲家庭▼

- 家庭衛生……石原喜久太郎
- 家庭の基礎……尾高次郎
- 飲食物の良否……竹内城峯

▲譚叢▼

- 不『いき』な私……田邊太一
- いきと洒落……西田菫坡

▲藝苑▼

- 東京座の戀物語……右田寅彦
- 滑稽忠臣藏五段目……石原防風
- 若葉會演劇評判……山岸荷葉

▲社會▼

- 府下の別天地……太田宙花
- 海島通信
- 色丹島探檢記……落羽野人

▲流行▼

- 夏季のいろ〱……流行子

文苑懸賞吟咏其の他材料頗豐富

繪畫

- 臥猪の床(表紙)……河村清雄
- 二おもて(口繪)……鰭崎英朋
- なでしこ(一情一景)……小林萬吾
- 夢みる人 阿列布(繪端書)……鏑木清方

實價 壹册貳拾五錢郵税貳錢五厘◉六册前金郵税共壹圓五拾九錢◉十二册前金郵税共參圓拾貳錢◉郵券代用一割增

發兌元 東京日本橋區通四丁目一角 春陽堂



二人畫工

（シエンキーウキツ作）

魯庵生譯

第一回

愈々結納の日が近づいたから、路易十五世式の見事な指環を買つて贈つた處が、兩親は勿論、本人のカーヂヤでさへ嬉しがらなかつた。揃ひも揃つて眞正の美術といふものが解らない連中だからネ。嫌になつて了う、お座の覺めた咄だ。コリヤ何うしてもカーヂヤの俗ッぽい根性を破壞して少しは趣味の解るやうに敎育せにやならぬ。幸福せな事には心から我輩に惚れてるから些か脈がある。

結納の席には誰も呼ばなかつたが、アンテックだけには立合つて貰はうと賴むと、アンテックは首を掉つて中々諾かなかつた。曰く、俺は肉體的にも精神的にも腐つてをるが猶だ〱俗物の家へ行くほどに墮落しをらんぞト。

困つて了う。何うも斯うもならぬ。が、漸とこさと頼んでから前以てシュスローウスキーの家の者に豫告つて置いた。我輩の朋友のアンテックは世にも稀な露骨の男であるが、天來の美術家で且世界一番の正直者だと言つて置いた。

處がシュスローウスキーは我輩の朋友が死骸を描く話を知つてるから、苦々しい顔をして、之まで自分は身分ある立派な人とばかり交際し、卯の毛で突いたほどの瑕も無い公けの經歴を踏んで來たのだから、我輩の朋友が若し立合ふなら此名譽ある家柄に相應しき禮義を守つて貰ひたいと云つた。

有體に云ふとアンテックの無頓着には平氣てゐられなかつた。朝から散三手古摺つて了つた。何てもゲイトルを着けて行くと剛情を張るから、最初は和め、次には頼み、末には只管歎願に及んだ。

到頭負けて呉れたが、何故また愚物て押通す事が出來ないて、如斯な才子流の所爲をしなけりやならぬものか如何にも合點めぬとブックサ云つた。

夫からアンテックの靴の凄まじさと云つたら、阿弗利加內地の探險家然としてをる。有時拂ひて靴屋から持つて來たぎり一度も靴墨を塗つた事がないのだらう。

夫よりも猶だ痛いのは頭髮だ。恰て武藏野の原だ。（原文にはカルパシヤン山の頂上だとある）千茅蒴が野分の風に吹荒められたやうて、手の附けやうが無い。世の中に此蓬頭を奇麗に梳く櫛は迚も無からうから、仕方が無い、此武藏野頭て辛抱しなけりやならぬ。

フロックコートだけは強に平常の脊廣と代へて貰ふ事にしたが、面つきが何處までも御當人好物な死

人面をしてる。其上に較やともすると緣起の惡い洒落を吐き散らす。街路へ出ると誰でもアンテックの節瘤だらけのステッキと大きな襤褸帽子を顧眄つて見ないものは無い。我輩だけは看つけてるから何とも思つてないが。

頓てシュスローウスキーの家へ着いて、鉦を鳴らして案内を乞ひ、座敷の次の間に通ると、從兄弟のコーウヰチの盛んに人口過剩を論じてる聲が聞えた。此男の人口過剩論は平常でもお定りの十八番だ。

カーヂヤはモスリンの禮服を着て雲が搖曳いてるやうだ。シュスローウスキーも立合ひの親族も一同禮服を着てゐた。老年の伯母さん達は絹のお揃ひだ。

アンテックが入つて來ると、一同妙な顔をして身じろぎをした。アンテックは陰氣な顔をして四邊を睨廻し、シュスローウスキーに會釋しつ、平たく云へば自分は人の家へなんか來るンぢやない、『友達のウラデックが嫁を貰うとか何とか又變つた事がなければ、』と云つた。

此『變つた事』といふのが、如何にも不吉な事らしく聞えたので、シュスローウスキーは嚴乎らしく更たまつて、元來『變つた事』とは何であると詰問した。

アンテックは何喰はぬ顔をして、何が何でも自分には同じ事だと云つた。勿論ウラデックの爲めなら、殊にシュスローウスキーの岳父どのが氣に掛けるなら隨分何事も辛抱しやうと云つた。

未來の岳父のシュスローウスキンは妻から娘から我輩をギロリと見廻しつ、眤と胸を撫つて蟲を押へてる容子が顯然と見える。

一端は我輩も當惑したが、漸やつと隙を覘つて、我輩にしては珍らしく沈着拂つて未來の岳父どのに向ひ、猶だお親昵にならない親族達へ紹介を頼んだ。

紹介の挨拶が濟んでから各々座に着いた。カーヂャは我輩の傍に座つて互に手と手とを重ね合はした。が、一座は何れも堅くなつて無言てあつた。部屋の空氣は重々しく座が白け渡つた。

ヤコーウキチは復た得意の人口過剩論を饒舌り初した。アンテックは一向耳にも入れずに卓子の下を見てゐた。誰も無言てゐる中だからヤコーウキチの甲高聲ばかりがキン／＼響く。前歯が抜けてるのでＳＺの發音が出來ないのだ。

『此最も恐ろしい危險が全歐羅巴を脅かしてる、』とヤコーウキチは云つた。

『移住さ、』と傍から一人嘴を容した。

『イヤ、移住が未だ人口過剩を防ぐに足らんのは統計上明らかである、』とヤコーウキチは云つた。

するとアンテックは矢庭に首を上げて、魚のやうな眼をヤコーウキチに向け、薄氣味惡い濁聲て、

『それぢやア、支那人の慣習を羅歐巴にも流行らせるんだナ。』

『失禮ながら、支那人の慣習とは？』

『支那人の國では親が虚弱な子を壓殺す權利がある。歐羅巴でも此慣習を學んで、支那人とは反對に老耄れの厄介親爺を殺す權利を子に與へたら如何だ？』

ホーラ來た。ドーンと來た。伯母さん達を載せてる長椅子はキイ／＼鳴り出した。我輩は氣絶しさう

になつた。シュスローウキーは眼を閉ぢて暫らくは談話が途切れた。

一座は火の消えたやうだ。

軈て我輩の未來の岳父どのは怖え上つた慄へ聲で、

『だが、我々クリスチャンなる者が……』

『何故さ——クリスチャンを罷めたら如何だ。』とアンテックは直ぐ腰を折つて首を揮つた。

復た、大鐵槌だ！

伯母さん達を載せた長椅子は熱に罹つたやうにガタ〱震へ出して。我輩は氣が遠くなつて茫ッと霞罩められ、眼の前の大地が裂けるやうな氣がした。最早萬事休す、一切の希望は畵餅となつた。

忽ちカーヂャが鈴のやうな聲で笑ひ出した。ヤコーウヰチも釣られて一緒に道理解らずに笑ひ出した。我輩も續いて道理解らずに笑ひ出した。

『お父さん、』とカーヂャは云つた。『夫だからウラデックさんが云つたぢやありませんか。アンテックさんは露骨の方だッて。調戲けてらッしやるんですよ。妾、能く知つてますワ。此方にはお母樣があつて、御兄弟中で一番御孝行をなさるんですとサ。』

驚いた。カーヂャは處女どころか、中々な權謀術數を行るワイ。おまけをつけるどころか、難有味まて附ける。尤も實際アンテックには母親があつて大切にしないではないが。

て、此一言が幸福せと一座を紛らした處へ、召使の男が菓子と葡萄酒を持つて來たので、今までの不

輿を一掃しつ了つた。此男は我輩が虎の子の三ルーブルを持つて行つて了つた奴だが、禮服なんか着込んでボーイ然と氣取つてやがる。一生懸命に盃の上ばかり見つゝカチ〳〵カチ合ふ酒杯を宛も一杯注いてあるやうに、摺足で徐と歩いたが、我輩は落しはしまいかとヒヤ〳〵して其足元ばかり見てゐたが、先づ幸ひと無事だつた。

軈て各々に配られた酒杯は浪々と注がれ、愈々結納の式を初める段となつた。

小さな從妹の子が指環を二個載せた陶器の皿を持つて席へ進むと、一同の視線は物珍らしさうに此子の頭越しに皿の中へと注ぎ、兒供は此儀式を面白さうにソハ〳〵して皿の指環と一緒に小躍りしてゐた。

シユスローウスキーは起立した。一同は續いて起立した。椅子を推遣るガタ〳〵した音が聞えた。

一座は鎭まり返つた。伯母さん達の中で、我輩の贈つた指環が『嘸立派だらう』と低言き合ふ聲がした。が、こんな囁嚅が聞えたにも係らず、一同は肅然として蠅までが壁から落ちるやうな氣がした。

シユスローウスキーは徐ろに嚴かな口調で、

『我が子等よ。御身の兩親の惠みを受けよ』と。

カーチヤは跪いた。我輩も跪いた。

此時のアンテックの顏が見たかつた。如何な顏をしたらう。

が、我輩はアンテックを見やうともしないで、土器色の長椅子と美くしく釣合ふカーチヤの禮服ばかりを見てゐた。

シユスローウスキー夫婦は我輩二人の頭の上に手を置いた。

『娘よ、』とシユスローウスキーは初め出した。『御身は夫に盡す妻の道の最上模範を家庭に學び、且從來御身の夫が必ずや敎ゆる事あるべきが故に云はず、』と云ひつゝ今度は我輩に向ひ、『ウラヂスラーヴ氏、些か御身に告げん――』

と、長たらしいお說法が初まつた。我輩は一ッ二ッ三ッ四ッと百まで數へたが、尙だお終ひにならぬから、復た一ッ二ッと數へ出した。

公民としてのシユスローウスキー、官吏としてのシユスローウスキー、父としてのシユスローウスキー、羅馬人としてのシユスローウスキー――と有りッたけ列べて勿體振つて見せた。

子供とか親とか義務とか將來とか幸福とか艱難とか誠心とかいふやうな言葉を滅茶苦茶に頭から浴びせ掛けられ、恰て蜂がブン／＼羽音を鳴らして耳の邊て叫いた曉に頭に止つたり前額に止つたり首筋に止つたりして處嫌はずに螫すやうなもんだ。

運惡くカラーをキウッと堅く締めて來たので、何時までも俯向ひてゐると咽喉が締まりさうになつた。するとシユスローウスキーの妻は感に入つてシク／＼泣出したのが聞えた。根がお人好しのお婆さんの事だから我輩も之には動かされた。すると又ピョン／＼跳ねる女の子の持つてる皿の中で指環がカチカチ鳴るのが聞えた。南無三、アンチックの奴め、如何な面をしてをるだらう！

漸つと起つ事が出來た。小さな女の子が我輩の眼の前に指環を突出したので、我輩とカーヂャとは互

に指環を交換して穿めた。

之て先づ結納が終つた。儀式は首尾よく濟んで了つた。と思ふと、シユスローウスキーの親爺は我輩を呼んで、二人で伯母さん達に一々お禮を云ふのだと云つた。仕方が無いから伯母さん達の前へ行つて、鶴の足のやうに乾枯びた指に接吻すると、何れも口を揃へて呉々も自分達の信認を仇にして呉れる勿と云つた。

人ウ、我輩に信認も屁ッたくれもあるものか。

先づ之だけかと思ふと、ヤコーウヰチ奴、我輩を兩手で抱へてキウッと締めつけた。イヤハヤ、カラーを堅くして來て飛んだ事をした。

之て漸やつと小面倒な事がお終ひになつて、一同お茶となつた。

此間我輩は到頭アンテックを見ずに終つたが、山猿奴、復た我輩をヒヤリとさせた。誰だかがお茶の中へラムを入れませうかと訊くと、アンテック奴、平氣な面をして、『イヤ——ラムなら德利の口から飲みますワ、』と、斯ういふ御挨拶だ。

が、先づ無事に目出たく濟まして了つた。

夫から暇乞をして二人で出掛け、新らしい空氣を吸つて爽然したが、シカシ全くカラーを堅くし過ぎた哩。

二人は無言て歩いてゐたが、到頭我輩は默つてゐられないて、此方から口を開かうとして、先づ首尾

よく濟まして幸福せな事や心底からカーヂャを可愛がつてる事やを咄ししやうとしたが、併し此方の思ふ壺には陷らないで、愈々家近く來た時、

『オイ君、ライフが中々愉快になつて來た。』

と云ふと、アンテックは澁い顏をしてジロリと我輩を橫眼に見つ、

『此矮狗ッ！』

此晩は是ぎりアンテックと口を利かなかつた。

第八回

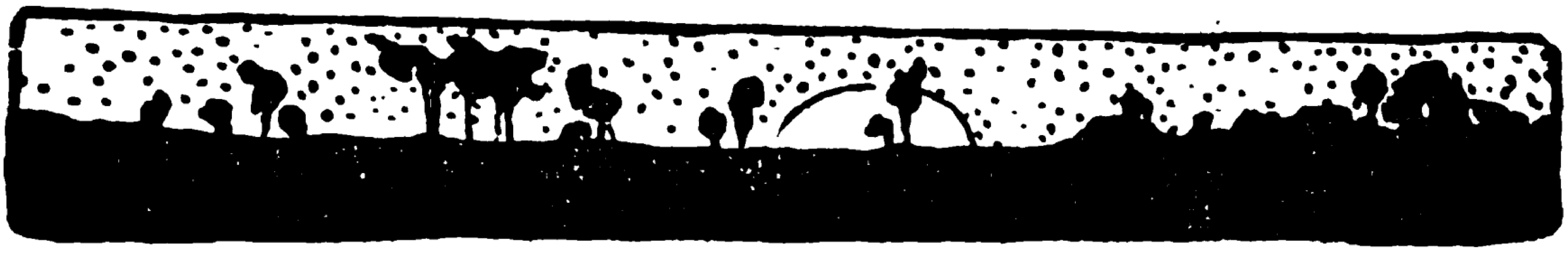
結納を濟ましてから一週間目に我輩の『猶太人』の畫が着いた。展覽會の別室に陳列して特別閲覽料を取つた。此閲覽料の正味の半分が我輩の收利になるのだが、朝から晩までシッキリなくゾロ〳〵見物がやつて來た。

唯つた一度景氣を見に行つた處が、見物の奴めが畫よりは我輩の顏ばかり見てけつかる。何も腹を立つほどの理窟もないが、最う二度とは行くまいと思つた。

我輩の畫が、眞實是まで世界に無かつたほどの大傑作なら、活きた鳩をムシャクシャ喰ふホッテントの生蕃を見るのと同じ好奇心で我輩を見るやうな事があらうか。

現に我輩はホッテント人と同樣に見られてをる。若し我輩が矮狗であつたら、如此な鹽梅に見られても嬉しいだらうが、併し我輩は美術家を見せ物同樣に見て眞の畫を味はう事の出來ない世の中の美術心の墮落に腹を立たないやうな畫工にはなつてゐられないのだ。

（未完）



岡本の手帳

獨歩生

左は『牛肉と馬鈴薯』の主人公、岡本誠夫の手帳より抜き書きせしものなり、此主人公に同情ある人には多少の興味あるべし

○

わが願は世のつねの願にあらず。この願の叶ふ時はいつなるべきか、わが命の此世にある間、叶ふまじとも覺ゆる。もし然る時はわれ五十、七十、百歳の壽を保ち得んも、そは空しき夢の命のみ、われは此世の人の命をば夢の如きものと觀ずることなきにもあらねど、人生は眞面目なるもの在りといふがわれの信念ぞかし、然るにもし此願叶はずして在らば、わが命はまことに夢よりも空しきものならん。一生を夢と送る、これにも増して哀れのことやあるべき。この願とは何ぞや。げに世の常の願にはあらず。かゝる願を懷くもの今の世に多くありとしも覺えず、われはこれを悲むものなり、世の人は夢の如くに一生を送るなり、われはこれをあはれむ。この願いだかぬ人は影の如き人ぞかし。これ誇りたる言葉にあらず、われはかく信じて疑はざるなり。

わがこの願の叶ふと叶はざるとは偏に神のみ心にあることなれど、わがこの願を懷くことは

まことに神のめぐみなり、われはかく信じて疑はず、わが幸をよろこぶものなり。この願を懐くわれをわれみづから幸なりと信ずるものなり。この願もしも叶はゞ神のみめぐみ幾千萬人のものにも增して此あはれなるわが上に厚きなり。幾千億の人々は此願を懐くことだにせずして其命を了りたり。

全世界の人、悉くこの願を懐く能はずとも、われは此願を追ふべし。わが斯く言ふはすでに此願の幾分をとげ得たればならんと思はる。少も見ることなくば、見んことを願はざる人も或る奇しき物の端をだに垣間見んか、かれの願はさらに能く見んことなるべし。このゆへにわがこの願を叶はんことを切に願ふは、この願の少く叶ひ居ればなり。げに然り、げに然り。

この願とは何ぞや。如何なる願ぞや。

わが戀は遂げ得て又破れたり。わが妻、これを捨てゝ走りね。このゆへにわが肉と心とのなやみしこと幾何ぞや、今も今とてわが心はこの傷に苦みつゝあり、今もなほをり〳〵神に祈ることは彼人の心に眞の情の泉ふたゝび漏て流れ、わがこの傷を淸め醫さんことなり。されどこれわが切なる「この願」に非ず。詩人たらんことにや、あらず、剛强正大の政府を建立して今の吾國を救はんことにや、あらず、基督教を吾國民唯一の宗敎となさんことにや、あらず、これらはわが空想のみ、夢想のみ、「この願」には非ず。愛と信と義とを完ふせんことにや、あらず、君子たらんこと、聖人たらんこと、偉丈夫たらんこと、これ皆「この願」にはあらざるなり。

山林の自由の生涯にや、嗚呼われは實に山林の自由を希ふものなり、わが血はこのために躍るぞかし。

山林に自由存す、われ此句を吟ずる時、わが筋肉の波立つを覺ゆ、言ふ可からざる誇、まなじりの光となる。されど、これ亦、わが切なる「この願」にはあらず。

嗚呼然らば、この願とは何ぞ。

父母いたく老い玉へり、此世に在す命も長かるべしとも覺へず、一日も長く壯健に在さんことはわが願にぞある。されどこれとてもわが切なる「この願」にはあらず。

宇宙は不思議なり、人生は不思議なりと人も言ひ、われも言ふ。科學と哲學と宗教とは此不思議を滅さんと力む。わが願も亦、科學者として、哲學者として、宗教家として此不思議を闡明せんことにや。あらず、あらず、これわが「この願」にあらざるなり。

然らば何ぞや、わがこの願とは。

美と眞と善と、わが願はこれを求めんことに非ず。若しわが「この願」叶はずんば、美も善も眞も、空のみ、影のみ、まぼろしのみ、題目のみ、稱呼のみ。

カライル曰く

Awake, poor troubled sleeper:
Shake off thy torpid nightmare-dream.

わが切なるこの願とは、眠より醒めんことなり、夢を振ひおとさんことなり。

この不思議なる、美妙なる、無窮無邊なる宇宙と、此宇宙に於ける此人生とを直視せんことなり。

われを此不思議なる宇宙の中に裸體のまゝ見出さんことなり。不思議を知らんことに非ず、不思議を痛感せんことなり。死の秘密を悟らんことに非ず、死の事實を驚異せんことなり。

信仰を得んことに非ず、信仰なくんば片時たりとも安んずる能はざる程に此宇宙人生の有のまゝの恐ろしき事實を痛感せんことなり。

われはわが心の眼に厚き膜の覆ひ居ることを感じつゝあり。われは夢魔の支配のもとにあることを感じつゝあり。これを感じ得たるはまことに神のめぐみなり。今はこの膜の破れんこと、夢魔を追ひ拂はんこと、を切に願ふにいたりぬ。

この宇宙ほど不思議なるはあらず、はてしなきの時間と、はてしなきの空間、凡百の運動、凡百の法則、生死、而て小さき星の一なる此地球に於ける人類、其歴史、げに此われの生命ほど不思議なるはなかるべし。これ誰も知る處なり、而て千百億人中、殆んど一人たりとも此不思議を痛感する能はざるなり。友人の死したる時など、獨り蒼天の星を仰ぎたる時など、時には驚異の念に打たるゝ事あるは人々の經驗する處なり。されどこはしばしの感情にして永續せず。わが願は絶えず此強き深き感情のうちにあらんことなり。

何故にわれは斯くも切にこの願を懷きつゝ、而も容易に此願を達する能はざるか。夢中にありと知りつ

つゝ何故に夢よりさむる能はざるか。

英語にworldlyてふ語あり、譯して世間的とでもいふ可きか。人の一生は殆んど全く世間的なり。世間とは一人稱なる吾、二人稱なる爾、三人稱なる彼、此三者を以て成立せる場所をいふ。人、生れて此場處に生育し、其感情全く此場處の支配を受くるに至る。何時しか爾なく彼なきの此天地に獨り吾てふものゝ俯仰して立ちつゝあることを感ずる能はざるに至るなり。蒼天も星宿も、太陽も、山河も悉く此世間を飾る裝飾品とのみ感ぜらるゝに至るなり。それ世間ありて天地あるに非ず、天地ありて世間あるなり。此吾は先づ天地の見ならざる可からず。世間に立つの前、先づ天地に立たざる可からず。何故にわれは斯くも切に「この願」を懷きつゝ、なほ容易に達する能はざるか、曰く、吾は世間の見なれば也。吾が感情は凡て世間的なればなり。心は熱くこの願を懷くと雖も、感情は絕へ間なく世間的に動き、世間的願望を追求し、「この願」を冷遇すればなり。

怪しきまでに人は此天地の不思議に慣れて無感覺に安じ居るなり。墳墓の累々たるを見て平然たるなり。限りなきの蒼穹を仰ぎ見て平然たるなり。

信仰と言ひ、悟道といひ、安心と云ふ。されど要するに心理的遊戯ならざるは稀なり。何となれば彼等は驚異の感に打たれて天地の間に俯仰介立し、求めざるを得ずして神と道と安心とを求めたるに非ざればなり。われは已に此心理的遊戯に倦みたり。

余のこの願若し叶ふことなく、諸君も亦、かゝる願だに有たずとせば、吾等の宗教は遊戯のみ。吾等はたゞ自個の尤もらしき感情を弄するに過ぎざる可し。吾等の所謂信仰なるものは前提をあやまりたる結論よりもはかなきものなるべし。

政治や美文と並稱せらるゝ限りは宗教も遂に睡眠中のぜいたくなり。

「神を信ずるもの、」彼等は自から斯く稱し居れり。然ば何故に彼等は世間的の煩に苦むこと多きや。何を着んと思ひわづろう勿れと主は敎へ玉へども彼等は是等を思煩ふのみに非ず如何に人に思はれん、如何に世の認めるならんなどをも思ひなやみ居るなり。是れ何故ぞや。彼等の神は天地の造りぬしならずして、世のものなればなり。彼等は神を稱して天地の造り主と讃ゆ。されど彼等は、此天地には極めて冷淡なり。余は今、彼等と言へり、されど此彼等の内には勿論余も加はり居るなり。

人々各追求願望するところあり、善を求め愛を求め義を求む、これ等を稱して理想を仰ぐと稱す。其れ

より下ては功名富貴、様々なり。此等の願望のために人々焦心苦慮す。されどわが「この願」よりすれば悉く末葉なり幻影を追へるなり、夢を追へるなり。

幻影よ、幻影よ、

人は悉く最大なる事實（ファクト）を見る能はずして幻影のみを見るなり。幻影を見るが故に事實を見る能はざるなり。幻影よ幻影よ消え失せよ。

吾等は最早太陽を見ざるなり。たゞ太陽の幻を見るのみ、月を見ることなし。眼底の幻影を見るのみ。

吾等は最早天地を見ることなし。腦底の印象物を見るのみなり。

吾等は遂に事實を全く離れて、たゞ幻影のみを見るなり。吾等は死を見る能はず、たゞ死體を見るのみ。生を見ることなし、たゞ生體を見るのみ。故に生死の不思議に打たれずして生體の死體となりしを見るのみ。否、生體を見而して死體を見るのみ。

凡て人が事實を見ずして幻影を見るの尤も甚だしき例は死の場合なり。ルーテルは曾て其友人アレキスの電死を傍に見て、死の事實を見得たり。普通はたゞ幻を見るのみ。吾等の目さめし時と雖も、夢のうちに在る時と五十歩百歩の相違のみ。

明日も來るべく、今日は過ぎなんとし、昨日は逝きたり、日々同じ夢のみ繰り返へしつゝ過ぎゆく。

實に憐れなるは、この天地を夢にてつゝむことなり。

如何にすれば此の夢さむべきぞ、此方法もがな。利刄を以て肉皮をそぎ取るが如くに痛快に此心眼の被覆を去りたし。其方法もがな。

深夜、月に對して瞑想したり。薄暮、若王寺の丘上に立ちて大觀したり。されど僅かに心のをのゝきしを感ぜしに過ぎず。忽然としてさめざる也。

われ何處より來り、何處にゆく。死せし彼は何處にゆきし。此等の問を此宇宙に向て心から發し得んことは難い哉。されど此問を發せんことを吾が願なり。

われは此願の叶ふまでは如何なる手段をも取ることを辭せざらんと欲す。

上加茂の丘に登り、松によぢ上りて四方を見渡しぬ。されどわが見たる處は遂に幻影の外に出づる能はざりき。美はしき野邊の夕日影、大空をたゞよふ雲のむれ、はてしなき蒼穹、何れか「美」ならざらん。されどわれ遂に幻を見たるのみ。われの夢は少しもさめざる也。

たゞ世の卑しき空想のみに苦められき。

曇みつ空、是れ又、幻影としてのみ見らる。われは遂に幻影の外に出づる能はざる乎。

此世の名利の念に苦む。肉の事をのみ思ひわづらふ。これ何故ぞや。神を知らざればなり。否、世に住

みてのみ居て、天地に住まざればなり。夢にのみ生き幻のみ描きて、此恐ろしき不思議なる宇宙に此身を見出すこと能はざればなり。

嗚呼吾は患難めるものなる哉。朝な夕な、夕な朝な、たゞ〳〵世の事をのみ思ひわづらふ。徒らにもがき、苦しみ、あせり、いらだつなり。

思へ、思へ。伴武雄何處にある、古川駒造何處にある、山口行一何處にある。有光里子何處にある。藤形何處にある。願くは吾心さめよ、嗚呼希くば吾心めさめよ。

爾の今すむ處何處ぞや。これ舊き都に非ざるか。こゝには千年の歴史あり。されど平淸盛何處にある。平敦盛何處にある。花の如き平家の公達今何處にある。

陰謀、企圖、叛亂の跡こゝにあり、其人等何處にかゆきし。足利義政何處にある、其銀閣寺は、十錢の見物料を徽して空しく明治の代の見世物となりぬ。豐臣秀吉何處にかある。維新の諸豪傑何處にある。」

あゝわれこゝに在り。われ玆に立つ。有りしものなし。今あるものも又た無からん。吾何處より來り、吾遂に何處にかゆく。願くは吾心さめよ。希くは吾がにぶれたる此心めさめよ。此世の夢よ、さめよ。

わが願は宇宙の不思議を明にせんことに非ず、人生の秘密を明白に解剖せんことに非ず。

たゞめさめんことなり。「秘密」に戰慄せんことなり、「不思議」に驚魂悸魄せんことなり。

知れざるものは如何にしても知れずと。こゝに於て賢明なる人々は人生問題や宇宙問題に從事することを以て閑人の閑事業と見做し玉へり。

然り、然り、知れざるものは如何にしても知れざる也。これを知らんことをつとむるは實に閑人の事なるべし。されどこれを以て宗教の人を嘲るに足らざる也。宗教とは宇宙人生の不思議を解釋せんがために起りしにはあらず。不思議を不思議と痛感して後起る處の信仰に由つて成るものなり。

有神無神の爭論に先だち人は先づめさめざる可からず。爾の宗教的信仰なきは、爾の心の痲痺を證明するなり。

神の人は言ふも畏し、ポーロやルーテルや、皆な「不思議」にめさめて此幽遠宏大なる宇宙に於ける人の命運につき心をのゝき感あふれしなり。其火の如き信仰は止むことを得ずし起りし結果なり。

多くの科學者は不思議を感ぜずして「不思議」に弄ばるゝ愚者なり。多くの哲學者は不思議を感ぜずして「不思議」を退治せんと欲する夢想家のみ。

二人畫工は號を逐うて益々佳境に進むべく、更に伊藤銀月氏の「大魚に呑まれし人」次號に現るべし、氏が記者に與へし私信の一節に曰く、「海は小生の領分、一昨年中相州の濱にて自分が觸接したる或る事を材料とするものに候へば、銀月の文として此上のものは無之候呵々」と、以て其内容を推すべし、記者又贅せず。



青眼高歌

吉野臥城

牧場の彌生

嶽山の頂めぐる春霞、
神旨を宣るやはら風の子漫歩く
新草の青の牧場の彌生、今
漂へる香こそゆらめけ。――陽炎の
醉ひほけて舞ふ輕き影、
燃ゆるまぼろし戀の彩、――
蒲公英の、菫の、草の、さては又、
流れゆくいささ小川の晝の夢、
高天の美にあこがるる地のおもひ、
ここにして一つに燃ゆる詩の景色。
そよや飛びゆく白き蝶、
跡追ひすがる雌の蝶や、
春姫の御座をすべりて、時の間を
翩々とうまし快樂の逍遙や、
花草に落ちてもつるる物語り。
見よ、こなた牧にそひ來る若き人、
優し少女、いづれ情の清き眼、
閃きの時に二人のほほゑまひ、
たとふれば天つ甕の美酒に
生命長らのところ醉や、
身ぬちをめぐる淨き血の
活火照り、おもひあがれる姿かたち。
花摘みて見かへる人に、「君よ、この
平和の牧場を律に賦しませ。」と
金鈴の聲音ふるひぬ。「さなり」とて
立ちどまり、少女の襟に花かざし、
「わが律は汝が緒琴にのりてこそ、
わが花は汝が玉手に觸れてこそ、
とこしへの生命得けれ。」と手を執りて、

若き幸、若き希望にゑまふらし。
春の日に融くる小川の囁きの、
うまし囁きゆく路の
桃咲く丘の壁を指し、
「唯ふたり棲むに幸ある晴の家、
朝の牧、夕の告天子に詩あらむ。」と
夢を趁ひ、霞のうちに消え入りぬ。
日は今草の香を高み、
うららかや横臥し思ふ牧の老
むらさきの烟を吹くに柵ぞひを
行きめぐる犢の二つ、甘睡せる
母の夢とほ世の春や偲ぶらむ。
角長の牡は膝折のとろり眼に、
風光る農夫が肩の鍬を見て、
涎する事も無げなる面持や、
遁世のおのれ愚を守る野の聖。
閑なる「晝」は欠伸して
涙を落す薄ぐもり、

瞬けば瞼の素雲遠退きて、
寂寞の雲時の後のひらめきに、
陽炎の氣息吹きかへす長閑の日、
花に色、高飛ぶ鳥に歌ありて、
小草葉に薫る光の常流れ、
土窖の田鼠の額も浸すらむ。
ああ青野みち晝さがり、
景色描く西びとまねぶ書匠は、
「平和や青の牧場の牛の群、
牛を飼ふ幸人をこそ書くべけれ。
眞裸の市女に飽きぬ、今日は。」とて
指を自然の紋に觸れ、
胸に無邊の靈を摧き、
若草の香ふ褥に腰しては、
清淨のこころ無限の光見ぬ、
「あなにやし汝とし棲めば足らへり」と
痩せし頬にくれなゐ潮しし雀躍や、
初戀の少女さびたる歸路よ。

ながむれば、嶽の麓の麥生畑、
神の子の蒼海原に伸し羽して、
落つべくとしてははたはたと
浪の花打つ高のぼり、
朝雲の白きに翔り入る如く、
こは征矢の直路を馳する揚雲雀、
天宮の聖の讚歌を調べむと、
公子めく若き樂師の新粧、
雲の戸に花の姫御や垣間見む。
眞耀く金皷聲なく天降り來て、
草蔭に落ちぬと見しは、駒鳥の
ひとを怖るる羽づくろひ、
ころころと鳴きて飛び移る
朱塗のちさき祠の森のかげ、
ものめくよ風の子招く破れ幟、
迷信をここに封じて、村びとが
渇仰の槻の大木も芽を吹きぬ。――
愛の火に野山いろどる彌生姫、

(情深き末の子なれば)蠱の木と
疎まれし槻にも賜びし淺緑、
よみがへる活の脈うつ接吻に、
ふと醒めて見下せば世は花の春、
われ後れぬと言ひたげの森の王、
高姿おごそかにこそ天そぞれ。――
照り返す光を浴みて、小附荷の
馬の背や、蒲團に乘れる溫泉歸りの
色白女振り仰ぎ、
「枯枝と思ひしものを若芽かな、
吉言こそあらめ、今年。」と鄙訛り、
頰冠るくはひ煙管の老馬士は、
皺嗄の聲をかしげに、「さればこそ
蠶に、作に幸あらめ。喃。」と見返り
片頰笑み、鄙唄うたひ行き過ぎぬ。
あゝ靑野みち長閑さや、
おもひ寢の夢なつかしむ黃の胡蝶、
金扇舞の羽袖も輕らかに、

香を揺り花の戸をめぐり、
霞の奥の鈴の音に、
あこがれの介よろしく舞ひ納め、
柵の外の白苜蓿の家に還る。
今し彌生の日は夕、
森の王、――欅の姿も朧げに、
嶽山と一つぼかしの薄霞、
花、小草、思あるものの吐息して、
「彌生日もはや暮れぬる」と眺めやる
面に、さと光を投ぐる古金泥、
冥想の書巻に似たる色彩や。
しばし見惚れし牧の老、
「とこしへの藝術の生命會せなくに、
我慾より思なかりし身の昨日、
高光る詩歌の靈に觸れも見て、
野にても牧守る生を咒ひつ。」と
榮光の中に悔知る眼清う、
しろがねの髮のことごと輝くよ。

今、宮まかり來る告天子、
「大地の青野に安き眠あれ、
明日のあけぼの幸あれ。」と
囀りの一曲了へて靜寂の
刹那にひびく牧の角、
牛、むらさきの靄を蹋み、
斷えつつ安けき牀へ、わが家へ。
かくて野の氣の衰へに似し夕は、
川べりの黄金菜花にたゆたひて、
時の間の薄明り、――ああ花めくや、
暮れはてぬ、青の牧場の彌生清き日。

朽木

雨晴や、若王子めく朝の暾に、
清き香を吐く白檀の森の朽木よ。
人知れず老いてたふれぬ、ある晨、
もだえの胸は黒土の咒咀にくづれ、
世に知れず埋れはてぬ、ある夕、

秘めし戀こそ蒼苔の花と咲きけめ。
朽ちてなほ思を語る靈あらば、
つれなかりける世も、人も、涙垂るべき。

若き兩性

あひ見なば罪や犯さむ、遠島に
若き女と男は繋がれて海を隔てぬ。
暗闇の室に隣の明き知り、
夕獨居の淋しさに思ふ思、
光明の園にことなる灯を忘れ、
朝逍遙の樂しさにうたふ歌。
田鼠の盲つくらむと、自覺なく
鞭執る人の愚かなる道の明治よ。

永久の家

金の籠を夕日に捨てて、深林の
翠微ぞよろふ樹の虚空に歸る山雀。
清淨の風は律呂を飄し、
まろらの胸に感興の光かがやき、
閑寂の水は思情をさそひ去り、
安き眠に妄執の闇襲ひ來ぬ
永久の家、——人は花雲戀ひも行け、
歌を樂しむ身はひとりここに住る。

野風俗

與謝野晶子

霧の山朝わけゆけば玉煮ると桂をりたく美女をこそおもへ

久方の天のいくさの火箭おちてにほひするなり罌粟の花原

野風俗男のやうに煙草のむ少女のむれとありて雲見る

美くしき夕くれなゐの中に見ぬこひしき船の大きき帆ばしら

たわたわのかひなと白の御衣うつる八つ花形のかかけ鏡かな

かへり見て母にならひしやせ病すなとも云はず木太刀佩く見よ

夏の水運きる船の棹とりにやとひまつりし京の君かな

うぐひすはいてあなものを云ふものか二挺皷を人にやりては

男體の春の神とも仰がるる白馬の君を思そめてき

春の日は連翹透し朝の戸に比金錦織りぬ僧院にして

なつかしき人の夜聲を人中に眞闇の中に藤の花見ぬ

五つなる聞き目するを物はえにせよとをしふるつれなし人よ

五月盡小おどりすなり若人は夕ばれ雲の夏のいろ見て

金閣や寺紋かきたるおん幕の中に御茶養る下臈の法師

よき歌のおほくをとはれ語り居ぬ知る人の名に下ゑみつゝも

歌

尾上柴舟選

○ 小川眞清

霞む野のきみがみ胸を床として世の春うたふ我は雲雀子

かたらはむやさしき友のなき胸は火なき厨(くりや)によく似たらずや

集おきてあかき灯影にあえかなる君が小琴をきく春の宵

春姫のなさけもたらし若草にやはらかう降る野の朝の雨

いささかの詩の才たびしみなさけの神うらめしき夕もありけり

戀ひあひし桃と杏とあひよりて一つとなりし花か相思樹

窓かけの絹をもりくるばらの香にあやしう胸の思みだるる

多賀城や古碑うづめさく虎杖の花にさびしき夕ぐれの雨

すれあひてかたみに笑みて別れ來し花の浪花の月のおぼろ夜

かくてなほ世をものろはず岩かげに幾とせひそむ目なし磯牡蠣

たゞひとり漁村の家にかへりゆく磯の夜寒をなく千鳥かな

紅梅の枝をすべりて連翹の花に羽を伸(の)す雨のうぐひす

○ 若麻績長風

君來ます宵を牡丹は傾きぬ待つもえ堪へぬ吾れかのさまに

霰の日流人(るにん)出すと牢獄の鐵門ひらく夕響かな

秋風は悲しき國の少女等がつひの叫と森過ぎて行く

明滅の遠き山の火數へつゝ君が手をとる夕闇の窓

五層塔冬の夕日をあびて立てり墨繪の如き枯林の上に

なつかしき夢もあれなと遺みなる鼓まくらにねし春の宵

寂しさや嵐の前の深林のさまして戀ひぬ老いた

る人は
春風は南の島の戀歌をさゝやくさまに吾窓すぎ
ぬ

○　吉岡夕舟

美しく櫻の池に鯉つると亭より舟をやとひ給ひ
ぬ
よき駱駝つれし旅人はひるいして一葉動がぬ檳
榔樹かな
霰ふるや鬣みだしもの狂ふ牧の馬よぶ角笛の音
夕顔の花さく垣に柳風呂据ゑて浴みす美し人よ
あかつきや塔に月落ち山寺の櫻ちるなり我鐘つ
けば
如意棒や八月寒き荒山に入道こもる瀧しぶきか
な
大船は今し動ぎぬおどろしき潮の高鳴りながし
めにして

○　西宮白菊

口笛の君呼びとめて物語る二十の桊は戀には
あらじ
低う曳く春の夕雲むらさきに湖にうつるよ羊
と吾に

夕虹のうすれ〳〵て日ぞ暮るゝ汐風たえし亂松
の磯

○　上村萩江

はるさめに湯がへり女のよき袖を燕かすむるや
なぎまちかな
はるの山さくらこかげの御堂はゆめのやうなる
灯をともしけり

○　村田愛美

疾く來てはをかしうさやく春潮は小貝戀ふると
羞ぢらふさまに
靄すれば白き小鳩の天華ふるさまにも飛びぬあ
さあけの森
桃の灯は雛が夢をそとぬすみ小雨の宵をまろう
ゆれける
紙燭してさくらの中に君を見ぬみだれ心地に灯
もはぢらはて
百萬の亂矢のがれて椰子かげに戀がたりする二
人となりぬ
つと寄りてうるむおん瞳に別れの日「永劫」を彫
るごとわれを射ましぬ
情なき人を怨むと南する雲をおもひて夕野に

立ちぬ
春を得ぬわが胸さびしさすらひに鳥も來鳴かぬ
島かげの村
さびしき日わが胸やすき束の間と文してやりぬ
おもはれ人は
ふる郷の遠雲見るとさびしき日巌にし立ちぬさ
すらひ人は
蕾なれどやがて匂はむ戀の華紅きは自然の旨も
否まじ

桐の花

漱石選

有職の家古うして桐の花　芋村
堂守は焙爐してあり桐の花　同
花桐や窓々明けし寄宿寮　同
花桐やお組屋敷の最合井戸　同
花桐や鷹匠町の晝靜か　同
寺町や枳殻の垣根桐の花　同
桐の花庭としもなき干場哉　同
花桐や畑もつくれる屋敷內

桐咲くや都にのぼる受驗生　葹人
花桐や漁村のおさが長者ぶり　苍偲
桐の花貸家の札の古りにけり　垂藤
やがて借る隣の庭や桐の花　太虛
藥を積む裏の空地や桐の花　三坊
唐門や桐の花咲く鳳山寺　蕪雫
敷石や大門近き桐の花　桂川
花桐や社に近く移りすむ　枸骨
花桐や草を刈らざる裏の庭　想寒
宵月をはら〳〵雨や桐の花　四綠
とざしある能の舞臺や桐の花　桃村
桐さくや人住み古りし貸長家　方外
古寺の五百の羅漢桐の花　玲浪
桐の花鄉先生の閑居かな　皷雲
薪積む藥家根低し桐の花　同
花桐や竹垣低き笛工　竹馬
花桐や遠きに雞の午うたふ　同
將軍の白馬驕るや桐の花　葦水
道場の庭に散るなり桐の花　同
花桐や經堂修理の寄進札　鳳梧桐
兵營に午時の喇叭や桐の花　同

片山の段々畑や桐の花　煙朗
桐の花莊司が脊戸の空地かな　同
地固の石積む庭や桐の花　同
とび／＼に花桐立つや茶の木原　寒骨
燒跡に唯花桐や山の寺　同
花咲いて今年賣る桐數へけり　同
此寺に親み古し桐の花　同
紫の幕うつ御堂や桐の花　天仙
桐の花孔雀尾を張る御苑哉　同
花桐や翠もて渡る長廊下　同
花桐や蹴鞠にふける三の君　同
桐の花散るや瞼の重き日を　梅瘦
から梅雨に桐の花保つ暑さかな　同
下草の藜たけけり桐の花　同
山桐の花ちる四月嵐かな　同
樓門の鳳凰古りぬ桐の花　萍也
汐曇る磯山寺や桐の花　同
桐の花垣に汐たれ衣かな　同
金柑の花つぼみけり桐の花　同

募集課題箟　寶　六月十五日〆切
土用　七月十五日〆切

應募俳句は東京市本郷區駒込林町大谷正信宛の事

應問

應問前號選句中の『漬物の桶動かせば鳴く蚊かな』は『明治俳句』中の『漬物の石を上ぐれば鳴く蚊かな』と兩立する價値ありとの質問を送られし讀者ありしが、前者は多數の投吟中餘りに好句と認むるもの無き爲め標準を低くせし結果採錄せしまでにて、後句とて稍や陳腐の譏を免れざるべきか、右應答す。――　選者

應募和歌は東京市小石川區原町百卅三番地尾上柴舟宛の事
應募川柳は東京市本郷區片町十番地反省社宛の事

紙面の都合上本號にも川柳を休載したれど、來月よりは必ず掲ぐべし、川柳は殺そべつてもやれる輕い文學、夏期には好適のものと信ず、續々投稿あれ

評論

外務大臣の更迭

XY生

本年一月七日外務大臣に任ぜられたる加藤高明未だ期月ならざるに辭し。西園寺侯其の職を兼攝せるが。五月十九日に至りて。駐英大使林董子外務大臣に任ぜられたり。駐英大使は多分小村壽太郎男なるべし。

小村男が駐英大使の後任として英國に歡迎せらるべきことはロイテル電報既に之を報じ來れり。男が前内閣の外務大臣として兩度日英同盟の締結當局たりしことは。是れ英國人に歡迎せらるゝ所以なるべし。而して新外務大臣林子も之と同一の理由を以て世に迎へらる。また當然とせざる可らず。

林子の手腕は、外交家として恐らくば間然する所なかるべし。或る人は子の變通の略なきをいひ。或る人は子の機膽兩つながら超凡にして好個政事家たるの資格を具ふといふ。其孰れか當るやは吾人未だ知らず。則ち知らずと雖も。子の駐英公使大使たる事歷は。子が外交官として最良なるものゝ一たるを證明して餘りあり。子は常に英國の官民に敬愛せられて破格の優遇を受け。且つ日露戰役中英國政府をして十二分に同盟國の誼を盡さしむるに於て。最も能く努めて。而して十二分に其の効果を擧げ得たればなり。

然れども林子既に入て外務大臣たる以上。單に外交方面にのみ成効することを期するに止まらず。更らに國内の民心を指導することを忘る可らず。想ふに小村男は當今外交家中の最も精敏多智なる人なるべし。今にして其の事歷を細視するに。能く英國と結びて竟に同盟の約を成し。米國の歡心を逸せずして深く或れに傾注

ぜしめ、且つ佛獨をして露國と同盟せしめず、滿洲問題に於て巧みに露國と應酬し、清國を聯ね英米を後援として之に當れるが如き、露國をして佛獨を味方とせずして幾んど孤立の外なからしめたるが如き。之に次て戰役中常に列國の同情を我れに集中したるが如き、外交上の成効實に看るべきものありき、但たポーツマス談判に於て頗ぶるウイッテ氏に致されたるが如しと雖も、當時の形勢に於て多く之れ以上に出づることと能はざりし事情なきにあらず然るに彼の如く民心を失ひ、且つ外交家としては全く無能者の如く言做さるゝに至りし所以は何ぞや、他なし、内に備ふるに十分の用意を欠けるが故のみ、若し在野政事家の主たる者、及び新聞記者中の識見あり信用あるものと常に意思の疏通を計り、彼等をして中外形勢の大要を領得せしめ、且つ外交上に收むべき大體の要點を暗示し置かば、講和の條件假令一より十まで悉く民間人を滿足せしむること能はざりしとするも、熱烈なる攻撃をか加へて幾んど人心をして常軌を逸せしむるまでには至らざりしならん、事茲に出でず動もされば外交秘密の名義を以て全然民間者を疎隔し、甚だしきは則ち十二分の效果を收めて大功名を獲るが如く信ぜしめたるの形跡なきに非らず、然かも是れ單に小村男のみの過去に非ず、桂首相を始め多くの閣臣の罪なりと雖も、小村男また主たる責任者たるとを免かるゝ能はず、蓋し開戰の當初に在ては、閣臣等皆舉國一致の必要を感じて謙德世に降り努めて意思の疎通を計りたるも、連戰連捷に次ぐに外交上の好成蹟を以てするや、動もすれば自から驕泰に流れて民間人を疎外し、却つて功名に躁急なるの傾向なきにあらざりき、隨つて人心を指導する一事全く之を閑却したるものゝ如くなりき。是れ外交家として十二分の伎倆あるも、内に備ふるに於て欠點あり、竟に大蹉跌を招きたる所以ならずや。

唯だ一個の外交事務官たらば乃ち已む、苟くも國務大臣たる以上、民心を指導して以て大局を謬らざるの用意なかる可らず、今日以後外交の局に當るもの殊に此必要あり。即ち小村男失敗の事迹は、恐らくば林子に取て最も價値ある教訓ならざらんや、林子果して政事家たる資質あらば、吾人の言を俟たずして能く此の間の消息を解せん、而して小村男の如き亦當さに大に悟る所ありしなるべし。



「運命」と「破戒」

烟霞生

中央公論記者足下

是から先甚麽作物が出て、甚麽に吾人を驚倒させるかは知れないが、今の處島崎藤村氏著破戒並に國木田獨歩氏著運命の二篇は丙午文壇の最も傑出したる作物であると思ふ。自分は此等の大作に關して一家の管見を叙し江湖に紹介推薦するの光榮を此上なう欣喜するものである。右兩者は思ふに壽命の永い小說であらう、兩君共に君とか氏とか付けられぬ世まで殘るてあらう、然し那樣先の事は右に左、現在這麽佳い眞面目な創作は往々出て來るといふのは、唯に文壇の爲めばかりでなく一國の譽である。兵隊が強いばかりで無く、小說も隅には置けぬと世界で謂ふやうになるのは眼前の事だといふ確信を以て、大和民族の一人としても自分は此等の書を歡迎するものである。有體に言へば此等は「野に呼べる人の聲」である、著者等は直に自ら「後に來るもの」をも兼ねて大に爲すあるか、それとも「後に來るもの」を待つ間の單に豫言者であるか、その處は判然しない、只吾人の願は御自身豫言者と被豫言者とを兼ねて貫いたい事だ。「運命と破戒」と稱しても自分は強ちに之を比較する積は無い、然し又面白い對比もあると思ふ、其所は論じて居る中に申上る事とする。先づ運命から初めやう。

「運命」一體獨歩子は現在に全力を傾瀉する人らしい。コツ／＼やる人では無くドッとやる人だ、短篇物に殊に成功する方て、其を撰んでやつて居る處は自を識る人だと思ふ。それに何でも自分の材料にするといふ方でなく。自分に箝まる材、或は穩せる代物を手掛けて居る。通じて九篇一つ／＼鉢植の木の滿開の花を

見るやうで而も其花の形や木振は差ふが花の色は同じやうな感がする、一つは著者が文章の色どりを酷く氣にする所爲でもあらう、好な色はそんなに多くある譯の者では無い、だからその色か出るのであらうか、先づ大體論は又後に言ふとして、第一が運命論者、冒頭「秋の中過、冬近くなると」何故秋の中過からの「から」を省略したのだらう、然し「二人の旅人が」を「旅人の二人」とした方が可い場合があると語つた事がある（さうである）著者獨特の筆法から、何か之にも深い理窟があるのであらう、兎に角文章が本領ではあるまいから文の瑕瑾は申上げまい少くとも自分はペンキ塗の廉建築を見るより、黑木造の嚴丈普請を喜ぶものである。一體此篇などは英語か何かで書いて西洋の文壇に出したら、それこそどゑらい名聲を博する作物だ。筋が少しも不自然でなく四一頁の四行目の外は所謂「逃げ」を打つた處も見當らぬ、實に結構なもので獨歩式を許せば文章も張があつて一絲亂れずである。それにしても能く這麼大きなものを短篇に纒めたものだ、或る人が子の小説を旦那藝と謂つたが、成程勿體ない事をする處は旦那に違ない、若し旦那藝ならば決して黑人と成る必要は無い、旨い物は旨いので、黑人に恐ろしがられる旦那で御出なさるやうに望むのである。

二頁十行の運命論者の出し方はさも運命論者らしくて嬉しい、三頁三四五行の文の調子が面白い、と恁いふ風に佳い處をいふと際限が無いから止めやう。一體創作の才のある人の作物は人を引張る力がある、といふのは趣向の先が見え透かぬ故が一の原因だと思ふ、此篇並に酒中日記など終が出て居るのに先が知れない、それが何より敬服する處である。此作は著者が初の考を途中で趣向を變へたらしく自分には思へる、つまらぬ推量だが附記して置く。第二巡査他が見て面白がる程に著者は割合骨を折らずに書いたらうと思ふ、然し凡てが此の調子の文章で行つたら、先づ大家中でも前に立つ人は少なからうと思ふ。第三酒中日記穴もあるし佳い處も多い作である。初の五月三日は今藏の酒が餘りに廻り過ぎたせいか文に過不及が多い六四頁の二

―八、六七頁一二三、六八頁六―次の一二、七五頁六―九、七六頁七―九、七九頁八―十一、八二頁六―、八五頁六、一〇七頁一―、一〇九頁八、一一一頁一―三仝十一十二、一一八頁一―、一二一頁十一、一二三頁五六、此言葉でお政は死ねる、一二六頁十―次の五、などは入神の文字だ、六四頁九より三四行は少しだれて居る。九五頁一―五の『「さうだ」と自分は膝を拍つた』は些と變だ、是でも良いが輕薄な筆つきでは無いか。最終の「記者は彼を指して不幸なる男よといふのみ…………」では似合はず平凡だ。それに「文句」といふ言葉が四度目に附いた、大事に使つて貰いたい。第四馬上の友、憑云ふものは却て書ら惡いのを面白く遣つてのけてある。然し江戸ッ兒に化け了ふとして居る著者の句調の中に、時々お里が知れる言葉があるのは什麼も致方が無い、假令ば「泣面かかしてやらう」、純江戸では言はない、「吼顔かかす」といふ吼顔と飛て居るから「かかす」も面白いが、「ベツ」といふエコノミックの言葉がある。それを江戸では使ふ事に成つて居る。又運命論者の中に「砂山が急に崩げて」崩げては純田舎である、雨の降る事を「天がホゲてる」と大分の人が言ふのを聞いた。左に角「ホゲ」は音から意氣でない。

第五惡魔「少女の香」といひ、又君子と武様の會話といひ、山遊の一條といひ獨特の調子があつて他に眞似が出來ない小説であるが、著者の見せたいのは一九四頁以下の惡魔の數節にあるであらう、文章も前の言文一致より上手だと自分は思ふ。「『求めよ然らば與へられん』果して然らば先づ求めよ、されど先づ求むるに先つて求むる心を求めざる可らず」などゝゴタクを並べるやうでは謙遜は宗教の奥殿を見る事が出來ないのも無理は無い。惡魔一篇確に今の世即ち福音傳道館が上野で路傍說教をやつて居る間は珍柄で隨喜する人も多く勿體ない位のものだが、然し著者の頭が禿げて來て、書き直したくなるのは運命中先づ此惡魔が第一に先だらうと自分は豫言する。第六盡の悲み、二二七頁以下は人をして唯涙を催させる、第七空知川の岸邊、西洋人が言ひさうな事を言つて居る處が三四ヶ處あ

る。第八非凡なる凡人、第九日の出。是こそ著者て無くては書けぬ小說てある、一大說教てある。福音てある。

通じて九篇、孰れを良とし何れを凡とする事は出來ない、皆作つたものでなくて成つたものだ、此上とも著者に望む處は「帽子」の如く作つたものを見せずに、成つたものを見せて貰ひたい、人は得意になると作りたくなる。願はくは文壇の爲に自重せられん事を。

「破戒」通篇五百七十八頁の大冊、薄志弱行な奴は通覽するさへ二の足を踏むだらう、それを、毎日〱コツ〱遣つて此一冊とし（新聞に連載したのには是より長いのもあるが、それは大して苦しいもので無い）、印刷製本表紙挿畫まで自分一人て世話を燒いた、竟り著者の魂が籠つて居る「破戒」が、人をして何となく跨くと足が曲るだらうと思はせるも無理て無い。裝釘が本綴てあるのは鳥渡他に知れない著者の親切てある。地圖を入れたのはハアデの眞似かは知れぬが、我々のやうな土地も知らぬものには難有い用意て、而も日本には新しい洒落た。梗概を語ると長くなるし、語つては成らぬものと思ふから言はない。四章の六に「君が碌々といふ言葉の内に、どれほどの酸苦が入つて居ると考へる？」と敬之進が言つて居る、著者が考へて言はせたのか、無意識に書いたのかは知らぬが、自分の見る處では、著者の書かんとしたる處は正に此「碌々たる者の酸苦」であらうと推量する。主人公丑松を初めお志保敬之進銀の助校長利三郎皆平々凡々の民、猪子連太郎だとてそんなエラモノては無い、而も凡人の凡生涯の中、時々刻々大人に寄せる丈、又はそれ以上の酸苦が彼等を腐蝕して行く、がどの位苦しい痛ましいみぢめなものであらうかといふ事が現はされて居る、破戒一篇人生の凡生涯の縮圖と言つても宜い。竟り人物が自然に動いて運命著者の人物の如く形に嵌つて居ない處が亦嬉しいと思ふ。獨步子のが旦那藝なら此著者のは黑人の手筋のあると謂へる。然しまだ垢拔がしない處がある、獨步子は文の色どりを氣にし過ぎて却て打破す傾があるが、藤村子は自然〱といつて餘り

色どりに頓着しな過ぎるやうに思はれる。恰度此等二書の表裝が内容を現はして居る、運命の方は女學生の御つくりを見るやうで「マア鳥渡配合が善くってよ」式であるのに、破戒の方はくすんで居て而も單調である然うかと謂つて飽の來る色でも無い、上下大島を着た御かみさんといふ形がある。中身も然うで是と云ふ當て場もなく山もない、而も皆棄て難い處がある、文章は前半より後半の方が見事で、別人が書いたのかと思はれる程である、まあ大低な長篇作者は、初の文に兎に角骨を折る傾があるのに初の方は、寧ろ、此人にして如斯かと思はせる亂暴な處がある。(自分は獨歩子を文章家とは思はぬから、設へ那麼(どんな)破格杜撰、設へば「人を魔するの力」「過ぎゆきし霰の跡白く狹き山路を隱れり」など仰つてもたいして氣にしないが、藤村氏は文も上手と聞いて居たから言ふのである)設へば冒頭の、「蓮華寺では下宿を兼ねた」蓮華寺では下宿を初めた、ならば拙い丈て文章に成つて居るが、原文では可笑しいのみならず間違だと思ふ。然し何か理由があるのかも知れない、兎に角一二頁は名文で無い、然し段々見て行く中に、十頁あたりからそろ／＼良くなつて來る。十五頁六行——十一行「一生の秘密(秘訣は誤植と附言する)とは云々」の處は後にあれ程厭はれる丑松の、父の膝下を出る時の心持だらうか。「唯もう勉強が出來るといふ嬉しさに家を飛び出し」得まいと思ふ、此時既に一抹の雲は彼の行手を閉して居たのが、師範校などに居る中に彼の目に見えなくなつた迄で、凭う魚が水を得たやうにはいくまいかと思ふ、二十頁以下のデスクリプションは實に旨い、二章の(二)全體は目に見るやうて小學教員の中に這麼手合が多數ある、生寫してある。(二)の四の末「敬之進はすつくと立つて一禮して聽て拍子の抜けたやうに元の席に復(かへ)つた」などは實に老朽教員を偲ばせる。(二)の五の敬之進の音樂隊同六の「浮世夢の如し」滑稽の中に人に涙を逼る(六)の四文平が快活になつた原因を「妙に婦人の居る席では熱心になるのが此男の性分」といつた觀察は面白い。四章は可怖い感を以て讀んだ。六章は暗

い感を受けた。此迄は前置て此七章以下が先づ本文なのである。丑松は父の葬式に列るべく歸郷する途中で其先輩の猪子に逢ふ、その會ひ方が頗る突飛で讀者は驚かされる、著者も此奇遇のあたりは自ら脈を引いて見たらしい、猪子に打明けやうとして止める處などは先づ完全だと思ふ屠牛場も目で見るやうだ十章の終の句などは唯感嘆させる筆致である。十一章と十二章處々文章て躓くが十一章の四、十二章の一と三などは他に眞似の出來ない處がある、十三章の高柳と丑松との會見はダレて居る、十五十六十七十八の四章は一章〳〵短篇小説の形をして居る、十九章の六七あたりは作者滿身の魂を遣つて居る處であらう、廿章の政事家連のイキサツは之が事實か知れぬが、著者には畑違で餘りゾッとしないやうに思はれる。二十一章の一二三以下一行〳〵讀むのが可怖い氣になる、六に至て竟に破戒に及んだ五三〇頁の三行—九行迄は全く不用で、之ある爲に、折角の興が醒めかゝつた。最後の獎の空の發程、此主人公の此書中に於ける餞別としては最も適切な景色であると思ふ。お志保の人物は自分には解せない處が多い、それは自分が田舍の女性を知らぬ罪であらう。全篇として論ずれば此位底味のある小説は近頃に無いと思ふ、此著者が本當に灰汁拔（あくぬけ）して而も新體詩に向つて施した位に文章をも氣にしたなら、先のその滿開期は（今は未だ滿開とは云はぬ方が作者に對する禮と思ふ）想像も及ばぬ程であらう、一體主觀的の人が客觀的に物を書くのは六ケ敷い、此書の大な瑕瑾は客觀的にしやうとして不知〳〵時偶主觀的に戻る傾があるではあるまいか。文章の傷も其爲に出來たものの二三三頁の五行以下の如き其良き證據である。先づこゝらで擱筆して置かう。兎に角自分は此等二書に隨喜する餘り、世間に此等の書を可成多く廣く讀ませ度いといふ老婆心から、此の文を草したのである。記者足下若し許さば餘白を貸し玉へ。



雲耶霧耶錄

飛燕客

△女に擊劒をさせるのは、小羊に闘爭を敎ゆるやうなものだ、

△人間の顏は、左半面が、右半面より美しいと聞いたが、ほんとかしら、

△報酬なしに働くのは、奴隷ばかりだ、

△顏面角が鈍角程、野蠻だとすれば、お出額(でこ)は最も文明的だ、

△サーチライトのやうに、眼が光つたら可笑しからう、

△若い時しとやかてあつた丈け、年を取るとあつかましくなる、

△美しい女は、氣位が高い、

△人の心は、金と食物と女とて、解剖することが出來る、

△鍋燒うどんは俳味がある、納豆は漢詩的て、辻占は端唄的だ、

△貰つたものと買つたものとは、同じものでも味が違ふ、

△金がない人は悲觀的だ、

△學を授けるより、財を授ける方がうれしがる、

△讀經も一種の音樂だ、

△有名な菓子屋でも、安い菓子はうまくない、

△女は近よつて見るべきものではない、

△人の徳を記憶する人は多いが、人の罪を忘れる人は少ない、

△電車に、袢天と鬚と、藝者らしいのと坊さんと乘り合せて居たのを見て此處は上下貴賤、戀も無常も一處だなと思つた、

△戀と云ふものは、樂しいものだらうか、苦しいものだらうか、或は苦しいのが、樂しいのだらうが、

△女扁の名は艶かしい、嬌、好、妙、妓、姌、妧、姸、姫、娩、媒、嫁、孃、又いやらしい、姑、奸、姦、婆、姪、嬈、

△馬車であるく人にも、通行税をかけたらよからう、

△三十にして起たず、四十にして惑へり、豈五十にして天命を知らんや、

△好いものは誰れにも買へるが、安物を買ふのは中々むづかしい、

△人生を樂むやうでなければならぬ、然しノーマネーと云ふ事は屢々人生を悲ませる、

△遣ふ事の出來ぬ金は、山程あつても仕方がない、

△金の事を云ふと卑しいと云ふ、然し金は矢張ほしい、

△賣るのもむづかしいが、買ふのもむづかし、

△金持ちの盜棒は稀である、然し金持ちの乞食は少くない、

△女ばかりと見て這入つた盜棒は、たんと盜まぬ小盜棒だ、

△當てにすべくして當てにならぬものは、日本の新聞、

△寒ければ身體はちゞまる、温ければ伸びる、暑ければ溶ける、

△愛するものから、缺點を見出す事は、惜めるものから長所を見出す事よりも、困難である、

△東京市民に、殘らず夜は提灯を持たせたら夜の東京は美しからう、

△藝者を買占めたら、もうかるだらう、

△自身の話を世間の人が、悉く信じたら面白からう、

△水のしたゝる音は、下手な音樂よりも餘程妙味がある、

△男子がお太鼓にしめたら、可笑からう、

△尼が振袖を着たら、どんなだらう、

△米の相場を知らぬ女は、金の有難味を知らない、

△世界の人が皆んな死んだら、獸類は奈何ならう、

△第一番に出た病氣は、何病だつたらう、

△貴重と云ふ事は、數の少ないと云ふ事だ、



向ひ三軒兩隣り

白眼子

向ひ三軒兩隣り！。

言葉は極めて簡單であるが、意味は頗る深い、

勿論、田舍のものには分るまい、少くも都會に生活したもので、この言葉を知らぬ程の迂濶者があらうか、假りに、之れありとすれば、そは既に都會に生活する資格がない。

けれど、下宿の二階にごろ／＼する書生さんや、三杯目にはそッと出す的の食客君などには差當り必要がない、苟も、十五區各區の何れを問はず、兎に角、東京なる二字の註せらるゝ範圍内に於て、若し夫れ、狹くとも一戸を張り、美ならずとも世帶を持つ以上、その、張るもの持つもの丶第一に知らざる可らざる最大急務は、即ちこの短かき一句の言葉なのだ、わらず、淺からぬその深い意味なのだ。

されぱとて、高樓大厦に肱を曲げて浮世のうの字も知らざる上ッ方はいざ知らず、堂々の門戸を張つて牆壁高く不關焉と濟まさるゝ御仁は之れ或は知らず、さはなくして、朝夕の出入に頭の一ッも下げ、出合頭にお世辭の一ッも言はればならぬ普通一般の者て、そも之れを知らずとすれば、恰かも、目あつて見えざると一般、處世の術に於て最大要素を缺いて居る、殊にそれが、生存の舞臺から蹶落されて、僅かに猫の額や火打ち箱の如き、落日の孤城に立て籠る落武者輩には、旁々以つて唯一の武器なので、言はゞ眷々服膺すべき金科玉條なのだ。

と言つたら、之れを見る讀者諸君、その中でも、未來の大臣や博士を以つて任ぜらるゝ書生先生乃至は食客君の如き、之れ我輩を蔑視し侮辱するものと、或は激怒せらるゝか知らぬが、世には越中褌の諺がある。斯く言ふ白眼子僕の如きも、實は、諸君よりもより以上のアンビションを有つて居たものだ、それが、曷んぞ知らんその俚諺に的中して、褌どころか、名譽や、金錢や、戀などいふあらゆる强敵に、ぶたれ、なぐられ、苛まれて、果ては人間以外の巣窟なる、九尺二間とかいふ場末の裏店にまで跳ね飛ばされた歷史さへある、諸君だとて、幸ひに之れなくんば別に文句もないが、或は之れないとも限るまい、てあるから、之れを以つて一槪に侮辱などゝ誤解されては迷惑千萬、たゞ諸君が前途の參考にまで、聊か婆心を呈するに過ぎないのだから、轉ばぬ先きの杖、用心にまで讀んでもらひたい。

て、再び繰り返すが、向ひ三軒兩隣り！、字數にすればたッた五字か六字の短かい言葉、單に之れだけ言つては何んでもない、が、その何ん

でもないのを深く研究すれば、滔々幾千萬言の大文字、大いに何んでもあるのだから不思議なのだ。

この、何んでもないやうな何んでもある、短かいやうな短かくない不思議の言葉、之れを、尤も平易に尤も通俗に飜譯して、尤も簡潔に尤も短かく切り詰めると、外でもない、蕎麥、といふ二文字になる、尙ほ之れに註釋を與へると、もり蕎麥、といふ四文字になる、更らに之れを詳解すると、もり蕎麥二ッ、といふ六文字になる、即ち、向ひ三軒兩隣りは、もり蕎麥二ッの意味で、もり蕎麥二ッは、諸君が一戸を張り世帶を持つことに於て、是非共心掛ければならぬ最大條件の一ッなのだ、俚俗、之れを稱して轉宅蕎麥といふ、が、僕は之れに別名を與へて、又世帶蕎麥といふ。

轉宅蕎麥、世帶蕎麥、名は異つても實に於ては一樣である、而も、轉宅又は一戸を張ることに就て、何んが爲めに之れが必要であるかは、頗る之れを疑問にするものもあらうが、豈計らんや答ひは極めて簡單なので、向ひ三軒兩隣りの言葉が直ちにもり蕎麥二ッを意味すると同時に、もり蕎麥二ッは又向ひ三軒兩隣りの交際を意味するのだ、換言すれば、轉宅して、一戸を持つた、といふ印なので、早く言へば、名刺の代用と言つても差支はない、もッと解り易く言へば、その向ひ三軒兩隣りへ對して、何うぞお心易く、御別懇に、と頭を下げた上て、お負けに、このもり蕎麥二ッを奉るのだ、勿論、その所以緣喜に至つては、淺學の僕不幸にして未だ知らないのだが、思へば、兎に角馬鹿々々しい。

尤も、之れが田舎のやうに、質朴で、親切で、いざといふ場合には何んかの助けにでもならうといふ人々なら未だしも、晨に來つて夕に去り、夕に來つて晨に去るが如き、差配の藥鑵頭が日毎の貸家札に忙殺されて居る新陳代謝の甚しき都會に、それも、親切かと思へば不親切な、若實かと思へば油斷のならぬ、掏兒や火附けや詐欺や泥棒などと、往々にして軒を接し棟を同ふする物騷な人々等に、我れから頭を下げて交際を求めるのみか、少なりと雖も財布の若干を痛めるに至つては、天下之れ程愚なことがあらうか、馬鹿々々しさも玆に於てか骨頂である。

が、馬鹿々々しくッても仕樣がない、家を轉じ家を持つには、之れが從來からの慣習でもあれば掟ともなつて居る、殊に、江戸ッ兒は、義理と稱へて、斯かる詰らぬことをも無暗に尊重して居るので、偶々之れに反し之れに背かうものなら、忽ち唐變木の侮辱を受け、義理知らずの汚名を蒙るは覿面、惹いては茶飲み話の談柄に上り、井戸端會議の槍玉に擧げられるのだから情けない、されば、都會に生活するものとして、之等の侮辱汚名を厭ふ限りは、愚と知りつゝも多年この慣習を持續し來つて、所謂、向ひ三軒兩隣りの言葉は、帝都到る所、巾を利して居ること夥しい。

所が、元來世上に疎い僕、斯かることには無頓着の僕、殊には書生といふ肩書を楯に取つて、懇意の婆樣がこの慣習を態々敎へて呉れたのも、フヽンの冷笑に聞き流して、構ふことかと遂に世帶を張つたが、古老の言僕を欺かず、たッたもり蕎麥二ッを惜んだばかりで、四面の楚歌を一

身に集めた覿面の因果、話は之れからである。

時は四ヶ年前、所は小石川で、隨分邊鄙な場末であるが、僕は、尾羽打ち枯して一時この所へ假りの塒を定めたのだ、家賃三圓、六疊に三疊の二間、之れが當時の隱宅であつた。

場末で三圓の家賃、之れで多くを語るの必要がないが、從つて、その附近や周圍も自から想像が出來るであらう、僕の隱宅を出ると、其處に幾十の棟割長家がずらりと並列して居る、この他、或は前後に、或は左右に、點々散在して居る大小の家屋、たとへそれが長家ならざるも、全然見る影もなく廢頽して居るので、言はゞ社會下層の貧民窟と言つても差支へはない、

更らに、茲に生活して居るそれ等の者の種類を見ると、車夫職工等が重なるものであるが、而も、その職工輩の勢力と言つたら甚だしいので、周圍に他の部類が少ないだけ、界隈は殆んど職工天下に屬して居る、其處へ、僕の如き毛色の變つたものが、突然その仲間入りをしたのだから、彼等の眼には餘程異樣に映じたに違えはない。

されば、僕がこの場末の裏店に轉宅するべく、ガラクタ道具を一臺の車に載せて、この界隈を通行した時には、沿道の長家連は皆怪訝の眼を以つて僕を見送つたのだ、そして、僕の素性の何物なるかを觀察する如くに、相顧みて私語して居たのである、殊に、件の荷車をやがて入口の路地に引き入れた時には、近所の子供は無論のこと、窓から頭を出す山の神、往來に私語する婆さんと嫁、乃至は井戸端に寄つて集つて居る女房さんや小娘などの、兎に角長家の人といふ凡ての人が、何れも物好きさうに見送つて居る無遠慮には、先づ以つて避易せざるを得ないのであつたが、たゞ之ればかりなら不思議もない、更らに、見送る後から無作法な口を叩いて、荷物が少ないとか、簞笥がないとか、長火鉢がないのは何うした譯とか、年が若いとか、服裝が汚ないとかと、それも低聲の囁さなら未だしも、聞えよがしの當てつけだから癪に障る、恐らく、この連中は晩の轉宅蕎麥の配當まで氣にして居たに違ひがない。

所が、豈計らんやお氣の毒なことには、元來が無頓着な所へ、僕の懷中都合の寸法が、向ひ三軒兩隣りといふ古來の定法も無にせざるを得なかつたので、遂にもり蕎麥二ッを奮發しなかつたのだから、連中の失望落膽も思ひ遣られて、陰では定めてさん〴〵の惡口を叩いたことゝ思ふ、けれど、惡口や雜言は由來僕に取つて何んでもない、大枚五錢のもり蕎麥二ッを配らぬ爲め、長家交際を知らぬからとて除け物にさるれば結句幸ひ、況んや、僕の隱宅といふのが、小なりと雖も別に一戸を成して、それ等の長家と棟を同ふせざるに於てをやである。

が、僕の方ではこのやうな强硬の態度を取つて、冷然として獨り不關焉と濟しては居たものゝ、併し、一日二日と經つ中には之れも僞であつた、外でもない、朝夕裏と表とて顏の突き合せやら、又は、涼みがてらの往來に長家一統と姿を見せ合ふに至つては、この强硬の態度も由なく破れて了つて、先方が二言三言のお辭に默つても居られず、默々ながらも益々挨拶を返せば、今度はそれに附け上つて、べちや〳〵と喋り出す

づう〳〵しさやら面の皮の厚さと言つたら、先日の議事の怨みもケロリ忘れて了つたかのやう。

それも、たゞ饒舌るなら差支へもない、辷り過ぎた口に何を言ひ出すかと思へば。

『何處へお勤めですか、矢張り砲兵工廠て……？』。

と、服裝が如何に粗末とした所で、第一、人相や人品でも知れさうなもの、殊には、現在が好しや情けない境遇に在るにもせよ、之れでも未來は一枝の筆を以つて風雲を叱咤しやうといふ不遇の文士を捕へて、言葉もあらうに、少しは義理もあらうに、突如、職工に見立てるとは非道いじやないか、が、之れも未だ我慢はする、更らに、昨日今日の見知り越しにも、乃至は一寸言葉を交した位にも、最早、狎れ合つて遠慮がないのだから遣り切れない、子供がちよこ〳〵歩いて來る、惡戯をする、睨んでも仕方がない、それも、子供と思つて控へて居れば、今度は大供が來る、山の神が出かけて來る、尤も、子供を連れに來たことゝ安心すればこは如何に、それを機會に一歩踏み込みながら、一寸僕の隣宅をのぞいて、默つて引き返せば兎も角、文句といふのが先づ斯うだ。

『まア、廣くツてお綺麗だこと……』

言ひながら、づか〳〵隣へ來る、子供は無論隨いて來る、煩さくツて仕樣がない、厭な面をした所で平氣なもの、掛けろとも言はぬにもう腰を下す、お負けに、廣くもなければ綺麗でもないのを、分り切つたこんな空世辭を言ふ、餘計なお世話じやないか。

けれど、之れも未だ〳〵辛抱をする、更らに〳〵、一旦御腰を据えたが最後、てこでも中々動くのではない、例の能辯を以つて喋々と饒舌り立てる、手前共では砲兵工廠へ出て居りますとか、月給二十圓取りますとかと、頼みもせぬに獨りで喋り散して、暗に、砲兵工廠の職工を以つて名譽となし、月給二十圓を以つて誇りとして居るのだ、成程、之れなら僕を職工と見立てたのも強ちに侮辱ではない、が、それも自分の店卸しだけなら、未だしも辛抱は出來るのだが、止したと思つた口は中々に塞がるのではない、今度は隣家の店卸しに移る、それが濟むと又隣家、隣家から隣家と、つまりは長家の全體に及ばなければ止まないのだ、それで、その文句が何かといふに、彼處の家では月給が如何程だとか、家賃が如何程だとか、家内が多勢で困らうとかと、人の疝氣を頭痛に病むのではない、家賃の高下を比較して生活の程度を察し生活の程度を察して人物の高下を卜するのだ、下劣さ加減には驚くじやないか、と言つて、本人には無論感じがない、挨拶するのも面倒と思つて、態と無言で居れば、それを、感心して聞いて居ることゝ、自惚れにも早呑み込みをして、益々増長して饒舌くツて居る、がやがてのことに饒舌り終つて、ヤツと一安心したかと思へば、左樣なら……の下に、何れ又……：の餘計な言葉を添へて、獨りで饒舌りながら、獨りでお辭儀をして、獨りで歸つて往く、て、漸くのこと姿が消えて、耳につく厭な聲を先づ以つて遁れたことゝ、ほッと一息する間もなく、何んぞ知らん、今度は今の今まで惡口を叩いたその隣家で、最う、世辭笑へやら無駄話やらが

始まつて居る、茲に於てか何にが何やらさッぱり分らない、恐らく、其處では僕の惡口が熾んに列べられて居るに違えはない。

この饒舌家の山の神に謗はれた以來、僕は更らに甚しく强硬の態度を持して、二度と逆襲を受けざるべく用心堅固に構へたのが、不幸、この用心も又徒勞に屬したので、甲の山の神を防いだかと思へば、今度は乙の女房がまかりつん出て來て、同じやうな口吻で同じやうな惡口を言ふ、さうかと思へば、其處へ他の長家のものが押しかけて來て、更らに他の長家の惡口を言ふ、要するに、前後左右の長家のもの、甲乙相會せば丙丁の噂さをなし、丙丁相會せば甲乙の棚卸しをするが如くに、表面相接すれば極めて密に極めて親しげてあるが、相離るれば互ひに誹毀し互ひに罵詈して、一日を之れが爲めに費して居る、て、斯かる誹毀や斯る反目も、基く所が何んであるかといふに、たゞそれ、四隣合壁に對して飽までも豪がらんとする虛榮心に過ぎないのだ、否、豪がらんとするのてはなく、豪く見らるるべく勉めるのだ、早く言へば、人の惡口を叩けば己れは豪いものと心得て居る、おらず、豪く見て吳れるものと信じて居る、成程、豪い御量見には相違ない。

斯かる、豪い御量見の方々が、所謂、向ひ三軒兩隣りに、各々陣を張つて、各々出馬に及び、茲に鎬をけづる罵詈や誹毀の舌戰がおッ始まるのだから堪らない、世に、毒舌といふ言葉がある、その出所を糺せば、僕は恐らく之等場末の裏店からと思ふ、が、それは兎に角として、何んの因果か、一種の寬廣ともいふべき物騷な長家の間に介在して、朝夕その顏容に接し、日每にその消息を見聞して居るので、さすがに呑氣な無頓着の僕も、之れを冷然一笑に附し去る程の男氣はなく、何時か、居常の態度や朝夕の出入にも、戰々兢々、只管に山の神連の顏色を犯しつゝあるやうになつたのだから情けない。

女々しと笑ひたまふな、何事のなくてさへ話題に捕へたがる閑間の狀態である、況んや、最初に長家交際を無視した僕、好しや當面に誹侮の毒舌は向けられないまでも、もり蕎麥二ッの怨みは彼等の念頭から長へに去るべき筈がない、見よ、四隣附近の山の神、彼等は常に僕の出入に注目して、鵜の目鷹の目、何等嘲笑の種を見出すべく睨んで居るではないか、更らに見よ、井戸端會議の沉ッ最中、僕偶々到れば、彼等は殊更らに釣瓶を擁して、貴重の時間を徒らに永く立往生の憂目を見せるではないか、思ふて茲に至れば、僅々もり蕎麥二ッの怨みて以つて、暗々の裡、以心傳心、彼等は互ひに皮肉の復讐を常に試みて居る。

勿論、男兒如此きにへこたるべきてはないが、不遇今日の僕、若し夫れ彼等の炯眼に睨まれ、或は僕の常食の時に一片の麵包一本の燒芋なるを知り、或は味噌漉下げての米の小買を悟り、若くば風呂敷包みを提げての質屋通ひなるを嗅ぎ、以つて、僕が秘密の恥を遠慮會釋もなくさらけ出さるゝに至つては、四隣の手前、殊には近所の娘の前、之れが男兒と雖して平然たり得やうか、四隣の手前尙ほ忍ぶべく、近所の娘の前尙ほ胡魔化し得べくも、更らに之れが、界隈の惡まれ者、差配の藥鑵頭の知る所となつては、事態既に容易でない。

この、惡まれ者、叁配の藥罐頭をそも如何なる人とかなす、奇癖、奇行、傳ふべき珍談盡し少くはないが、惜いかな紙數を堅く制限されて居るのだから、玆に一先づ擱筆することゝし、更らに項を改めて、この奇人の奇癖奇行を紹介すると共にもり蕎麥二ッの祟りが如何に無限にして、而して之れが爲めに僕の苦心の如何に甚しかりしかは、追て次號に告白するとしやう』。

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以內葉書に限る▲締切は每月十八日

▲奇想天外

麻布　たの字

前號に陰德か狡猾かと題して、小便無用や通稅無用の貼札は、小便や通稅の避所を示す、極めて好い方法だ、とあつたが、或は然うかも知れぬ、然し嘗て、御嶽山に旅行した時、八王子の町端れに、奇想天外の貼札を見た事があつた、この貼札の爲めに、實は町端れになつたらと思ひ乍ら、來たのであつたが、此札の力は、終に數丁の先き迄、僕をして我慢さしてしまつた、即ち其文句は、「此所犬の外小便すべからず」と書いてあつたのである。

▲馬殿の光榮

神田　茂木

今回設置せらるゝ、馬政局總裁は、親任官だと云ふ評判だが、馬殿の光榮實に想ふべし。吾々庶民も明治治政の御蔭で大部分は改良されたが、未だく自分の姓名をもかけぬ者がある、就學の出來ぬ兒童も少くない。今や馬政局の下に、馬殿を改良せられんとす、其の發達進步の程も、定めし敏且つ大ならん、或は遂に吾人々類と生存競走を試みん。於是乎、吾等は益々奮はざる可らず、吾等は馬殿をも敵として戰ふの用意なかる可らず、嗚呼吾等の艱難實に想ふべし、諸君幸に敗北の運命に遇ふことなかれ。

▲大なる哉新聞紙の功

銀座　珍紛記者

新聞紙の効用は世人新聞記者の思ふよりは更に大なる者なり、讀物として本來の効は記者閣下等の常に說かるゝ所玆に喋々する迄もなし、其本務を盡くして後、包紙となりて風呂敷に代り、牛肉を包んでは竹の皮に代る、敷紙や張物の下張りと成て經師屋に喜ばれ、貧家の壁紙となりては隙もる風を防ぐ、更に南京豆の袋となりて角を尖らし、下ては塵紙の代りに厠に落ちるに至る、千態万狀樣々の効又大ならずや、

▲大は小を兼ねず

本鄉　經濟博士

日本では經濟學の大家として名高い某法學博士が學問に於ては頗る有名な者で、日本の經濟の事なら一人で背負ても宜しい樣な口吻だ、併し理論はうまくも實行は此限りでないのか一家の經濟は頗る紊亂して負債山の如くなるも亦隱れなき事實だ、大なる一國の事は易いが小なる一家の方は駄目だとは、はて大は小を兼ぬると云ふ諺に對して甚だ可笑しいではないか、

▲男曰く女曰く

澁谷　中性先生

男曰く女心と秋の空、
女曰く變り易きは殿御の心、
斯ふ二つならべると何れが眞正か一寸分からない樣ではあるが、之はどちらも眞正だ、互に惡い所を他へ押し付けて自分獨り好い子にならふとしてこんな得手勝手な都合の宜い樣な言をなして居るのである。

▲無用の長物

日本橋　果斷家

東京市中の要所〳〵に建てられた凱旋門は樞要な地にあるだけ交通を妨ぐる事甚だしい、此不便を忍び莫大の費を費やして迄も建てたる目的は、只我忠勇なる將士を迎へんか爲めてある、既に最後の紀念として凱旋大行軍が擧行され迎ふべき人の無にかゝはらず、市民に不便を蒙らしめて猶取拂はないのは何の譯だらふ、一夜造りの靑藥細工、剝げたり毀はれたりして見苦しくならない內に取り拂つて、一日も早く市民の便を計たらよからふ。

▲蚤の力

小石川　臍茶生

僕の弟は妙な奴てある、此間大掃除に手傳はせた時、蚤の力も無いと叱り飛ばした翌朝のことだ、眼をパチクリさせて起きて來て口惜し相に斯う言つた、「今起き樣として俯伏せになつたら御腹の下がモソ〳〵する、ようこそ御出んなれ蚤公だと臍下丹田に力を入れて押しに押したが、如何しても動く、揉ぐつたくつて堪え切れなくつて、そつと浮かしたら平氣の平左てヒョン〳〵だ、僕は本當に蚤の力も無いか知ら」つて。

新刊批評

▲學生座右訓

高須梅溪著
鵜井文店書籍部

多年淸警の想と輕快の筆とて世の靑年諸士には知られて來た梅溪氏が、その靑年の爲に有力なる顧問となり、世路の嶮艱に頓挫なからしめんとの老婆心から編述せられたのてある、酸いも甘いも嘗め盡した氏が半生の閱歷から得來つた思想を、極めて眞率なる態度て發表したものて、敎訓の範圍は頗る諸方面に亘つて居る、氣力の乏き時。趣味の飢えた時、煩悶に惱む時、刹下に此書を繙さば、心行く文字が隨處に現はれることゝ思ふ、宗敎に就いての項其他一二、一概に首肯し難い節も有るが、先づ全體の上から著者の自白通り不健全なところなしとして之を學生諸君の机上に進めることを辭さぬ(定價金五十錢)

▲新氣運

中島孤島著
中島
平民書房發行

中島孤島氏の處女作て、四六版二百六十四頁の長編もの、まだそれが前編といふのであるから、結構の上からは精評を下せないのてある、が何ても矢田部俊二といふ天性執拗な男が主人公らしいので、之が四圍の境遇と事變とに觸れ、年來固持して居た個人主義の信念が危くなり、何等か新生命を慕ふといふので、幾多の煩悶が描かれてある、遂には病院內てトルストイのコンフェッションや、看護婦留子の熱心なクリスチアニチーの信仰に動かされ、導かれ、神に行き、宿命に安んじ、一旦故國

に栖遲して强健なる身體に復するや、平淡なる田園生活に倦んで、又何等かの活動を思ふに至つたといふ處で筆が止めてある、之に搦んで、敗德代議士の魂膽、利己主義の蔓延、戀に呪はれし男女の悲痛と、義理に堰かれし相思の惱みとあり、世相の樣々は清麗なる描寫の筆によつて示されて居る、著者の技能は評論以外此方面にもあると思ふ、がそれは筆だけであつて、全體の結構、雛梅、配置の上に於てまだ缺くる所がある、主なる人物と副人物との權衡は如何であるか、移り變る信念の表出は透明を缺いては居らぬか、留子と矢田部との關係之にも言分は有るが、後編て如何なるか分らぬから言はぬとして、肺病患者の出來星が、容易ならぬ病者の生命を預るなども如何であらう、些々たることには相違ないが、僅の不自然、僅の不用意が全體の上に感興を殺ぐと思ふ、先づは後編を待つとしやう(定價金三十五錢)

▲文學訓　　長谷川天溪著　博文館發行

リユーキス氏の著、サム、プリンシプルス、オブ、サクセツス、イン、リテラチユルを抄譯せしもの、文學全般に亘る諸種の原理が說いてある、世の文學に志すものゝたよるべき好指針である(定價金三十錢)

▲人生問題　　黒岩周六著　丙午出版社發行

勢力主義の主張者たる著者が、精到せる思想を、神、靈魂、自由意思、人道、個人と社會等の諸多の問題に觸れ、奇警なる觀察を交へて論述したものを集めたものである(定價金五十五錢)

▲宇宙の默示　　石川成章著　上宮教會藏版

天然を有益に觀察するに、大別して二通りの仕方がある、一は學的方面よりの觀察、一は宗教倫理的方面よりの觀察であるとし、前者の觀察は一般の科學書に讓り、專ら後者の研究の結果を發表したものが本著である、之を讀めば科學よりして信仰に入るべき自然の徑路が悟らるゝてあらう(定價金七十錢)

▲催眠心理學並附表　　福來友吉著　成美堂發行

催眠心理學のオーソリチーたる福來文學士が其多年大學院にありて研究したる結果を詳述したるものにして、催眠心理學に關する本邦唯一の好著たるは勿論、歐米の學界と雖も之に凌駕せん程の著述あるべきや否や疑なき能はず。菊版八百頁の大著、別に附表一卷を添へ、相對照して一目の下、容易に實驗の効果を知らしむるの便に供す。氏の昨年の著作にかゝる「催眠心理學概論」と雖も本邦の學界には未だ其類を見ざる好著なりしことを紹介せしが、本書は彼よりも一層其文章よく、其學說周密に、其引例豐富に、且つ詳しく實驗法等を揭げたれば、何人が讀みても有益にして趣味多きこと疑を容れず。若し此書の批評に至りては吾人淺學のものゝよくする所にあらず。故に敢ていはず。聞く此書は氏の博士論文に多少の折衷を加へたるものなるが、該論文は元より合格して不日博士號の授與あるべしと。吾人は氏の如き篤學なる人の博士となり、此著の如き價値あるものゝ、試驗に合格すべきことの當然なるを思ふ(樗生)
定價三圓)

▲詩集白羊宮　　薄田泣菫著　金尾文淵堂發行

薄田泣菫氏の長詩六十五章を集めたるものなり。挿畫は滿谷國四郎氏及び鹿子木孟郎氏の、各一枚宛を附し、製本亦美なり。「暮笛集」「行く春」時代の泣菫氏は吾等の如き素人にもよく解せられしが、「二十五絃」、「白玉姫」等に至りては少しく分りにくゝなり、此「白羊宮」に至りては一層朧ろになりたる心地す、思ふにこは氏が漸く象徵派の作風に近けるが爲め、吾人の如き門外漢の窺ふ能はざる高遠なる詩境に逍遙するに至りたるによらん。言語として見、字句として見、音樂として誦し、諧調として味ふれば、意遠くして探長う感ぜらるゝ處少らざるべしとは思はるゝものから、卒讀して詩趣目に溢れ詩情胸に充つる如き思起らぬは吾人の修養の淺き故にや、何となう慊らぬ心地す。されど所謂象徵派に隨喜する人にとつては我國未だ嘗て之に上超す作物なきは勿論、充分熟讀反誦するに値すべし。吾人は正直に自己の詩眼の淺きことを白狀すると同時に作詩十年、未だ嘗て一日も其天職を疎かにしたることなき泣菫氏の熱誠に推服するものなり。(定價一圓)

▲論語講義

根本通明述
早稻田大學出版部發行

根本博士が松平直亮伯の請に應じて論語を講義せられたのを筆記したものである。博士の說によれば今日版本になつて居る論語といふものは非常に誤脫の多いものだ。今此に講義をする論語は應神天皇十六年百濟博士王仁獻ずる所の古寫本で宇宙第一の珍寶だとある。而して一々版本との相違して居る點を擧げてある。又釋義に至ても在來の學者の見と異なつて居る所大分ある樣である。博覽强記を以て鳴て居る博士のことてあるから、中には餘程面白い所もある樣に見受ける。然し吾人は未だ精讀する暇がないから、精讀の上所感を述べて見たいと思ふ(定價一圓八十錢)

▲玉蟲

河井醉茗著
女子文壇社發行

主として女子又は家庭を材として作たもので美文あり、新體詩あり、小說あり、和歌あり、非常の名文名作といふものがない代りに、どれも／＼やさしい、美しい感情に充ちて居るやうに思はるゝ。青葉の下、溪流の畔、讀さ晴しにはよからう(定價六十錢)

▲偉人耶蘇

北澤定吉著
弘道館發行

基督を「人」と見て叙したるもの、體裁、議論共にストーカーの「基督の儀表」に負ふ所多い相てある。描く所家庭に於ける基督、國民としての基督、教會に於ける基督、祈禱、聖書の研究、基督の勤勞、基督の忍耐、基督の友誼、基督の社交、基督の博愛、牧師としての基督、基督の說教、弟子の教育、信仰の擁護の十四章に分ち、尙序論、結論の二文を附してある。且つ聖書より引用せる字句及び事實には一々出所を示して居るから、聖書の智識の低い讀者には至極便利てある。此書の批評に至ては尙精讀の上にして見たいと思ふ。(定價七十錢)

本號は紙數過多の爲餘材欄を省く

附録

夏期學生の讀物

幸田露伴
戸川殘花
坂井久良岐
小栗風葉
尾上柴舟
姉崎正治
塚越芳太郎
巖谷小波
堺利彥
赤堀又次郎
中島孤島
正宗白鳥
畔柳芥舟

野口米次郎
山縣五十雄
登張竹風
前田慧雲
石川半山
綱島梁川
小笠原長生
福本日南
加藤咄堂
足立北鷗
那珂通世
德田秋聲
加藤弘之

釋宗活
村上專精
小杉天外
塚原靖
谷本梨庵
中村不折
伊藤銀月
内藤鳴雪
柳田國男
大槻如電
藏原惟郭
井上圓了
佐治實然

夏期學生の讀物

はしがき

夏期休暇中の學生をして「餘りに艱澁に失せず、輕快なる文字の底に趣味と實益とを併せ酌むべき好簡の讀み物」を得しめんと欲し、「夏期學生の讀物」と題して廣く大家名士の高見を叩きたるに、吾人の請を容れて懇篤なる返書を賜はりたる數、已に百に近からんとす。今茲に其一部を本號附錄として發行し、之を江湖の青年學生に紹介するの榮を得たるは吾人の深く感謝する所なり。尚本號に載する能はざりしものと未だ到着せざる分とは次號の附錄として發表すべし。寄稿せられたる諸先生及び讀者諸君之を諒とせられよ。（編者しるす）

○　幸田露伴

俳諧七部集

讀む者をして腐氣を去り煩縟を脫せしむ之を讀むに肩張らずして之を味はふに味長きものあり。

狂言、謠曲、

一は其のノンキ千萬なるところ、一は其の品位あるところ、悅ぶべし愛すべし。

○　野口米次郎

學業に追はれつゝある學生諸士が夏期休業中には精神の修養專一にて强壯なる快樂第二と成す可しと存候精神の修養には近時日本にても知れ渡れるチャールス、ワグナーの簡易生活宜しく文字平易にて眞率なり一章〳〵取つて以て自家の教訓たる可しと存候同氏の作には其他ゼ、ベター、ウエー(the Bettes way) 又ウエーサイド、トークス (wayside Talks) 有之皆な二讀三讀と價致し候(少々老人じみては居れど日本の鳩翁道話至極結構なる書籍にて日本に於ける德川式のワグナーなりと存候) 現大統領ルーヅヴェルト氏の著書亦青年者流が精神修養には適當なる文字にて常識の上に築かれたるマンリネス(男らしき事)に關する說法ならざるは無しと存候而して强壯なる快樂を得んには ロバート、ルイス、スチーブンソン(Robest Lonis Stevenson)の小說第一に推す可しと存候氏のゼ、トンジュア、アイランドの如きは何時讀んでも面白く感ぜられ申候或は又英米作者の旅行記等を讀んで座ながら外國見物に出掛けるのも愉快にて近時出版せられたるハウエルスのロンドン、フキルムス(London Films)に依つて英京

に遊び又ワートン夫人に同伴して伊太利亞見物も面白しと存候夫人の作にイタリアン、ヴヰラス、アンド、ゼア、ガーデンス(Italian Villas and theis Gardens)有之候又は諸士が舊情を温めんが爲め諸士已に讀みたる英文の書を繰返へすも愉快なるものにてアーヴヰンクのスケッチ、ブックやゴールドスミスのヴヰカー、チブ、ウエーキスフヰールド等は讀めば讀む程愉快なる書物に有之候諸士にして詩を繙かんと欲せば誰彼といふよりはポルグレーブのゴルドン、トレンジユリー一冊を熟讀せられたしと存候此の書物は唐詩選に比適するものにて過去五十年前迄に於ける敍情詩の最大なるものを集めたるものにて御座候風冷かに風景明かなる場所にて之を讀まば夏の暑さを感ぜざる可しと存候。

○ 釋 宗活

内外無限の典籍中如何なるものが好箇の讀物なるや專門内典の中の一部分の書籍をすら精讀せざる衲等が御勸に甘んじ紹介を敢てするは自ら鳴滸ヶ間敷に不堪候へ共折角の御所望止むを得ず從來一讀を試みたるもの丶中最も興味を感じ且つ實益ありと信ぜしもの二三を左に掲申候果して江湖の學友が所好に適するや否や不取敢御挨拶迄申上度如斯御座候不宣

菜根譚 二卷 明還初道人著

此書は明の洪自誠が天才の粹美を以て道德に厚つき處世安神の法を示したるの著なり言々句々禪味を帶び興趣津々盡きざるものあり三伏の候淨机の下平心坦懷以て之を繙かば自ら是れ一服の清凉劑ならんか

夜船閑話 二卷 白隱禪師著

世間此書あるを知る者は多く此書の尊きを知る者は少し衲常に之を憾とす原の白隱自ら試みて精神的疾病を救ひ得たるの故を以て其方法を說きて之を門下に示したるの書なり衲曾て醫師の手を拱したる難治の神經的患者に試み旬日許りにして全癒之を死地より救ひ出せし者既に七八人に及べり世間口耳の學藝にのみ心意を馳せて其中毒を蒙むるもの決して少尠ならざるべし根治を欲せば乞ふ一讀して內觀の實法を試みよ啻に病者而已に非ず無病の人亦た之を實修せば層一層心身の健

全を加へん是も祢の敢保する所なり
尙ほ一二を錄せんと欲せしも餘白なきを以て以上にて擱筆

兩忘道人宗活

○

戸川殘花

學生にも種類可有之小生の如き老學生は
永嘉大師の證道歌
「ウヲルズウヲルス」のエキスカルション
桂園一枝、夏の部
七部集
「松の葉」のやうな小歌
蘇東坡詩集
紅樓夢
など面白く淸風腋下に生ずる趣味厚し蓼喰ふ蟲のすきずきと御承知被下度候

山縣五十雄

○

學生諸君が夏休み中の好き讀み物の一として私は Emile Souvestre の An Attic Philosopher in Paris（英譯）を擧げます、此書は我國に於て飜刻され英語の敎科書として用ひられたこともありますから、容易に手に入れることが出來ませう、又其一部は森田思軒氏内田魯庵氏等の筆によりて反譯されましたが、まだ其全部は出ないやうであります。

此書は或商館の薄給な一書記の淸く美しく樂しき生活を描寫したもので、眞の幸福は大なる富にも高き位地にも在らず、献身的の愛と簡易質素なる生活との中に看出さることを訓へたもので、其敎訓が極めて面白い話のうちに含ませてあるのですから、乾燥なる倫理敎科書を讀むのとは違ひ少しも厭忌の情が起らぬのみか面白くて面白くて幾度讀んでも飽くことはありませぬ學生諸君が綠陰風凉しき所で、此の如き書を熟讀玩味されなば得る所必ず少なからざるべしと私は自分の經驗より確信する者であります

村上專精

○

御尋問之趣其人の性の好む所に依て一樣ならずと信じ候依而御答申上兼候也

坂井久良岐

○

「夏期の讀物」に就いての意見を記せよとの御諚但し實益の所は保證不仕候、あわて者の某、「夏期の飲物」と間違ひ、氷にラムネ、麥酒にブランと惡落ちを思付くなどは、例の川柳式了見とも云ふべく候、川柳をもて唯一の生命とする小子は、夏期も冬期も別に區別は無之、川柳をお詠みなさい、万句合を御覽なさい、德川時代の輕文學、黄表紙洒落本を御覽なさいと申すより外は無之候、詰りは現下の學生の弊は餘りに石部金吉博士、新吾左、武左、淺黄表式に流がれ、紳士として都市趣味の缺乏にこれあり、洒脫の趣味に缺け、シッコイかヤカマシイか、土臭いか、ズボラに過ぐるやう存じ候抔と利口ぶッた事を申上候も馬鹿野郞とお叱りなきやう願上申候

○　　登張竹風

拜復近頃はとんと元氣沮喪沈默庵絕筆居士と申すものに相成候故よろしく御賢察被下度候

○　　小杉天外

御尋の夏期學生の讀物は小生如き讀書人に非る者には殆ど御答する資格なき事と存じ候が修養など六ケしき意味を離れて二三を記せば英文にてはスケッチブック漢文は唐詩選など幾ら讀んでも面白く存じ候日本文の物は數も限りなく孰とも撰定に迷ひ候が差當り小生の小說なども讀やうに依りては美感を與ふると與に多少の實益をも與ふることゝ信じ候取敢ず御返事まで

○　　小栗風葉

御訊ねの趣小生には格別是といふ御答も出來難く候小生自身の學生時代は無論小說を亂讀致し候ものに候へど當時は却て文學がゝりたる物よりは解し易き科學書類を讀むのが樂みに候是は從來其の方の智識乏しかりし爲めも可有之や

何しろ青年學生諸氏に最も宜しからぬは小生の小說の由或ひは可然と存じ候而し近來哲學に關したる讀物を青年に害あるやう申候說も有之やに傳聞候へど小生始め青年學生の智識にて解し得らるゝ程度の哲學書にて直ちに國家の生死問題まで即決するやうなるは能く能くの例外に候へば小生は自分の弟には敢て禁せず候

又妹にも或種の小說は默許致し候

〇 前田慧雲

暑中には餘り理窟ばりたるものよりは修養的にして而も興味あるものを讀む方宜敷歟と存申候左に一二種を紹介可申候

蓮如上人御一代聞書
竹窓隨筆
十善法語
沙石集

〇 塚原靖

御問合之趣拜承學生諸氏が夏期の讀物として平易、輕快、趣味、實益を兼ねたる書籍をとの義に有之候へ共旣に其の一あれば以て良著と稱するに足る況んや此の四美を兼ね併せたる文の如きは小生遽に御答申上げ難く候へ共或は左の二三種の如きは之れに幾しとも申すべき歟。

〇和書にては　讀史餘論　藩翰譜　枕の草子　徒然草

〇漢書にては　五雜俎　隨園詩話　唐初新誌

〇洋書は小生不案内につき不申上候面白きはやはり大デューマの作などと存候へ共如何なものにや。

〇 尾上柴舟

突然の御尋にて、一寸、急に、御答いたしかね候。熟考いたし候はゞ、種々のもの、これあるべく候へども、肩の張らで面白く、且、いくらか、實益のあるものは、矢張、國文の書たるべく候。竹影の婆娑としたる窓の中に、寐ころびながら讀むに、太平記源平盛衰記などの軍記物は、至極よろしく候。しかし、これは、小生の商賣柄、最負目たる事勿論に候。草々、

〇 石川半山

當今學生の多くは讀書力至て乏しく候間和漢洋の良き書物有之候とも之を讀む能はざるべしと存候、當今普通の學生が好んで誦讀する如き粗末なる書物は多くは無用有害に候先づ今日の學生の程度にては雜誌類にて澤山なるべし貴社中央公論若し夏季學生の爲めに特にリーデブルのもの御編輯相成候へばそれにて宜しかるべく候

最後に一言學生間に紹介致したきは故グラッドストーン翁の讀書の方針に候、翁は出版後少くも壹年社會に聲價を保ちたる者に非ずんば讀まざりしに候、眞の讀書家はかく有りたき者にて日々新刊の駄本類幾千万卷讀み候とも何の役に立つべきか、夏季に限らず聖書や論語は讀むべき書にて夏季綠蔭に之を讀めば涼風を生ずべし。

○　谷本梨庵

拜復貴社愈々御盛大奉賀候偖御照會の夏期學生讀物に關する卑見に付ては早速左の五書を推薦仕候是れは孰れも本年に入りての新刊故一入面白かるべく被存候尚ほ登高自卑の階梯に依り候筈故讀者各自の器量に應じ就中選擇成度希望不堪候

(一)前田慧雲氏著「蓮如上人」　井冽堂
(二)中川霞城氏著「俳諧美學」　博文館
(三)吉本　襄氏選「氷川淸話」　有斐閣
(四)秋庭宗琢氏選「澤庵廣錄」　森江佐七
(五)大内靑巒氏述「碧巖集講話」　鴻盟社

右一々說明不致讀者の會得に任度候

○　姉崎正治

御尋ねの件一般に通じたる讀物とて別に考案無之候

○　網島梁川

小生は夏期の學生諸君には人間の書よりも天然の書に親しまれんことを薦めたく、寧ろ彼等が讀みたき本をも拋つて紫明の境にあこがるゝの人たらんことを望み候併し若し何等かの書籍的伴侶の欲しとならば小生はなるべく風雅にして淡白なるもの例へば詩集で申せば一家の全集物よりも名家の短き秀逸を集めたる "Gems of National Poetry" の如きもの、傳記物で申せば近時出版中の "The world Epock Makers." 中の或ものなどはよろしかるべく候若し尙ほ一書を加ふるを許さば朴茂雄渾なる宗教文學として舊約書一卷を以てすべく候他は必ずしも申さず候匆々

○　中村不折

拜啓

暑中休暇の如きは小生は讀書なていふ面倒な事をなさ

んよりは只遊戯するを貴ぶものに御座候强て書を讀まんか何んでも勝手に讀むがよろしきと存候卑猥の小説などを除かば理科工科詩文算術なんてもよろしきと存候、暑中休暇の目的は何にあるや此邊から割出して考ふればよく分り申可きと存候草々

塚越芳太郎

○

夏期讀物として左の二三書を推薦致し候

一史傳類にて吾妻鏡と常山記談
一歌集にて萬葉集と新古今集
一詩集にて李太白集と王漁洋集
一小説にて水滸傳と紅葉全集

此等は幾度繰返しても厭かず覺え申候。

小笠原長生

○

「夏期學生の讀物」としては娯樂の意味を含有することを忘る可らざるを以て一般に專門的、研究的等の書類を强ゆるは本意にあらざるなり叉手娯樂となれば人に好む所甚しき相違あるものにて甲の興味を感ずるもの乙は反つて嫌惡する程のものもあり從つて若干の書名を擧るとも何人にも適合し得べきと殆んど望なきが故に小生は寧ろ各人の好む所の範圍内に於て常識に據り比較的品位高きものなりと判斷したるものを採るを以て得策と信ず但し少くも父母兄弟に對して朗讀し得るものならざる可らず此の覺悟を忘れずば其種類の如き左まてやかましく云ふにも及ばざるべし然らざれば恐くは娯樂の精神に悖らん。

伊藤銀月

○

拜復。これぞと云ふ考へ無之候間小生が去年の夏季海岸に遊びし時携帶せし書籍數種を列擧いたし候。但しこれが學生に趣味と實益とを與ふるものなるや否やは保し難く候。

▲バイロン　▲海賊　▲唐宋詩醇抄
▲ラスキン　▲碧巌錄

巌谷小波

○

別にこれぞと申して摘出する書目は一寸思ひ當りません。然し夏期學生の讀物としては、近日出版すべき拙著

「笑の國」をも、その一に加へて貰ひ度いのです。

〇　福本日南

文學の青襟諸子に勸む。行ひて餘力あらば、アストンの「日本文學史」を讀め。關鍵手に落ち、鎖鑰戛として開け、我二千餘年の斯文、爾の眼前に煌々たらん。

〇　內藤鳴雪

謹復御尋之件別に好き案も無之候得共我邦の古戰記（假名交り）は趣味もあり風流も籠もり又元氣も引立候間男女生に限らず披讀候はゞ壹寐の目醒し且數服の清涼散に當るべくと存候右匆々不一

〇　堺利彥

予は予の社會主義者たる地位よりして、「餘りに艱澁に失せず、輕快なる文字の底に趣味と實益とを併せ酌むべき好個の讀物」として Edward Bellamy の名著 Looking Backward を推薦す、此書は社會主義の行はれたる世の社會組織を示した小說で、米國だけでも五十萬部を賣盡したと云ふ、假綴の本ならば一部廿五錢位で丸善か中西屋にあります、又小生は此書を抄譯して「百年後の新社會」と題し、麹町區元園町の廿七由分社より發行して居ります價一部五錢。

〇　加藤咄堂

拜誦旅行中御返事遲引いたし候、學生と申し候にも種々これあり候へ共中學程度として

志賀氏日本風景論

などが尤も適當かと存候。精神修養に關するものとしては

菜根譚

の如きものよろしきかと存候小生は夏期旅行中いつも碧巖集と東坡詩集とを携へ候。頓首

〇　柳田國男

同じ本を重ねて讀むことが少ないから、愛讀書と言つても種類を以て申上る外は有りませぬ、此夏幸に暇が出來て田舍へでも行くなら、東洋諸國の風土記旅行記などを持つて行きたいと思ひます、戰爭中から段々此種の本も見ましたが、三年も五年も前の著作では興味

も少ない文章が氣が利かなかつたり、又は惡落ちが多かつたりして、つひ中程で罷めたものも隨分有ります、近頃讀だ中では

Irvine and Alpers: New Zealand.
Irland: Far Eastern Tropics
Olufsen: Through Unkuown Pamir

などは面白いと思つて僅な日數で見て了いました、外國人の日本記はあまり趣味を有ちませぬ、紀行は讀者をして身其境を行くが如く感ぜしむるのが上乘なので、夫には又讀者の方でも多少の用意を以てかゝらねばならぬ、殊に地圖は本に附いて居なければ必ず良いのを側に置かねばなりませぬ。

西洋の脚本は評判を聞いては少しづゝ讀みますが、まだ御話をする程のこともありませぬ。

日本の本ではよく讀む本が三つ四つあります、多くは時代々々のアネクドオツ樣のもので、何の爲に好ましいか自分にもよく分りませぬが、文章が寫實で活々として居るのが嬉しいのと、一つには遠い祖先の抱いたり表はしたりした感情が鮮かに眼前するのが、唯の歴史では得られない趣味で有るからでもありませう、其中でも

日本靈異記　漢文ではありますが、ナイヴな書き方で、讀めば讀むほど奈良朝の生活が身にしみます、群書類從本は容易に手に入ります。

今昔物語　無論本朝の部に限るので、中にも筆者の時代に近い記事が面白い、澤山な篇數ですから文章の巧拙が著しく有ります、此時代の言文一致であつて、最優れたものになると、寫實に寸分の隙も無く、讀むて居ると自然に泣いたり笑つたりせられます、此類の書には拾訓抄、著聞集古事談などもありますが、とても之には及びませぬ、又宇治拾遺はこれがあれば全く不要です。史籍集覽本、丹鶴叢書本、國史大系本が坊間に有ります。井澤の出版した平假名本はいけません。

砂　石　集　僧徒の手に成つたものではあるが、世の常の往生ものゝ類とは異り、精彩に鎌倉時代の生

活が描寫せられてあります、田圃に糞を運ぶ農夫を見て、何故に仁王經を掛けぬかと言つた上人の話などの如き、悠然たる滑稽もあります、古い版本がいくらも有ります。

狂　言　記　これも同じ趣味を以て愛讀します、こしらへた物ではあるが、穿ちに近い程の寫實で、もし此本が無かつたら、足利時代の小さな人民の小さな感情は、とても不朽にならなかつたであらう。幸田氏の校訂本がある。

徳川時代の著作では西鶴の短篇集、氣質もの、近松の世話物、道話の類も亦同じ考からよく讀みます、名にし負ふ西鶴近松もこんな讀者にかゝつては往生であらう、常山紀談は少年の頃二三度も通讀し、今でも若い人には進めます、すべて「文章を書く」といふ氣で無く、唯書いたものに愉快な文章が多い、文章家なんて云ふ者は落語家のやうなものだ、作文法を穿鑿する人に限つて、ゆかしいやうな著作は一つも無い、併し雜誌「ほとゝぎす」の雜文などは此例外であらうか、中にも氣取らない記事文には心持の良いものが多い、私は此の古雜誌を藏つて置て時々夜讀みます。

○　赤堀又次郎

十五日付御端書拜見御尋の旨承り候「夏期學生の讀物」としては小生は

「辭書」を指定致し可申候、何種の學生に限らず辭書なれば、餘りに艱澁に失せずとも存候、寄宿舍とか云ふ牢屋の隣に生活する學生にも趣味を酌むを得べくと存候、如何なる種類の實益をも得らるべくと存候且つ長き休暇の間に多く讀むにも少しく讀むにもよろしかるべくと存候辭書は其人のこのむものにてあれば何にてもよろしかるべく候。

○　足立北鷗

拜復

小生は我邦人の對症療法として何事にも淸、新、大、の三條件を備ふるものを奬勵致度と存居候、従て第一の條件の爲めには詩集歌集など宜しかるべく、第二の條件の爲めには過去現在のものより將來の理想、希望、

計畫等を述べたる書籍宜しかるべく、第三條件の爲めには偉大なる人物の閱歷事業等を記したる本宜しかるべくと存候、御來書には『夏期學生の讀物』と有之候へ共小生は春夏秋冬を通じて前陳の如き書籍を青年に讀ましめ度きものと相考へ候。右御答迄草々頓首。

○ 大槻如電

曾て御交際なき御方の御申込は一切不應るべく候殊に活版の十把一カラゲの御取扱には恐縮仕候

○ 中島孤島

拜復夏期の讀物をとの御尋ね突然にて一寸充分のことは申上げかねれど先々肩の張らぬあつさりしたものでは蘆花君の「自然と人生」等然るべきか、藤村君の詩集もはゞアンデルゼンやハーン等の作中のあるものに見るやうな夢幻的の然かも無邪氣な、美くしいものが欲しい、欲しいがどうも然ういふものが見當らぬやうてす。

○ 那珂通世

暑中休暇は勉強するよりも旅行するがよいと思ひます爾餘細々と申述べることは私にはありません。

○ 藤原惟郞

拜答小生が夏期學生の讀物として紹介し度書物はルーバック氏の人生の快樂(Pleasures of Life)と室鳩巢の駿臺雜話の兩書に御座候。

○ 正宗白鳥

折角のお尋ねに候が見聞の狹き小生何ともお答へ申上兼ぬ候不惡御宥下されたく

尙好箇の讀み物については小生自身に諸大家先生の高見を承りたく存じ候折柄貴社の御盡力にて誌上にこれを伺ふを得るは何よりの幸と今より待居り候

○ 德田秋聲

貴問拜承仕候へども是は小生如き懶惰者流の能く答へ得るところにはあらず候。然し小生の淺薄なる考よりすれば、輕快なる文字の間に純なる趣味を掬し得るものは近來の作品にては「運命」などよかるべく、小生が若し十七八の學生ならばピカードオフウエキフヰルドの類、二十三四の青年ならばツルゲネフの著作など撰

て、其の淡々として清新の趣味溢るゝがごときやさしき文章に夏の苦熱を忘るゝことを得べしと考へられ候。

○　井上圓了

拜啓「學生の讀物」に付卑見申述ぶる樣委細承知仕候然る處拙者は神經衰弱の爲に四月以來地方へ療養に罷越昨日歸京仕候へ共讀書又は起稿に取掛る事だけは成るべく差控居候に付甚だ勝手に候へ共此度は御免を蒙り度此段願上候也。

○　畔柳芥舟

夏期の學生は自然に親しむがよいてしやう、自然に親しむには先哲の遺訓を參照するがよいてしやう、此種の書物は色々ありますが一夏一冊が精々てしやう、有名なる書物て代價が安くて、容易に丸善て買ひ得るものて、といふ條件て考へて見たならば、そうてすなあ、The Scott Library(七十五錢)のうちのthoreauを撰んでは如何てすか、水に行く人は其 A Week on the Concord を、山に行く人は其 Walden を、都門に停まる人は其 Essays を、――これは稍高等なる學生の第一學年て

す。

○　加藤弘之

夏の讀物は好む所にて差支なし但し此頃の小說は先づ讀まぬ方可ならん。

○　佐治實然

「夏期學生の讀物」としては小生は英學の出來る人にはナショナルリーダーの三四位の處パリーの萬國史など世の中に忘れられたるものを枕の代りにして折々手當次第に何處ても讀むが一番おもしろきやに存候又漢學の力ある人は孟子莊子の類尤も宜敷かるべしと存候又宗教趣味のある人には慈雲律師の十善法語日輝上人の妙宗本尊辨日蓮上人の觀心本尊鈔など申すものよろしからんと存候小生は總て高等の學科を研究するほどの學生には右の三種類を手當次第に朗讀し倦來れば樹陰に休むべく興來れば海邊に散歩すべく而して天然か與舒せる活書籍に心眼をふるゝこと何より愉快なるべしと存候。

此廣告によりて御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京
春陽堂新刊

廣津柳浪著

繪師の戀

河村清雄鏑木清方画

後編新刊

柳浪氏が特得の筆は本編を描くに於て眞に絢爛の妙を極む其戀や金露玉漿其情や斷腸悲切蓋し近來の一大雄篇也



前編金六十五銭
後編金六十銭
郵税各八銭

後藤宙外氏
青柳有美氏
山方香峯氏
小杉天外氏
內藤湖南氏
序

安藤和風氏編

俳家逸話

實價金四拾錢
郵稅金六錢

本書は俳諧の典故に通ずる事最も深き安藤和風子の輯錄する所、近古俳家の性行は殆んど卷中に活躍せり、或は豪放、或は磊落、或は淸廉、或は纖細、百家千態一樣ならずと雖も、名家の事蹟は之を聽て其風格を味ふに趣味頗る多きものあり、本書の如き眞に之れ明窓淨几の好友と稱ふべし

東京日本橋
春陽堂發兌

布施知足譯

簡易生活

全一冊 * 定價三十錢 * 郵税四錢

第二の聖書と迄評されし稀有の良書

近來米國大統領ルーズウエルト氏の愛讀書の一

非常の好評を博し

二月初版を發行して早くも

四版を重ねたり

煩悶を脱し、幸福を得、樂しき生活を送らんことを欲する士女は一讀せられよ

▲●婦女新聞は曰く……譯文は極めて輕快にしてさながら小說を讀む如く何の苦もなく讀み終らしむ……

▲●中央公論は曰はく 其記さるゝ所は確かに時弊に適中して人をして反省せしむる所少なからず……

▲●家庭之友は曰く……譯文は極く平易に、面白く書いてあります故、どなたでも讀んで興味を感ずることが出來ませう……

▲●萬朝報は曰く 原書は米國に於て第二の聖書と評判されし程にて其の發賣部數極めて多く、且つ他國語にも飜譯せられて歐洲各國にも汎く愛讀さるゝものなりといふ、之を日本文に譯する本書を始めとすべし、當今驕奢の生活の徒らに複雜にして知つて心神を苦惱せしむる所以なるを說破し、單純なる生活の最も平和安樂なるを宣言して文字は平易なるも理想は極めて高く極めて純なり、如何なる家にても一本を供へて朝夕讀み味はば必らず大なる益あるべし

▲●大阪毎日新聞は曰く……近時英米の讀書社會において非常の好評を博し第二の聖書と迄稱せられたる佛人ワグナー氏の「ザ、シンプル、ライフ」の譯本なり、書中說くところの事、皆一々時弊に的中して徒に煩瑣複雜の事繁くなり奢侈の風上下を通じて淺間敷迄に亂れ行く現時社會の病弊を救ふに足る適切の文字に富めり、譯文輕妙暢達解し易ければ一讀すべき良書なり

▲●丁西倫理會講演集記者は曰く 本書は米國大統領ルーズヴエルト氏を始め、歐米讀書界に於て持て囃されたる近來の一名著なる事既に世の知る所なり。原著は"The Simple Life," by Charles Wagner といふ。其大體の主意は現今の複雜、纎巧、虚僞の世の中を去りて、單純、素朴、眞實に復れ、其處に始めて人生の眞味を味ひ得べしと教ゆるにあり。曩日手島精一氏の米國より歸朝するや、記者問ふに彼の地如何なる好書あるやを以てせり。而して當時氏亦た此の書を其の一に擧げられたり。因りて一たび借覽して、記者亦其文明の弊に鑑みて、安價に高尚に一生を送るの方法を說くに於て、頗る適切の敎なるを知れり。譯書の製本は其敎と伴ふて、簡易素朴なり。ツマラヌ物にも裝釘に意匠を凝らす當時の風潮に反して、一見見すぼらしと雖も、行文流暢毫も拮据の所なくすらすらとして分りよく、小說を讀むの味あり、譯し得て好しといふべし。吾人は一般學生、及び家庭の讀み物として、又た金屋裏にありて不潔、憂悶、厭倦に苦む者の解毒藥として之を推薦する者なり。

發行所 東京市神田區表神保町十番地 東西社

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一部長短十三篇、道話あり史論あり、隨感錄あり、修養談あり佛教の要義、宇宙人生の眞相を道破し倫理道德の大本を指示す苟も人生問題に煩悶するもの心靈修養に志ある者は本書を讀め蓋し道味の津々たるものあらむ

道味一嘗

全一冊三百頁
洋裝美本
定價金四拾五錢
郵税六錢

文學博士前田慧雲先生雜集

◉四月二十日新刊發賣◉

發行所 東京本郷區眞砂町 大樹園

賣捌 神田東京堂 中橋文榮閣 京都西六條 興教書院 ＝ 其他全國各地書林

◉再版廣告

坪内逍遙序
木下尚江

中島孤島作

小説 新氣運

▲定價參拾五錢 郵税不要

◉日々人生問題日々家庭問題

日々社會問題 現代を流るゝ一切の思想はまた本篇を流る。

◉本篇に著るしき色を染むるものはトルストイ翁の思想也

●發行所 東京本郷弓町 平民書房

中央公論價表

[illegible]	金拾五錢
六冊	金八拾五錢
十二冊	金壹圓六十五錢
郵税共	

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は一部郵税六錢を要す

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし

一弊社は振替貯金（三四〇四）に加入いたし居り候間振込用紙御入用に候はゞ御申越被下度候

一郵券代用の場合は必ず壹割増のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらざれば御需めに應せず

一前金切の節は帶封に朱書いたすべきに付早速拂込まれたし然らざれば其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべきに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年五月廿八日印刷
明治三十九年六月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）　反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場